

秋田城跡調査事務所年報2013

# 秋 田 城 跡



秋田市教育委員会  
秋田城跡調査事務所

秋田城跡調査事務所年報2013

# 秋 田 城 跡

秋田市教育委員会  
秋田城跡調査事務所



## 序 文

平成25年度の秋田城跡発掘調査は、焼山地区において2箇所で実施し、奈良時代から江戸時代にかけての遺構・遺物が発見されるなど、多くの成果をあげることができました。

第102次調査では、第92次調査で発見されていた外郭西門に取り付く外郭区画施設を発見し、秋田城の構造を知る上で重要な知見を得ることができました。また、第103次調査では、中世後期の土塁跡等を発見し、高清水丘陵は、古代だけでなく中世後期においても重要な地点として利用されていたことが分かりました。

これらは、史跡の保護・整備・活用を行う上で必要不可欠な情報であり、今後焼山地区の更なる把握に努めたいと考えております。

また、環境整備事業につきましては、政庁域と外郭東門周辺を繋ぐ城内東大路の復元を継続して実施するとともに、大畠地区見学者用トイレ周辺の多目的広場の整備を行い、来訪者が史跡に訪れ易くなると期待しているところであります。

このように秋田城跡の発掘調査と保護管理、環境整備事業が順調に進んでいることは、文化庁および秋田県教育委員会はじめとする関係機関や環境整備指導委員会委員、そして地元住民の皆様の多大なるご指導・ご協力の賜物と、心より深く感謝申し上げます。

平成26年3月

秋田市教育委員会

教育長 越後俊彦



# 秋田城跡調査事務所年報2013

## 目 次

### 例言・凡例

I 調査の計画と実施状況.....	1
II 第102次調査報告	
1) 調査経過.....	2
2) 検出遺構と出土遺物.....	6
3) 基本層序および各層出土遺物.....	31
III 第103次調査報告	
1) 調査経過.....	45
2) 検出遺構と出土遺物.....	45
3) 基本層序および各層出土遺物.....	53
IV 考 察	
1 第102次調査について .....	58
2 第103次調査について .....	69
V 秋田城跡環境整備事業.....	74
VI 秋田城跡保存活用整備事業.....	76
VII 秋田城跡現状変更.....	78
写真図版.....	79
報告書抄録.....	112
秋田城跡調査事務所要項.....	113



## 例　　言

- 1 本書は、平成25年度に実施した秋田城跡第102次調査および第103次調査、秋田城跡保存活用整備事業、秋田城跡環境整備事業、秋田城跡現状変更の記録を収録したものである。
- 2 本書の編集は松下秀博、伊藤武士、神田和彦があたった。V章を松下秀博、それ以外を神田和彦が執筆した。
- 3 遺物の実測・トレース、遺構図の作成およびトレースは、神田のほか、整理員の森泉裕美子、伊藤雅子、阿部美穂があたった。
- 4 遺構・遺物の写真撮影は、神田があたった。
- 5 本調査で得られた資料は、秋田市教育委員会で保管している。
- 6 発掘調査では、以下の方々や関係機関から指導・助言を賜った。記して感謝したい。

新野直吉、岡田茂弘、渡邊定夫、田中哲雄、今泉隆雄、木村 勉、笠原信男、平川 南、林部 均、福宜田佳男、吉野 武、船木義勝、小松正夫、高橋 学、武藤祐浩、五十嵐一治、榎原滋高、堀 裕、村田晃一、齋藤和機、佐藤敏幸、武井紀子、及川 規、根岸 洋、田中広明、安田忠市、文化庁記念物課、国立歴史民俗博物館、奈良文化財研究所、宮城県教育委員会、東北歴史博物館、多賀城跡調査研究所、秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター（敬称略・順不同）

## 凡　　例

### 遺　物

- 1 土器の断面を黒く塗りつぶしたのが須恵器である。
- 2 土器の性格の相違は、下記のスクリーントーンで表現した。

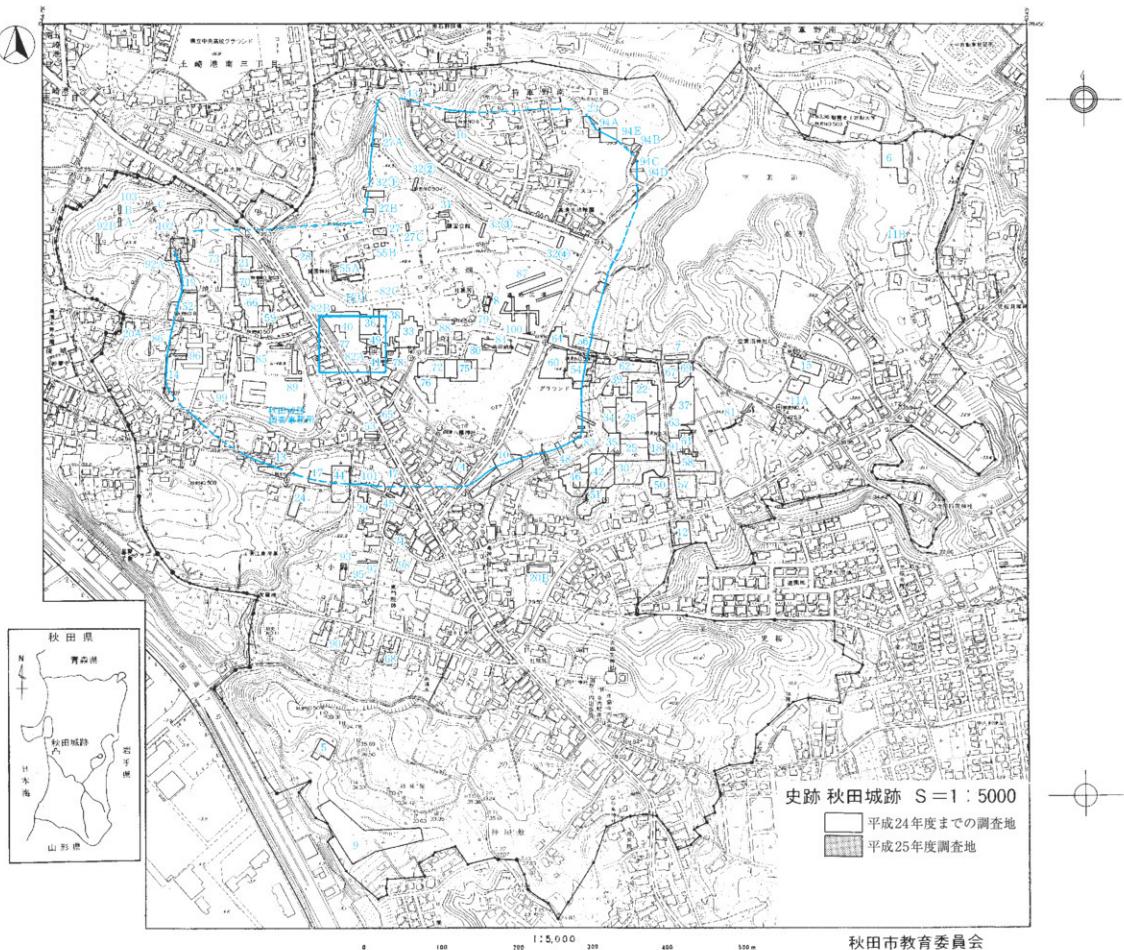
黒色処理 転用観
- 3 土器の調整技術や切り離し等の表記は、下記のとおりである。
  - ・回転利用ケズリは、ケズリ調整と記載。ケズリ調整以外の調整はその都度別記。
  - ・ロクロ等広い意味の回転を利用したカキ目調整は、ロクロ利用のカキ目調整と記載。
  - ・切り離し、粘土紐、タタキ痕跡等、成形時痕跡の消滅を目的としない軽度な器面調整痕跡は、軽い撫で調整と記載。成形時痕跡の摩減を目的とし、痕跡が一部残るもの撫で調整、ほとんど痕跡を残さないものを丁寧な撫で調整と記載。
  - ・底部回転ヘラ切りによる切り離しは、ヘラ切りと記載。底部回転糸切りによる切り離しは、糸切りと記載。底部回転以外の切り離しはその都度別記。
  - ・遺物実測図の縮尺は、瓦は1/4、銭貨1/2、その他の遺物は1/3とし、それぞれ各図面に縮尺を示した。写真的縮尺は瓦約1/4、銭貨約1/1、その他の遺物は約2/5とした。

### 方位・測量原点

文章中の方位と方向を示す東西南北は、遺跡全域に設定された発掘基準線に基づく真東、真西、真南、真北を示す。

遺跡の測量原点は、外郭範囲内のはば中央にあたる政庁正殿東の任意点に埋標されている。その原点から真北を求めた南北基準線を定め、これに直交する東西基準線を定めて、座標軸を設定している。報告においてE・W・S・Nと共に示された数値は、測量原点からの座標上の位置、東西南北の距離を示す。測量原点は世界測地系座標で、X = -28562.592、Y = -64607.889である。





第1図 秋田城跡発掘調査位置図

## I 調査の計画と実施状況

平成25年度の秋田城跡発掘調査は、第102次調査および第103次調査を実施した（第1図）。

発掘調査事業費は、総事業費（本体額）980万円のうち国庫補助額490万円（50%）、県費補助額49万円（5%）、市費441万円（45%）である。調査計画は、下記表1のように立案した。

表1 発掘調査計画

調査次数	調査地区	発掘調査面積m <sup>2</sup> （坪）	調査予定期間
第102次	焼山地区北部	700m <sup>2</sup> (212.12)	4月15日～8月30日
第103次	焼山地区北西部	250m <sup>2</sup> (75.76)	9月17日～11月8日
計		950m <sup>2</sup> (287.88)	

発掘調査に伴う現状変更許可申請について、平成25年1月22日付け教文第387号で申請し、平成25年2月27日付け24受庁財第4号の2068で許可された。

平成25年度の発掘調査は、焼山地区北部および焼山地区北西部の2箇所を調査対象とした。

第102次調査地は焼山地区北部、政府の北西約200mの外郭線北西隅にあたる場所である。第92次調査A区と第19次調査によって、調査地南西部および南側では外郭西門および外郭区画施設が確認されている。外郭西門に取り付く外郭区画施設（外郭北西コーナー部）の実態把握と今後の環境整備事業に向けて、調査を実施した。調査の結果、外郭西門の各時期における外郭区画施設を発見し、外郭北西コーナー部の状況について新たな成果を得ることができた。全体として、外郭西門跡柱掘り方8基、材木列堀跡1条、柱列堀跡2条、築地堀跡2基、溝跡2条、井戸跡1基、土取り穴4基、土坑14基の他、近世以降の掘立柱建物跡1棟、溝跡2条、土取り穴2基、歎跡等が検出された。

第103次調査地は焼山地区北西部、政府の北西約300mの城外北西部にあたる場所である。第92次調査地B区において、中世の土塁区画施設と小規模な城門跡が発見され、焼山地区北西部が古代以外に中世にも利用されていたことが判明し、当該地周辺の利用実態を把握するために、調査を実施した。調査の結果、第92次調査で確認されていた北側土塁の延長部を発見し、土塁の構造および年代が同一のものであることが確認でき、当該地の中世後期における利用実態について新たな成果を得ることができた。全体として、土塁跡2基、材木堀跡1条、土壤墓4基の他、近世以降の溝跡、歎跡が検出された。

平成25年8月7日に文化庁記念物課福宜田佳男主任文化財調査官の調査指導を受けた。

平成25年8月24日に第102次調査の現地説明会を開催し、90名の参加者があった。

平成26年1月16日に多賀城跡調査研究所笠原信男所長、吉野武主任研究員の調査指導を受けた。

平成25年度の発掘調査実施状況は下記表2・第1図のとおりである。

表2 発掘調査実施状況

調査次数	調査地区	発掘調査面積m <sup>2</sup> （坪）	調査実施期間
第102次	焼山地区北部	726m <sup>2</sup> (220.00)	5月20日～9月26日
第103次	焼山地区北西部	77m <sup>2</sup> (23.33)	10月9日～11月7日
計		803m <sup>2</sup> (243.33)	

## II 第102次調査報告

### 1) 調査経過

第102次調査は外郭線北西隅にあたる焼山地区北部を対象に、平成25年5月20日から9月26日まで実施した。調査面積は726m<sup>2</sup>である（第2図）。

調査地は政庁から、北西約200m、外郭西門およびその北東の隣接地点である。第102次調査地周辺は、これまでの調査により、調査地の南西部に外郭西門跡、南北に延びる外郭西辺の築地塀等が発見されている。第92次調査A区（平成20年度）では、外郭西門跡が発見された。外郭西門跡の平面規模は桁行3間、梁間2間の規模で、掘立柱式の八脚門であり、6期の変遷が確認された（I期～VI期）。この6期の変遷は政府遺構期のI～VI期と対応している。

第19次調査（昭和51年度）・第52次調査（昭和63年度）・第86次調査（平成17年度）・第14次調査（昭和49年度）では南北方向に築地塀が確認された。また第19次・52次・86次調査では築地塀の上に柱列塀が掘り込まれていることが確認されている。築地塀は第19次調査地では北でやや西に振れており、外郭西門方向へ伸びる。第19次・52次調査では、沢状の地形に造られた築地塀であるため、遺構の遺存状態がよく、築地塀が高さ2mも遺存している場合がある。また、第19次・52次・14次調査では柱列塀をまたぐ形で横跡（1間×2間）が1棟ずつ、合計3棟確認されている。

第21次調査（昭和52年度）・第66次調査（平成8年度）・第70次調査（平成9年度）・第73次調査（平成12年度）では、規則的な配置に基づく掘立柱建物群が確認された。規則性をもつ掘立柱建物跡は、A～C類の3種類に分類され、A類は8世紀第2四半期（政府I期）、B類が8世紀中頃～8世紀末・9世紀初頭（政府II期）、C類は8世紀末・9世紀初頭～9世紀中頃（政府III～IV期）と考えられており、倉庫群である可能性が指摘されている。

今回調査を行った第102次調査地は、地形は北東から南西に傾斜しており、また近年まで宅地および畠地として利用されていた場所であるため、地形は削平を受けている。現在は更地となっており、外郭西門に取り付く外郭区画施設（外郭北西コーナー部）の実態把握と今後の環境整備事業に向けて、調査を実施した。

調査区は外郭西門跡が発見された第92次調査地A区を取り込む形で調査区を設定した（東西24m・南北30m）。また、遺構の検出状況に応じて、拡張トレンチを2箇所設定した。当初の調査区から7.5m離して設定したトレンチを「拡張トレンチ1」、当初の調査区に接する形で設定したトレンチを「拡張トレンチ2」とした。以下、当初設定した調査区を単に「調査区」とし、拡張トレンチをそれぞれ「拡張トレンチ1」、「拡張トレンチ2」と呼ぶ（第3図）。

調査方法は面的掘り下げを行い遺構の検出確認を行った後、検出遺構については、時期等遺構内容の把握が必要なものについて、保存に留意しながら半裁またはベルト等を残す形で遺構調査を行った。

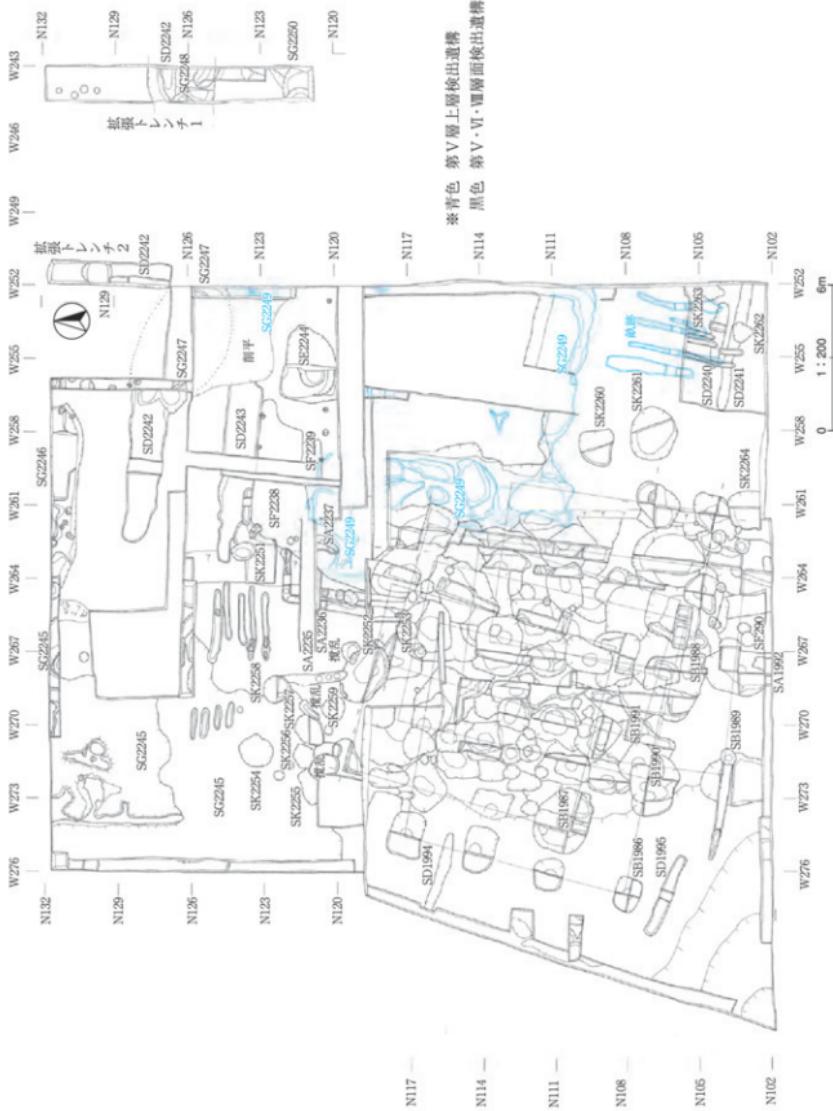
調査は、まず調査地周辺の草刈り、基準杭測量、調査区の設定、調査機材の搬入、重機による表土・造成土除去作業を行った。並行して、人手による表土・造成土の除去・第92次調査A区の埋め戻し土の除去・平面精査を行い、近世～近代の造成土であると考えられる第II層を確認した（5月20日～6月6日）。第II層上面において、近世～近代にかけての歴跡、掘立柱建物跡（SB2234）および土取り穴（SG2249）上面を検出し、記録化を行った（第3図黒線、6月7日～6月24日）。記録化の後、第II層を掘り下げ、北西調査区で近世造成土である第III層を確認した（6月25日～28日）。北西調査区で



第2図 第102次調査周辺地形図



第3図 第102次調査地検出遺構図①



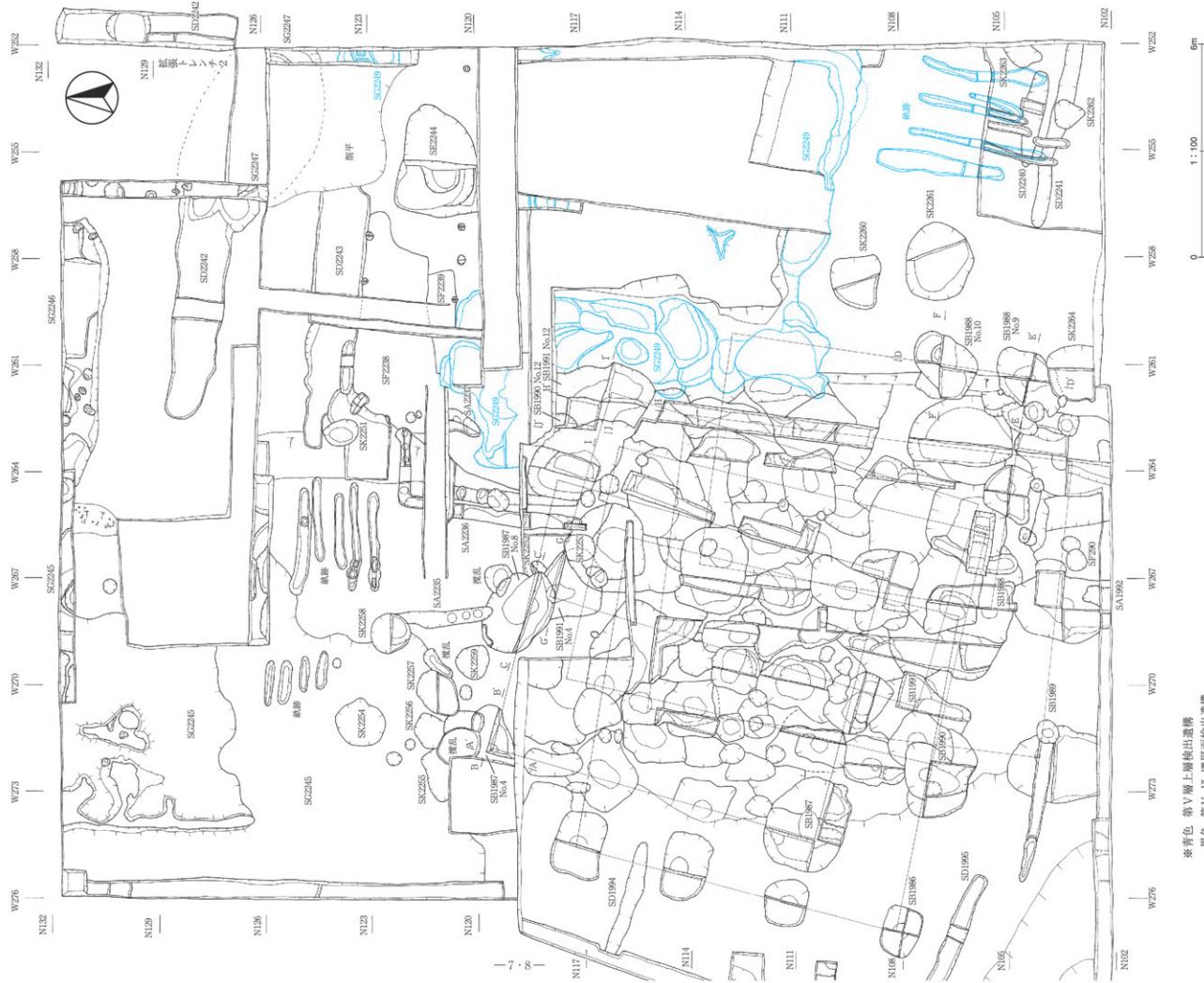
第4図 第102次調査地検出遺構図②

は、第Ⅲ層上面で溝状の遺構が検出され（第3図赤線）、記録化を行った後に、第Ⅲ層を除去した（7月1日～7月17日）。北東調査区および南東調査区では、古代整地層である第V層を確認した。また古代整地層のV層が削平を受けている場所では、地山飛砂層である第VI層、地山腐植土層である第VII層、地山粘土層である第VIII層が確認されている。北西調査区では、近世造成土である第IV層が堆積しており、それを除去し第V層面を確認し精査を行った（7月18日～8月7日）。精査の結果、調査区北側でSB1987 No.4・No.8柱掘り方、SA2235～2237、SF2238・SF2239の上面、SD2242、SE2244、SK2251～2259、SG2245・SG2246を検出し、また、SB1989 No.8の掘り方の再検討を行った。調査区南西側ではSB1988 No.9・No.10の柱掘り方、SK2260・SK2261を検出し、平安期遺構が確認された状況となつた。また、必要に応じて北側・西側・北西調査区中央にサブトレーンチを設定し、土層の堆積状況を確認した。8月7日には文化庁記念物課の福宜田佳男主任文化財調査官の現地指導を受けた。またこれらと並行して、築地盤の延長線を確認するために拡張トレーンチ1・2を設定し、表土除去を行い（7月22日～23日）、第II層耕作土掘削の段階で小学生向けの発掘調査体験を開催した（7月27日）。第V層の平安期遺構の検出段階での写真撮影・実測作業の後、保存に留意しながら記録が必要な部分について遺構の掘り下げおよび記録化を行った（8月8日～8月23日）。この時、近世陶磁器が出土したSG2249を必要な部分を掘り下げ、SB1991 No.12の柱掘り方を検出した。8月24日には、平安期遺構の掘り下げおよび奈良期遺構の一部検出した状態で、現地説明会を開催し、90名の参加があった。平安期遺構の掘り下げ後、記録化を行うとともに、拡張トレーンチ1・2においてSD2242の延長を検出し、SG2248・SG2250を確認し、記録化をおこなった（8月26日～9月10日）。その後、奈良期の遺構追求のため、必要な部分において平安期整地層（第V-1～5層）を除去し、SB1991 No.8掘り方、SD2240・SD2241、SK2262・SK2263を検出した。また、北東調査区では第II層の造成土が残っていたため、それを除去し、SF2238・SF2239をはっきりと確認するとともに、SD2243、SB1991 No.8の柱掘り方を検出し、記録化に必要な部分のみ半裁を行い記録化を行った（9月11日～25日）。SD2243は半裁の結果、出土遺物から近世遺構であると判断された。また、北東調査区にサブトレーンチを設定し、掘り下げを行いSG2247を検出し、古代遺構の記録化を行った（第4図）。全記録化を終了した後、調査区全体に砂を厚さ約1cm程度敷いた上で埋め戻し、調査機材の撤収、埋め戻し後の全景写真を行い、9月26日に調査を終了した。

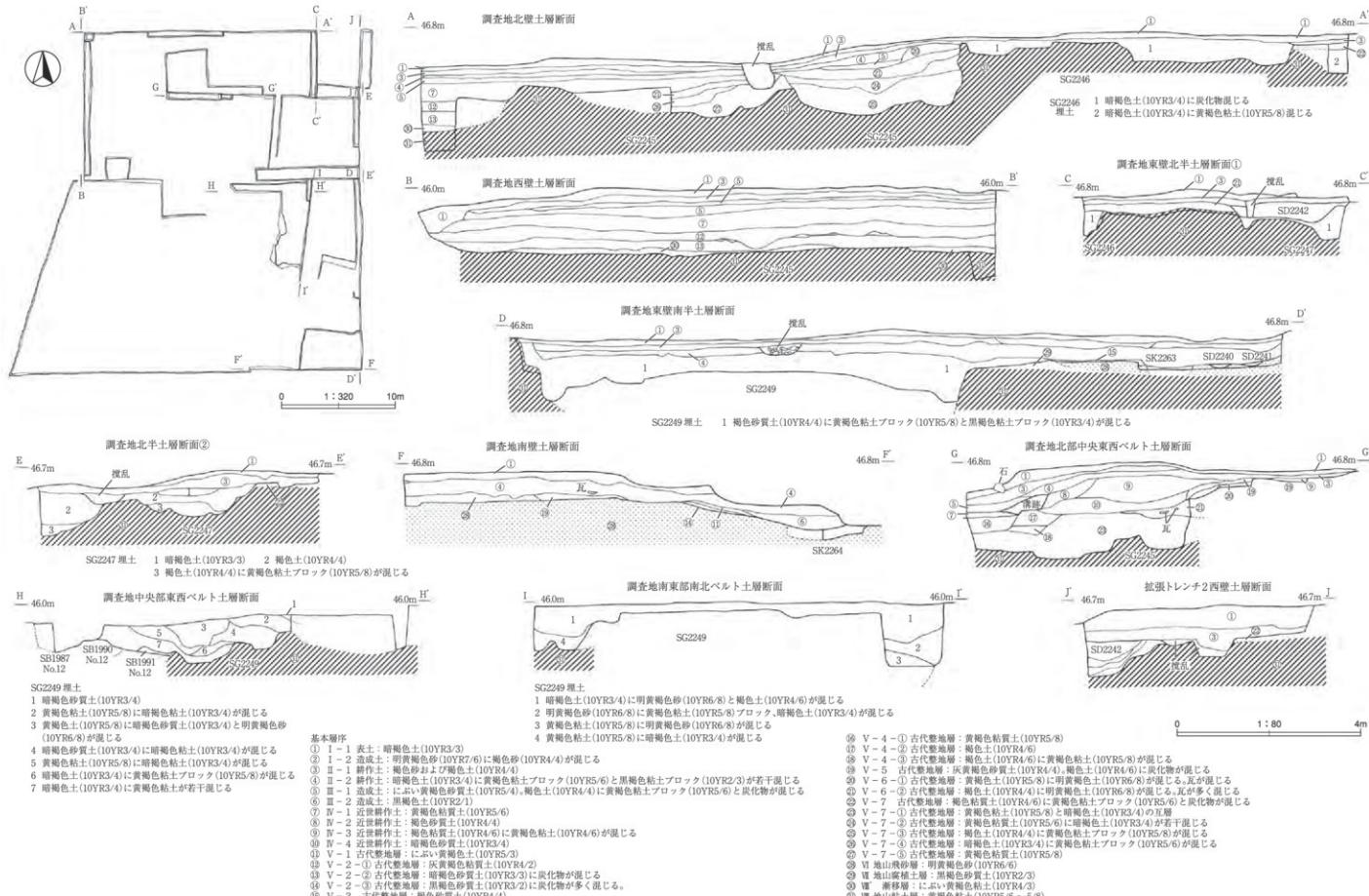
## 2) 検出遺構と出土遺物

### ①外郭西門跡（第5・7・9・10図、図版1）

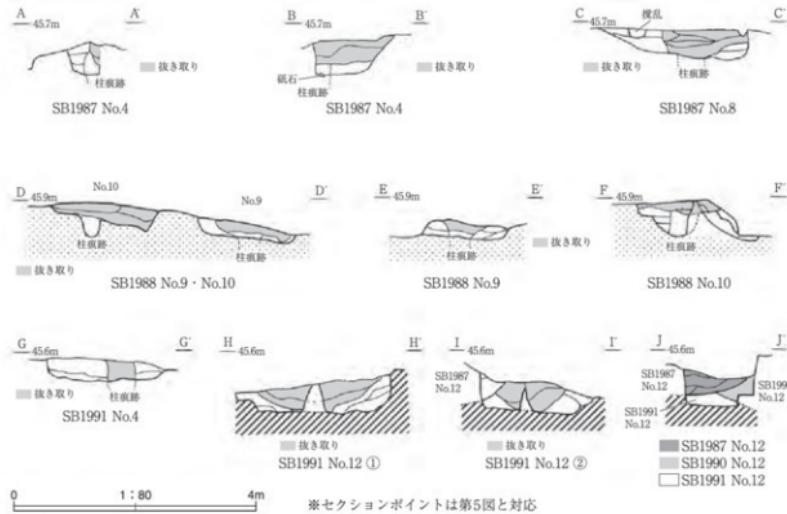
外郭西門跡は、平成20年度の第92次調査によって確認されており、全て梁間（東西）2間×桁行（南北）3間の南北棟掘立柱建物跡であり、三間一戸の八脚門形式と推定された（SB1986～1991）。また、SB1991（I期）→SB1990（II期）→SB1989（III期）→SB1988（IV期）→SB1987（V期）→SB1986（VI期）と変遷しており、それぞれは政庁I～VI期の遺構変遷と対応している。今回の調査で、新たに柱掘り方8基が検出され、その規模について詳細が判明した（第5・9・10図）。以下、平成20年度第92次調査で報告した事項を補足する形で記述する。なお、各掘立柱建物跡の柱掘り方については、西桁行柱列の南から北にNo.1・2・3・4、中央桁行柱列の南から北にNo.5・6・7・8、東桁行柱列の南から北にNo.9・10・11・12と呼称することとする（第10図参照）。



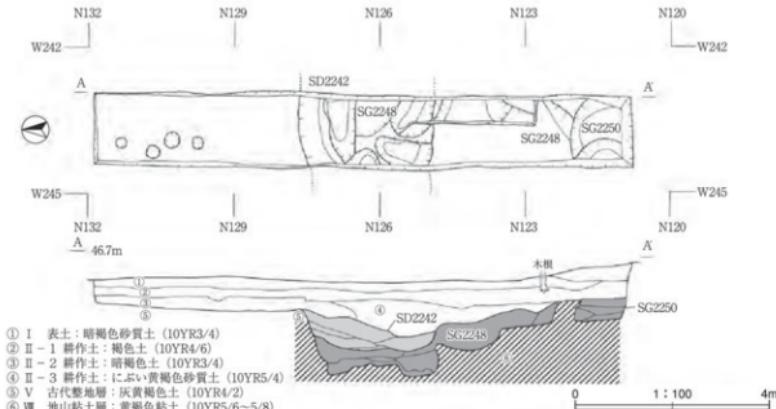
第51図 第102次調査地検出遺構図③



第6図 第102次調査地土層断面図



第7図 SB1987・SB1988・SB1991掘立柱建物跡（外郭西門跡）柱掘り方断面図



第8図 拡張トレント1検出遺構および土層断面図

**S B1986掘立柱建物跡（第5・7・9・10図、図版1）**

第92次調査でVI期とされた外郭西門跡である。今回の調査で新たな所見はなく、東西2間（西から4.5m+4.45m）、南北3間（北から2.9m+3.55m+3.0m）、建物方向は西側桁行柱筋が北で15度東に振れる。

No.12柱掘り方はSK2253とSB1989 No.8柱掘り方と重複し、SB1989 No.8柱掘り方より新しく、SK2235より古い。

**S B1987掘立柱建物跡（第5・7・9・10図、図版1・8・9）**

第92次調査でV期とされた外郭西門跡である。今回の調査で、新たにNo.4とNo.8の柱掘り方が第V-5層面で発見された。その結果、東西2間（西から3.9m+3.9m）、南北3間（北から3.0m+3.3m+3.3m）と前回の調査所見と変わりはないが、建物方向は西側桁行柱筋が北で16度東に振れることが判明した。

No.4とNo.8柱掘り方は1.7~2.5mの不整形である。No.4柱掘り方は深さ約55cm、推定直径約42cmの柱痕跡があり、No.8は深さ約45cm、直径約42cmの柱痕跡がある。No.8柱掘り方の深さが若干浅い。いずれも柱抜き取り痕跡がある。

柱掘り方の埋土は、褐色土と暗褐色粘土を主体とする。柱痕跡には、にぶい黄褐色粘土・褐灰色粘土の混入がある。

No.4の柱掘り方はSK2256・SK2257と重複し、SK2256より新しく、SK2257より古い。No.8の柱掘り方はSB1991 No.4柱掘り方、SA2235、SK2252と重複し、SB1991 No.4柱掘り方より新しく、SA2235、SK2252より古い。

**S B1987出土遺物（第11図1、第12図1、図版25）**

石製品（第11図1）：No.4柱掘り方の柱痕跡底面から出土した。凝灰岩製の砥石で、4面が使用されており、上部に穿孔がある。

瓦（第12図1）：No.8柱掘り方埋土から出土した。丸瓦で凸面は撫で調整を施し、凹面には布目圧痕がみられる。黒色を呈し軟質である。

**S B1988掘立柱建物跡（第5・7・9・10図、図版1・9・10・11）**

第92次調査でIV期とされた外郭西門跡である。今回の調査で、新たにNo.9とNo.10の柱掘り方が第VI層地山飛砂層面で発見された。その結果、東西2間（西から3.2m+3.4m）、南北3間（北から2.7m+3.0m+2.7m）で、建物方向は西側桁行柱筋が北で9度東に振れることが判明した。

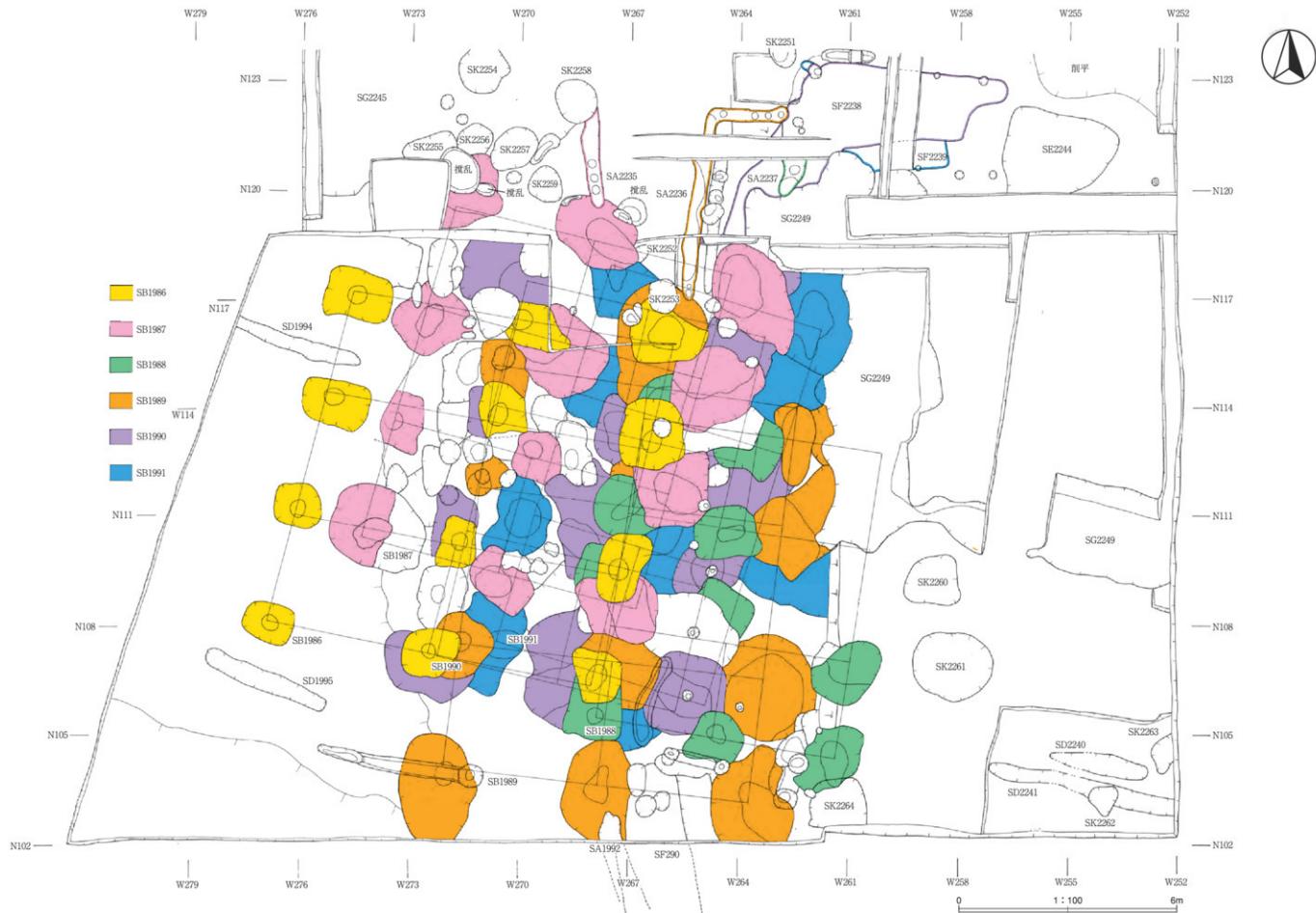
No.9・10柱掘り方は1.5m~2mの不整形である。No.9柱掘り方は深さ約25cm、直径約32cmの柱痕跡があり、No.10は深さ約60cm、直径約26cmの柱痕跡がある。柱掘り方の底面のレベルはほぼ同じであり、No.9柱掘り方の上部は削平を受けているものと考えられる。いずれも柱抜き取り痕跡がある。No.11・No.12柱掘り方は、SG2249の近世土取り穴によって削平されたと考えられる。

柱掘り方の埋土は、明褐色砂質土を主体とする。

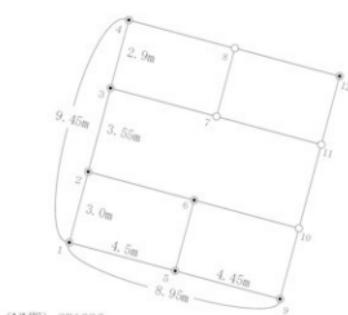
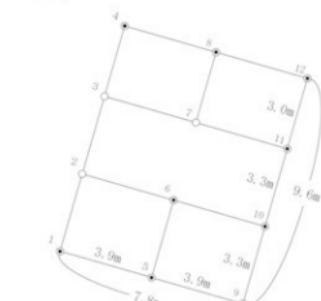
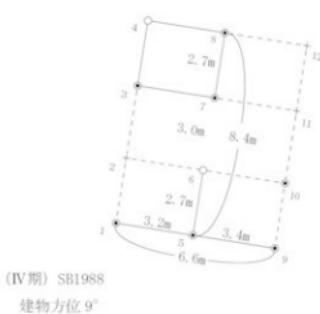
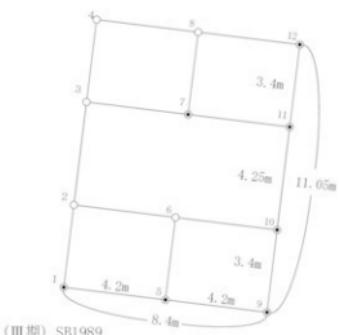
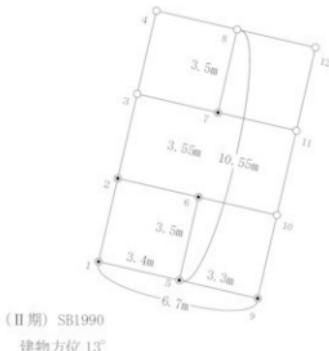
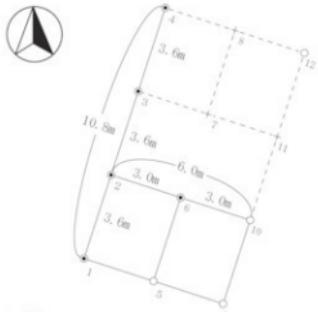
No.9柱掘り方はSK2264と重複し、SK2264より古い。

**S B1988出土遺物（第12図2~4、図版25）**

第12図2はNo.9柱掘り方、3と4はNo.10柱掘り方出土で、いずれも掘り方埋土出土である。



第9図 SB1986～1991掘立柱建物跡（外郭西門跡）時期別色分け図



● 柱痕跡検出 ○ 柱掘り方検出 + 推定柱位置

0 1:200 10m

第10図 外郭西門跡建物変遷図

瓦（第12図2～4）：2～4は平瓦である。3と4は一枚作りの平瓦である。2は凸面に縄目叩き痕、凹面は剥落して不明である。3と4は凸面に縄目叩き痕、凹面に布目圧痕が認められる。3の凸面は摩耗が著しく縄目圧痕は不明瞭である。2は黄灰色、3は黒色、4は灰色で、いずれも硬質の瓦である。

#### S B1989掘立柱建物跡（第5・7・9・10図、図版1）

第92次調査でⅢ期とされた外郭西門跡である。今回の調査による再検討で、No.8柱掘り方の範囲を修正した。その結果、東西2間（西から4.2m+4.2m）、南北3間（北から3.4m+4.25m+3.4m）となつた。建物方向は西側桁行柱筋が北で7度東に振れる。

No.8柱掘り方はSA2236と重複し、SA2236より古い。No.12柱掘り方はSB1991 No.11柱掘り方と重複し、SB1991 No.11柱掘り方より新しい。No.11柱掘り方はSG2249と重複し、SG2249より古い。

#### S B1990掘立柱建物跡（第5・7・9・10・14図、図版1）

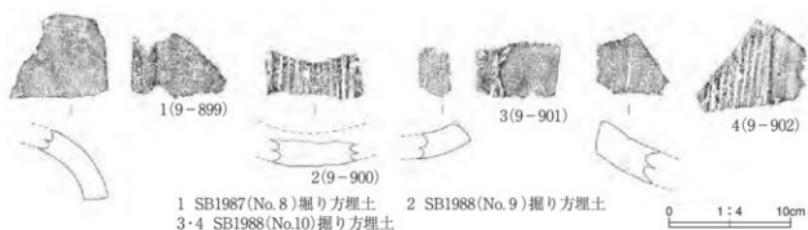
第92次調査でⅡ期とされた外郭西門跡である。今回の調査で、新たにNo.8とNo.12の柱掘り方の一部が第Ⅷ層地山粘土層面で発見された。その結果、東西2間（西から3.4m+3.3m）、南北3間（北から3.5m+3.55m+3.5m）で、建物方向は西側桁行柱筋が北で13度東に振れることが判明した。

柱掘り方の一部しか検出されていないため、平面形状は不明である。No.8柱掘り方の深さは30cm以上、No.12柱掘り方の深さは40cm以上ある。柱掘り方埋土はにぶい黄褐色砂質土を主体としている。

No.8柱掘り方は、SA2236と位置関係で重複し、SA2236より層位的に古い（第14図参照）。No.12柱掘り方は、SB1987 No.12柱掘り方、SB1991 No.12柱掘り方と重複し、SB1991 No.12柱掘り方より新しく、SB1987 No.12柱掘り方より古い。



第11図 SB1987・SB1991掘立柱建物跡（外郭西門跡）出土遺物



第12図 SB1987・SB1988掘立柱建物跡（外郭西門跡）出土瓦

**S B1991掘立柱建物跡（第5・7・9・10図、図版1・11・12）**

第92次調査でⅠ期とされた外郭西門跡である。今回の調査で、新たにNo.4とNo.12の柱掘り方が発見された。No.4は第V-7層面、No.12は第Ⅷ層面検出である。また、今回の調査で第92次調査で位置づけが不明確であった遺構を再検討した結果、No.11柱掘り方を認定した。その結果、東西2間（西から3.0m+3.0m）、南北3間（北から3.6m+3.6m+3.6m）で、建物方向は西側平行柱筋が北で18度東に振れることが判明した。

柱掘り方は他の遺構との重複で不明確だが、2~2.5mの方形ないし不整形と推定される。No.4柱掘り方は深さ約40cm、直径約45cmの柱痕跡がある。No.12柱掘り方は深さ約40cmで、柱痕跡は検出されなかった。いずれも柱抜き取り痕跡がある。No.4とNo.12柱掘り方底面のレベルをみると、No.4柱掘り方がやや高い。No.4の柱掘り方はやや浅く、No.12の柱掘り方は深かったと考えられる。柱掘り方の埋土は地山粘土の黄褐色粘土を主体とし、暗褐色土や褐色砂質土が混じる。

No.4柱掘り方はSB1987 No.8柱掘り方、SB1989 No.8、SK2252・SK2253と重複し、これらよりも古い。No.12柱掘り方はSB1987 No.12柱掘り方、SB1990 No.12柱掘り方、SG2249と重複し、これらよりも古い。なお、SB1991 No.11とNo.12柱掘り方の切り合い関係は、No.12がNo.11よりも新しい。

**S B1991出土遺物（第11図2、図版25）**

礫（第11図2）：No.12柱掘り方底面から出土した。泥岩製の扁平な自然礫であり、人為的な加工は施されていないが、第Ⅷ層の地山粘土層には本来含まれていない自然礫である。

**②区画施設****S A2235材木堀跡（第13図、図版1・14）**

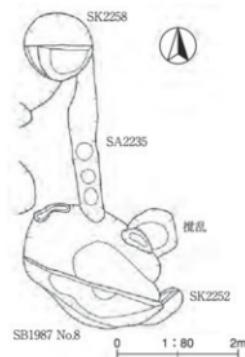
調査区北西側の第V-5層面で検出された南北方向の区画施設である。SB1987 No.8柱掘り方に取り付く形で北側に延び、北で5度西に振れる。SB1987に取り付く外郭西辺区画施設と考えられる。布掘り溝および柱痕跡の底部硬化面のみが検出され、布掘りの深さは不明だが幅40cmで、直径20~28cmの柱痕跡が伴う。溝内に密に材木を立て並べた構造の材木列堀と考えられる。

SB1987 No.8柱掘り方とSK2258と重複し、SB1987 No.8より新しく、SK2258より古い。

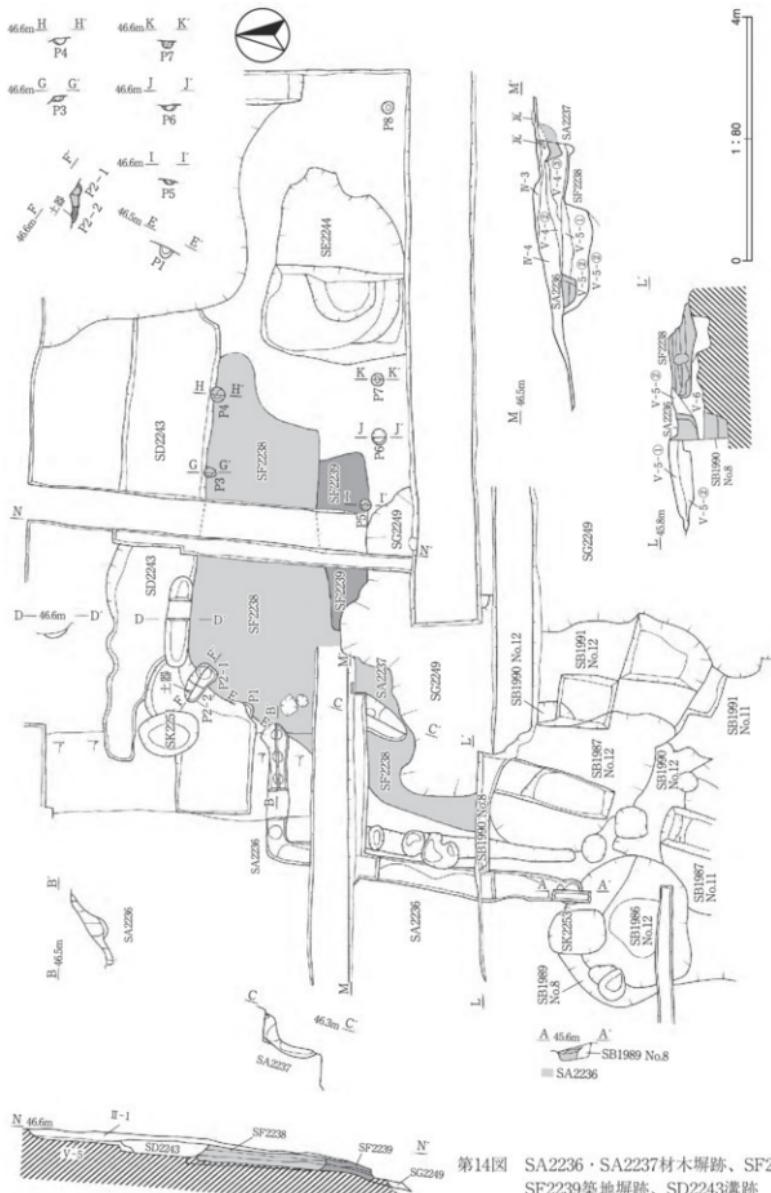
**S A2236材木堀跡（第14図、図版1・14・15）**

調査区北西側の第V-5-①・②層面で検出された南北方向および東西方向の区画施設である。SB1989 No.8に取り付く形で北側に5m延び、その後東に屈曲する。北側に延びる時は北で7度東に振れ、東に屈曲後は真東方向となる。SB1989に取り付く外郭西辺区画施設と考えられる。布掘り溝の幅は40~50cm、深さ20~30cmで、断面はU字状を呈し、直径18~20cmの柱痕跡が伴う。また、広く柱抜き取りが見られる。溝内に間隔をあけて材木を立て並べた構造の材木列堀と考えられる。

SA2236はSF2238に接すると布掘り溝は消失する。これは後述するSF2238築地堀跡の上に布掘りが行われており、築地堀上部が削



第13図 SA2235材木堀跡



第14図 SA2236・SA2237材木塙跡、SF2238・SF2239築地塙跡、SD2243溝跡

平されている現況においてはその布掘りが確認されなかつたものと考えられる。築地塀の上に材木列塀を構築した例は、第92次調査地南側の第19次調査においてみることができる。なお、SB1989に取り付く南側の柱列塀は第92次調査においてSA1992が発見されており、SA2236はこれと対になるものと考えられる。

SB1989 No. 8 柱掘り方とSB1990 No. 8 柱掘り方、SF2238と重複し、SB1989 No. 8 柱掘り方とSF2238よりは新しく、SB1990 No. 8 柱掘り方とは層位的に新しい。

#### S A2236出土遺物（第16図1、図版25）

布掘り埋土の出土である。

瓦（第16図1）：1は1枚作りの平瓦である。凸面に縄目の叩き痕、凹面に布目圧痕がみられる。灰色を呈し、やや軟質の瓦である。瓦の表面は摩耗し、経年変化が認められる。

#### S A2237材木塀跡（第14図、図版1・15）

調査区北西側の第V-4-②層面で検出された南北方向の区画施設である。北で9度東に振れる。位置、方位から推定するとSB1988に取り付く外郭西辺区画施設である可能性が高い。布掘り溝の幅は50cm、深さ30cmで、断面はU字状を呈し、直径20cmの柱痕跡が伴う。また、抜き取りが見られる。溝内に間隔をあけて材木を立て並べた構造の柱列塀と考えられる。

北に延び、SF2238が高くなる部分になると布掘り溝は消失する。SA2237の北側延長線上にみられSF2238より新しい小ピットが2基確認できるが、これはSA2237の柱痕跡の可能性がある。これは、SA2236と同様にSF2238築地塀跡の上に布掘りが行われており、築地塀上部が削平されている場所においてはその布掘りが確認されなかつたものと考えられる。

SF2238と重複し、これより新しい。

#### S A2237出土遺物（第16図2、図版25）

抜き取り埋土出土である。

瓦（第16図2）：2は平瓦である。凸面に縄目の叩き痕、凹面は剥落していて不明である。灰色を呈し、やや軟質の瓦である。瓦の表面は摩耗し、経年変化が認められる。

#### S F2238築地塀跡（第14図、図版1・2・7・12・13）

調査区北側の第V-6-①層および第VII層地山粘土層面で検出された南北方向および東西方向の区画施設である。築地基底幅は残りの良い部分で計測すると2.1~2.2mである。残存している部分で考えれば築地中軸線で4m北に延び、東へ屈曲する。北側に延びる時は、北で35度東に振れ（P1とP2を結ぶラインで計測）、東に屈曲後は東で4度南に振れる。東端は削平により確認されなかつた。また南東側はSG2249の土取り穴によって大きく削平を受けている。築地積み土は南側で40cm、東へ屈曲後は20cm残っており、褐色粘質土と暗褐色土に黄褐色粘土が混じる層との交互層になっている。また、築地積み土の下部には、深さ20~25cmの掘り込みが伴う。SF2238はP1~4の小ピットを伴い、築地本体に食い込んでいることから寄柱と考えられる。特にP2では2つの小ピットが重複しており、P2-1がSF2238に伴うもので、P2-2は後述するSF2238に伴うものであると考えられる。いずれの小ピットも抜き取りが行われており柱痕跡は確認できなかつた。SF2238が確認される南端では第V-5-②層に削平されており、SA2236が構築された際の整地層によって一部失われている。従つて残りの良い

部分であるP2からP1のラインを本来の築地塀の端であると考え、延長線を結ぶとSB1990 No.8柱掘り方に取り付く形となり、これに伴う築地塀である可能性が高い。したがってSF2238は、SB1990 No.8の推定柱位置から計測すると、築地中軸線で7m北に延び東に屈曲すると考えられる。

SA2236・SA2237、SF2239、SD2243と重複し、SF2239より新しく、SA2236・SA2237、SD2243より古い。

#### S F 2239築地塀跡（第14図、図版1・2・7・12・13）

調査区北側の第V-7層および第Ⅵ層地山粘土層面で検出された東西方向の区画施設である。SF2238およびSG2249によって大きく削平を受けているため、本来の基底幅は不明であるが、残存する部分は幅60~70cmである。東で2度南に振れる。SG2249により削平を受けているため詳細はわからないが、SF2238と同様に本来は外郭西門方向から北に延び東へ屈曲したものと考えられる。築地積み土は10cm残っており、褐色土と黄褐色粘土の混じる褐色土の交互層であることが確認できる。また、築地積み土の下部には、深さ20cmの掘り込みが伴う。また、SF2239に伴いP5が、延長線上にP6~8の小ピットが確認された。P5はSF2239の築地本体に食い込んでいるため寄柱であると考えられ、P6~8は築地本体から少し離れると推定されるため添柱と考えられる。また、SF2238の北西コーナー隅で検出されていたP2は2つの小ピットが重複しており、P2-1はSF2238に伴う寄柱と考えられたが、下部のP2-2はこのSF2239に伴う寄柱と考えられる。したがって、SF2239とSF2238の北西コーナー部分の位置は変わらなかつたものと考えられる。

SF2238とSG2249と重複し、これらよりも古い。したがって、SF2238がSB1990に伴う築地塀跡であると考えられることから、SF2239はSB1991に伴う築地塀跡であると考えられる。

#### S F 2239出土遺物（第15図1、図版25）

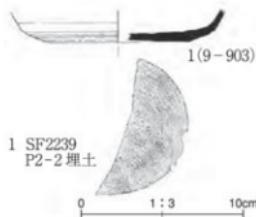
P2-2埋土出土である。

須恵器（第15図1）：体部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリ調整を施す坏である。器厚が薄く、内外面ともに丁寧なつくりである。底部は欠損しているが刻書があり、「×」の字の刻書であると考えられる。

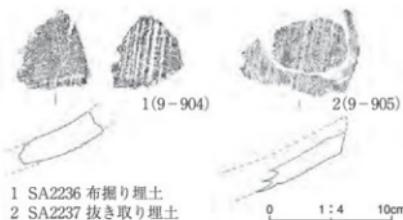
#### ③他の遺構

#### S D2240溝跡（第17図、図版15）

調査区南東隅の第VI層地山飛砂層面で検出された。幅20~40cm、深さ35cm、長さ2.7m以上の東西南向の溝跡である。東で10度南に振れる。東側に行くにしたがい浅くなり途切れるが調査区西壁には断面がわずかに確認できる。



第15図 SF2239築地塀跡P2-2  
出土遺物



第16図 SA2236・SA2237材木塀跡出土瓦

## S D2241溝跡（第17図、図版15）

調査区南東隅の第VI層地山飛砂層面で検出された。幅30~50cm、深さ10cm、長さ5.3m以上の東西方向の溝跡である。東で12度南に振れる。

## S E2244井戸跡（第18図、図版16）

北東調査区の第V~7層面で検出された。井戸掘り方の平面形は南北2.1m、東西3mの不整円形を呈し、深さは1.2mである。井側の形状は直径約1mの円形である。

## S E2244出土遺物（第19・20図、図版25）

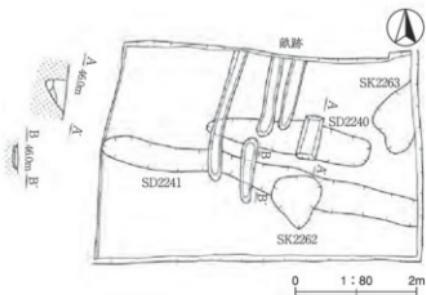
すべて埋土出土である。

弥生土器（第19図1~3）：1は壺形土器の底部破片であり、底部立ち上がり部分が外に張り出している。2は壺形土器の口縁部破片である。横走沈線が口縁外面端部に1条、頸部に3条施される。また頸部には縦方向に刷毛目調整が行われ、体部上半には繩文原体LRの繩文が施される。3は壺形土器の頭部破片である。頭部上半と下半にそれぞれ横走沈線を4条施し、その間に縦方向の短い沈線が施される。

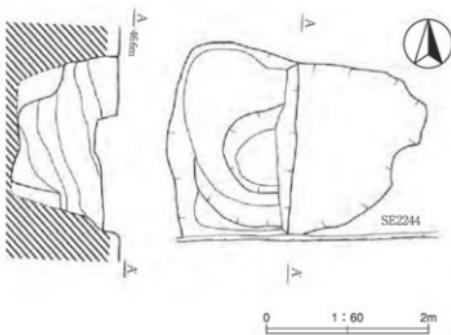
瓦（第20図1）：1は一枚作りの平瓦である。凸面に縄目の叩き痕、凹面は布目圧痕が認められる。凹面には糸切り痕が確認され、広端部を上にした場合、糸切り方向は上から下である。灰黄色を呈し、硬質の瓦である。

## S G2245土取り穴（第5・6図、図版16）

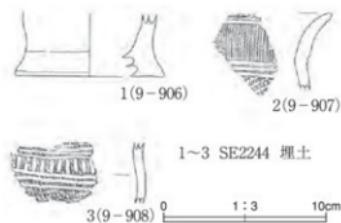
調査区北西部に大きく広がる土取り穴である。調査では面的に範囲のみを押さえ、層序の堆積はサブトレンドで確認している。第V~5層で検出されているが古代整地層が徐々に堆積しているため、実際の造構面は第V層地山粘土層である。東西12m以上、南北11.5m以上、深さ0.5~1.2mの不整円形を呈する。土取り穴の範囲は北側と西側の調査区外へ広がる。第V層地山粘土層を掘り込んで土取りしており、底部には小さい土取り穴が重複する形で掘り込まれた痕跡が認められ、それらがさらにいくつかの大きなまとまりとなってSG2245を形成している。土取り穴の場所は、SF2238・SF2239の北西側に広がっており、これらの築地塀の粘土採取のためのものと考えられ



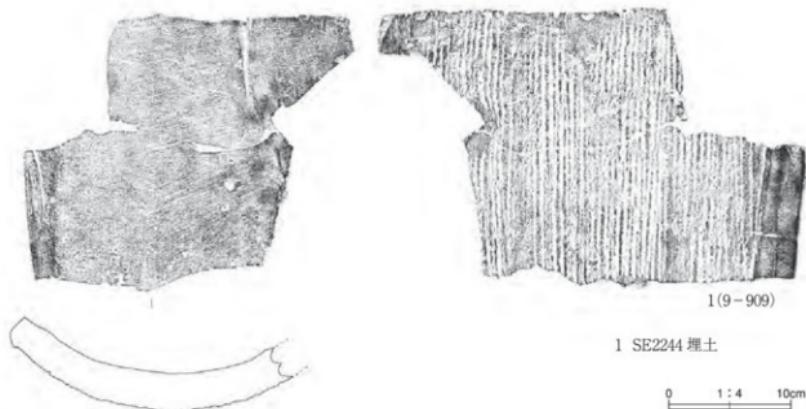
第17図 SD2240・SD2241溝跡、SK2262・SK2263土坑



第18図 SE2244井戸跡



第19図 SE2244井戸跡出土遺物



第20図 SE2244井戸跡出土瓦

埋土は古代の整地と密接に関わる部分であるため、基本層序の部分で詳述するが、SG2245の東側（SF2238・SF2239に近い場所）では、土取り穴は1~1.2mの深さがあり、埋土は外郭西門Ⅰ期と対応する古代整地層の第V-7-①~⑤の堆積が厚く堆積しており、土取り穴の大半は埋まってしまっている状況が確認される。一方SG2245の西側では、土取り穴の深さは0.5~0.7mと比較的浅く、埋土は外郭西門Ⅰ期以降と対応する古代整地層の第V-2-①・②層の堆積である。以上のことから、SG2245の東側は築地塀構築直後に整地され、西側はV期以降の時期に整地されているものと考えられる。

SK2254~2258、SB1987 No. 4と位置的に重複するが、これらよりも古い。

#### S G2245出土遺物（第32図1~5、第33図6~10、第34図1~3、図版29・31）

SG2245の出土遺物については、基本層序の整地層と密接に関わる部分であるので、基本層序出土遺物の項で詳述する。

#### S G2246土取り穴（第5・6図、図版16）

調査区北側の第Ⅷ層地山粘土層面で検出された。東西7m、南北1.2m以上、深さ50cmの楕円形を呈する。土取り穴の範囲は北側の調査区外へ広がる。第Ⅷ層地山粘土層を掘り込んで土取りしている。

#### S G2247土取り穴（第5・6図、図版16）

調査区北東側の第Ⅷ層地山粘土層面で検出された。東西4m、南北4m以上、深さ0.8~1.0mである。サブトレーナーでの確認であるため、平面形状は不明である。土取り穴の範囲は西側の調査区外へ広がる。第Ⅷ層地山粘土層を掘り込んで土取りしている。

SD2242と重複し、これよりも古い。

#### S G2247出土遺物（第21・22図、図版25・26）

須恵器（第21図1）：1は壺の体部破片である。内面に平滑な面と墨の付着があり、硯に転用している。瓦（第22図1）：1は有段丸瓦で、凸面は撫で調整を施し、凹面には布目压痕が認められる。褐色～

橙色を呈し、やや軟質な瓦である。

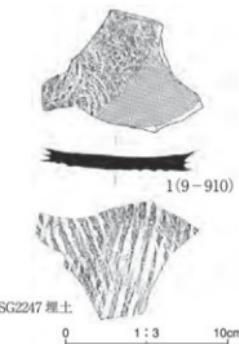
#### SG2248土取り穴（第8図、図版18）

拡張トレンチ1の第Ⅷ層地山粘土層面で検出された。東西1.5m以上、南北4.5m以上、深さ1.2mである。トレンチでの確認のため、平面形状は不明である。土取り穴の範囲は東西の調査区外へ広がる。第Ⅷ層地山粘土層を掘り込んで土取りしている。

SD2242と重複し、これよりも古い。

#### SK2251土坑（第23図）

調査区北側の第V-5層面で検出された。東西0.7m、南北1m、深さ50cmで楕円形を呈する。



第21図 SG2247土取り穴出土遺物

#### SK2252土坑（第5図）

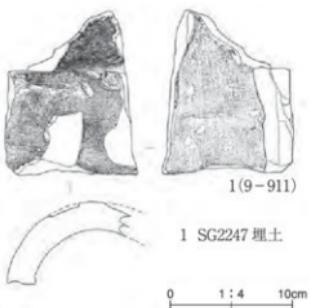
調査区中央で第V-5層面で検出された。東西0.4m、南北0.4mの楕円形を呈する。

SB1987 No.8柱掘り方、SB1991 No.4柱掘り方と重複し、これらより新しい。

#### SK2253土坑（第5図）

調査区中央で第V-5層面で検出された。東西0.7m、南北0.9mの不整円形を呈する。

SB1986 No.12柱掘り方、SB1989 No.8柱掘り方、SB1991 No.4柱掘り方と重複し、これらより新しい。



第22図 SG2247土取り穴出土瓦

#### SK2254土坑（第5図）

調査区北西の第V-2-①層面で検出された。東西1.3m、南北1.4mの不整円形を呈する。

#### SK2255土坑（第5図）

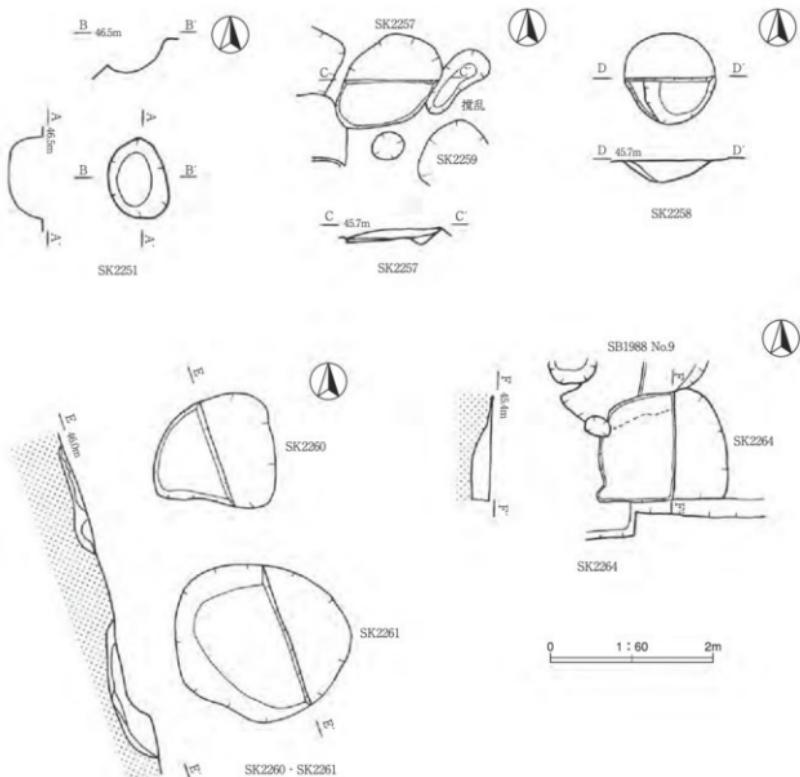
調査区北西の第V-2-①層面で検出された。東西1.5m以上、南北0.8m以上の不整楕円形を呈する。

#### SK2256土坑（第5図）

調査区北西の第V-2-①層面で検出された。東西1m、南北0.9m以上の不整円形を呈する。

#### SK2257土坑（第23図、図版17）

調査区北西の第V-2-①層面で検出された。東西12m、南北1.1m以上、深さ30cmで、楕円形を呈する。SB1987 No.4柱掘り方と重複し、これらより新しい。



第23図 SK2251・SK2257・SK2258・SK2260・SK2261・SK2264土坑

#### S K2258土坑（第23図、図版17）

調査区北西の第V-2-①層面で検出された。東西1.1m、南北1.1m、深さ26cmで、円形を呈する。  
SA2235と重複し、これより新しい。

#### S K2259土坑（第5図）

調査区北西の第V-5層面で検出された。東西1m、南北0.9mの不整円形を呈する。

#### S K2260土坑（第23図、図版17）

調査区南東の第VI層地山飛砂層面で検出された。東西1.5m、南北1.4m、深さ20cmで不整円形を呈する。

## SK2260出土遺物（第24図1、図版26）

赤褐色土器（第24図1）：中型壺の底部破片である。内外面摩滅が著しく、器面調整や底部切り離しは不明である。



1(9-912)

## SK2261土坑（第23図、図版17）

調査区南東の第VI層地山飛砂層面で検出された。東西2.1m、南北2m、深さ40cmで不整円形を呈する。



2(9-913)

## SK2262土坑（第17図）

調査区南東の第VI層地山飛砂層面で検出された。東西0.8m、南北0.8mの不整円形を呈する。

SD2241と重複し、これより新しい。



第24図 SK2260・SK2264土坑出土遺物

## SK2263土坑（第17図）

調査区南東の第VI層地山飛砂層面で検出された。東西0.6m以上、南北1.2m以上の不整梢円形を呈する。

## SK2264土坑（第23図）

調査区南側の第VI層地山飛砂層面で検出された。東西1.6m、南北1.3m以上、深さ20cmで不整円形を呈する。

SB1988 No. 9柱掘り方と重複し、これより新しい。

## SK2264出土遺物（第24図2、図版26）

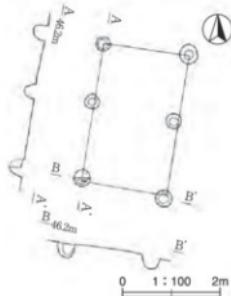
土師器（第24図2）：2は非口クロ成形の平底壺底部破片である。内面に刷毛目調整を施す。底部は筆の葉の圧痕と初圧痕がみられる。内面および底部にかけて二次的な被熱痕跡があり、黒色化している。

## ④近世以降の遺構

検出層位・遺構の特徴・出土遺物等から近世以降のものと考える遺構について、主要なものと古代の遺構に近接し、影響を及ぼしているものについて記載する。

## SB2234掘立柱建物跡（第25図、図版3）

調査区南東の第II～2層面で検出された。南北2間（北から1.32m+1.5m）、東西1間（1.8m）の南北棟の掘立柱建物跡である。建物方位は西側桁行柱筋が北で9度東に振れる。柱掘り方は30～42cmの円形を呈し、深さ25～30cmである。



第25図 SB2234掘立柱建物跡

## SD2242溝跡（第26図、図版17）

調査区北東の第V～7層面、拡張トレンチ1の第V層面、拡張トレンチ2の第VI層地山粘土層面で検出された。幅1.0～2.9m、深さ10～70cm、長さ19.5m以上の東西方向の溝跡である。東に行くにしたがって、幅が広くなり、深くなっているが、西側は削平を受けていると考えられる。東で6度南に振れる。

SG2247・SG2248と重複し、これらよりも新しい。

### S D2242出土遺物

(第27図1～5、第28図1・2、図版26)

土師器（第27図1）：1は非黒クロ整形の長胴壺の口縁部である。口縁外反するが屈曲は強くない。外面に1条の沈線が施される。外面頭部下半にはタテ方向の刷毛目調整、内面頭部下半には横方向の刷毛目調整を施す。また、外面頭部および内面頭部～口縁部に丁寧な横方向のナデ調整を施す。

赤褐色土器（第27図2）：2は糸切りのロクロ整形の中型壺の体部下半から底部である。体部下端に刷毛目調整を施す。

陶器（第27図3）：小型の碗の口縁部破片である。内外面無釉である。口縁部がわずかに外反する。

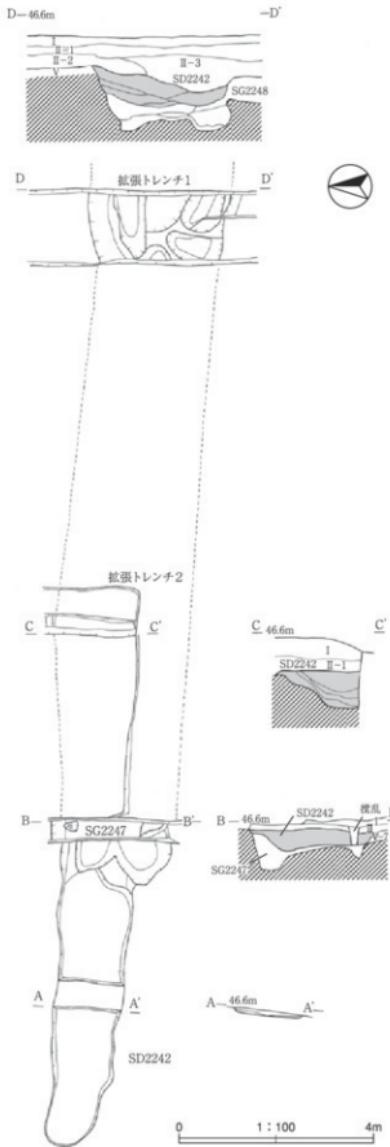
鉄製品（第27図4）：先端が二叉に分かれた鉄鏃である。中子の部分は判然としない。

礫（第27図5）：5はホルンフェルス製の円礫である。人為的な加工は施されていないが、強い衝撃により破損している所が1箇所あり、飛礫の可能性がある。

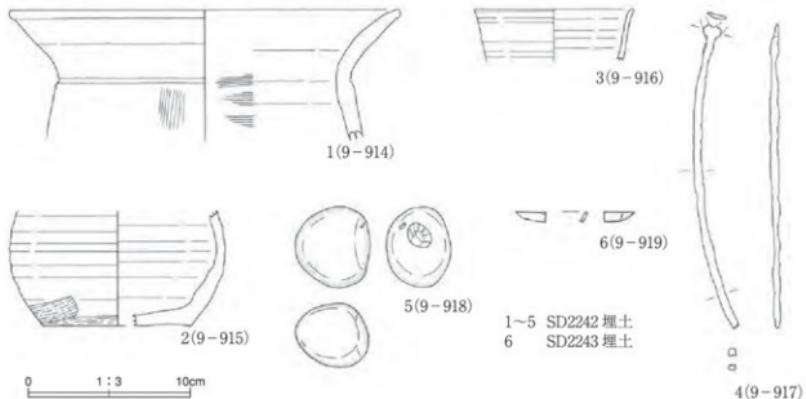
瓦（第28図1・2）：1は一枚作りの平瓦である。凸面に縄目の叩き痕、凹面は布目圧痕が認められる。凹面には糸切り痕が確認され、広端部を上にした場合、糸切り方向は左上から右下である。灰色を呈し、硬質の瓦である。2は一枚作りの平瓦である。凸面に縄目の叩き痕、凹面は布目圧痕が認められる。凹面には糸切り痕が確認され、広端部を上にした場合、糸切り方向は下から上である。灰黄色を呈し、やや硬質の瓦である。

### S D2243溝跡（第14図、図版17）

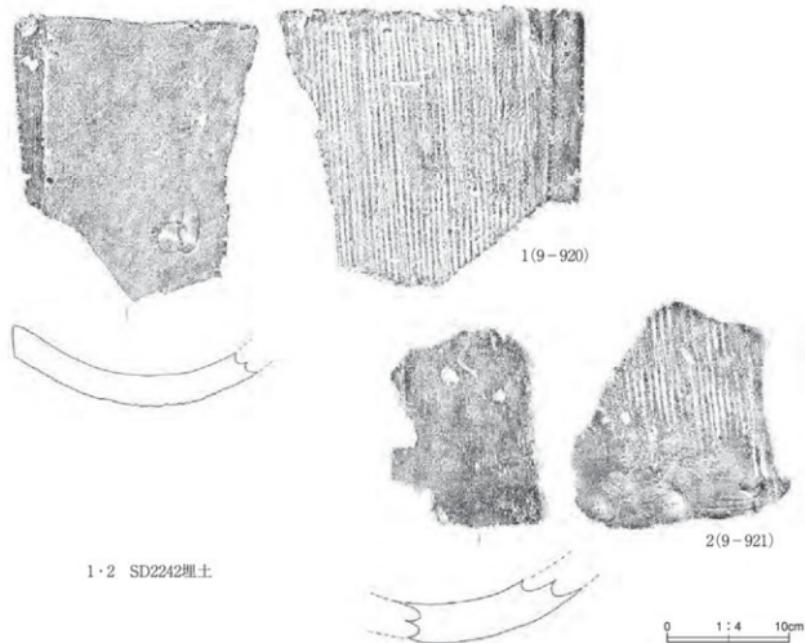
調査区北側の第V～5層およびV～7層面で検出された。幅0.5～1.4m、深さ20cm、長さ7.2m以上の東西方向の溝跡で、東で5度南に振れる。南西側に幅40cm、深さ10cm、長さ1.5mの溝



第26図 SD2242溝跡



第27図 SD2242・SD2243溝跡出土遺物



第28図 SD2242溝跡出土瓦

状の落ち込みを伴う。

SF2238と重複し、これよりも新しい。

**S D2243出土遺物（第27図6、図版26）**

磁器（第27図6）：染付碗の口縁部破片である。染付は西洋コバルトを用いている。

**S G2249土取り穴（第5・6図、図版5・7・18）**

調査区中央部東側に大きく広がる土取り穴である。第II-2層面で検出され、東西9.5m以上、南北10.5m、深さ1.0m以上の不整円形を呈する。土取り穴の範囲は東側の調査区外へ広がる。第Ⅸ層地山粘土層を掘り込んで土取りしており、底部には小さい土取り穴が重複する形で掘り込まれた痕跡が認められ、それらがさらにいくつかの大きなまとまりとなってSG2249を形成している。土取り穴の場所は、外郭西門跡（SB1986-1991）の東側、SF2238・SF2239の南側に広がっており、古代遺構を削平している。

SB1989 No.11・No.12柱掘り方、SB1988 No.11・No.12柱掘り方、SB1991 No.11・No.12柱掘り方、SF2238・SF2239と重複しており、これらより新しい。このため、これらの古代遺構は削平を受けており、特にSB1988 No.11・No.12柱掘り方は、完全に削平されてしまっている。このように古代遺構を削平しているため、近世の遺物とともに多量の古代の遺物が出土している。

**S G2249出土遺物（第29・30図、図版27・28）**

すべて土取り埋土出土である。

土師器（第29図1）：1は非口クロ成形の有段丸底坏で、外面上半に撫で調整、体部下半に手持ちケズリ調整を施す。内面は、体部上半に継位、体部下半に横位のミガキ調整の後、黒色処理を施す。

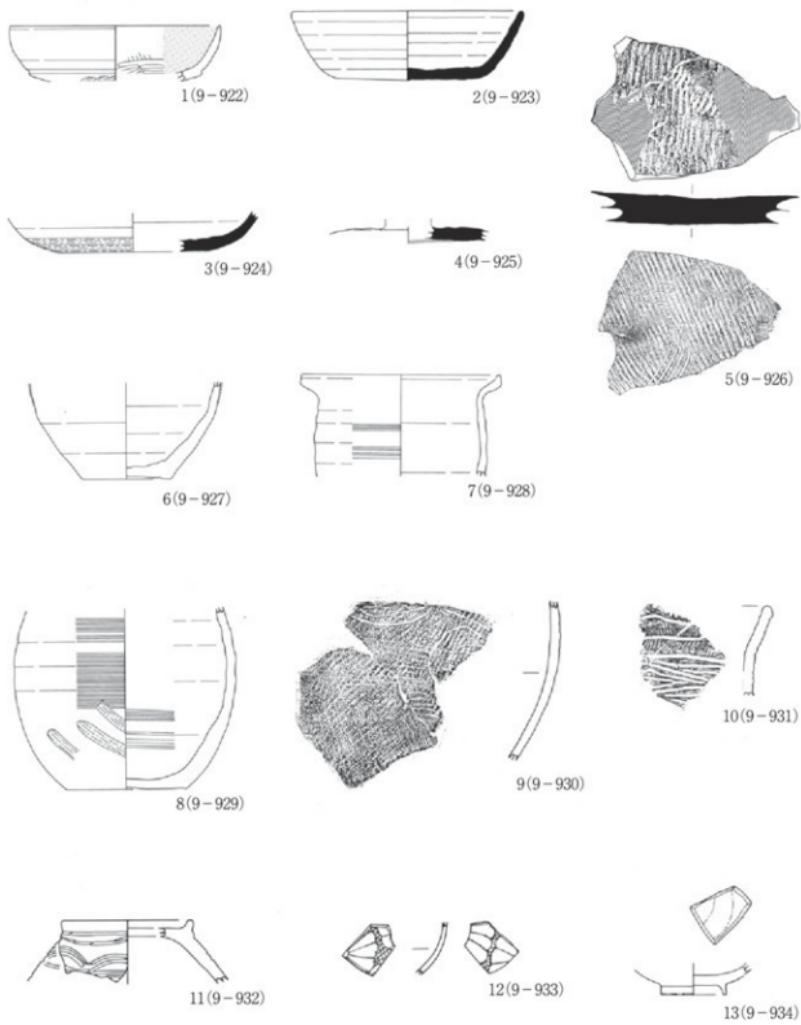
須恵器（第29図2～5）：2はヘラ切り後軽い撫で調整の坏である。3はヘラ切り後丁寧な撫で調整をし、体部下端にケズリ調整を施す坏である。4は蓋の破片で、つまみ部は欠損している。内面が平滑で墨がわずかに付着しており、硯として転用している。5は壺の体部破片を硯として転用している。

赤褐色土器（第29図6～8）：6は静止糸切り無調整の坏である。7は小型壺の口縁部から体部上半である。口縁部端部を上方および横方向につまみ出し、外面体部上半にカキ目調整を施し、体部下半に刷毛目調整を施す。外面および内面口縁部に煤状付着物が認められる。8は小型壺の体部から底部である。外面体部上半と内面体部に横位の刷毛目調整、外面体部下半に手持ちの刷毛目調整を施す。底部は撫でおよび摩滅により切り離しは不明である。

弥生土器（第29図9～11）：9は壺形土器の体部破片である。外面には刷毛目調整後、単節繩文を施文し、沈線で文様を描く。文様は破片資料であるため全体がわからないが、渦巻文になる可能性がある。10は鉢形土器の口縁部破片で口縁部に突起がある。外面頭部から口縁部と口縁部端面に繩文原体LRの繩文を施す。頭部には多重の沈線が施される。11は蓋形土器の破片である。外面に横走沈線と円弧文が描かれる。外面全面にミガキ調整が施される。

磁器（第29図12・13）：肥前系磁器染付碗で内外面に菊と氷裂文を染め付けている。13は肥前系磁器碗であり、蛇ノ目釉剥ぎを施している。

瓦（第30図1～4）：1～3は一枚作り平瓦である。1は凸面に繩目の叩き痕、凹面は布目圧痕が認められ、軽い撫で調整を施す。凹面には糸切り痕が確認され、広端部を上にした場合、糸切り方向は左上から右下である。灰色を呈し、硬質の瓦である。2と3は凸面に格子目の叩き痕、凹面は布目圧痕が認められる。いずれも灰黄色を呈し、硬質の瓦である。2には糸切り痕が確認され、広端部を上にした



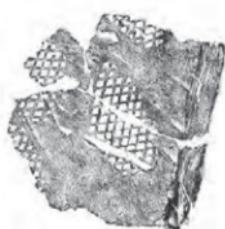
1~13 SG2249 墓土

0 1:3 10cm

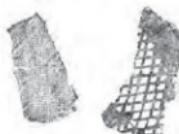
第29図 SG2249土取り穴出土遺物



1(9-935)



2(9-936)



3(9-937)



4(9-938)



1~4 SG2249 墓土

0 1:4 10cm

第30図 SG2249土取り穴出土瓦

場合、糸切り方向は左上から右下である。4は丸瓦である。凸面に縄目の叩き痕と全面に撫で調整、凹面は布目圧痕が認められる。端部には分割のための模骨に付設されている突帯による沈線が残る。

### S G2250土取り穴（第8図、図版18）

拡張トレント1南端の第Ⅵ層地山粘土層面で検出された。東西1.5m以上、南北1m以上、深さ50cm以上である。土取り穴の範囲は、調査区外の東・西・南側に広がる。SG2250が検出された位置が、SF2238・SF2239の延長線上に存在しており、また、SG2249と埋土の特徴が類似することから、近世のものと判断した。

### 3) 基本層序および各層出土遺物

#### 基本層序（第6・8図、図版16）

第102次調査地の旧地形は北東から南西にかけてゆるやかな傾斜地であったと考えられる。調査地北側は宅地として利用されていたため、削平を受けており、また、近世以降の畠地利用のため調査地は東側が高く、西側が低い人為的な段が形成されている。

第102次調査の基本層序をまとめると以下のようになる。

**第I層** 表土・造成土：現表土。第I-1層（表土：暗褐色土〔10YR3/3〕）が調査区全体を覆う。南東調査区にのみ第I-2層（造成土：明黄褐色砂〔10YR7/6〕に褐色砂〔10YR4/4〕が混じる）が分布する。

**第II層** 近現代耕作土：近代から現代にかけての旧畠地耕作土。第II-1層（耕作土：褐色砂および褐色土〔10YR4/4〕）と第II-2層（耕作土：暗褐色土〔10YR3/4〕に黄褐色粘土ブロック〔10YR5/6〕と黒褐色粘土ブロック〔10YR2/3〕が若干混じる）、第II-3層（耕作土：にぶい黄褐色砂質土〔10YR5/4〕）がある。第II-2層は北西・南東調査区に、第II-3層は拡張トレント1にのみ分布する。第II-2層面でSB2234、SG2249が検出されている。

**第III層** 造成土：旧畠地耕作のための造成土である。第III-1層（造成土：にぶい黄褐色砂質土〔10YR5/4〕または褐色土〔10YR4/4〕に黄褐色粘土ブロック〔10YR5/6〕と炭化物が混じる）と第III-2層（造成土：黒褐色土〔10YR2/1〕）がある。第III-1層は北西調査区に、第III-2層は南東調査区にのみ分布する。

**第IV層** 近世耕作土：近世の旧畠地耕作土である。第IV-1層（近世耕作土：黄褐色粘質土〔10YR5/6〕）、第IV-2層（近世耕作土：褐色砂質土〔10YR4/4〕）、第IV-3層（近世耕作土：褐色粘質土〔10YR4/6〕に黄褐色粘土〔10YR4/6〕が混じる）、第IV-4層（近世耕作土：暗褐色砂質土〔10YR3/4〕）がある。第IV層は旧地形の低い北西調査区にのみ分布する。

**第V層** 古代整地層：古代の各期の整地層であり、下記のように細分される。

**第V-1層**（古代整地層：にぶい黄褐色土〔10YR5/3〕）南東調査区南側にのみ分布。

**第V-2層** 下記の3つに分層される。

**第V-2-①層**（古代整地層：灰黄褐色粘質土〔10YR4/2〕）北西調査区にのみ分布。SK2254、SK2255、SK2256、SK2257、SK2258の検出面。

**第V-2-②層**（古代整地層：暗褐色砂質土〔10YR3/3〕に炭化物が混じる）北西調査区にのみ分布。

**第V-2-③層**（古代整地層：黒褐色砂質土〔10YR3/2〕に炭化物が多く混じる）南東調査区南側

にのみ分布。

第V-3層（古代整地層：褐色砂質土〔10YR4/4〕）南東調査区にのみ分布。

第V-4層 下記の3つに分層される。

第V-4-①層（古代整地層：黄褐色粘質土〔10YR5/8〕）北西調査区にのみ分布。

第V-4-②層（古代整地層：褐色土〔10YR4/6〕）北西調査区にのみ分布。SA2237の検出面。

第V-4-③層（古代整地層：褐色土〔10YR4/6〕に黄褐色粘土〔10YR5/8〕が混じる）北西調査区にのみ分布。

第V-5層（古代整地層：灰黃褐色砂質土〔10YR4/4〕または褐色土〔10YR4/6〕に炭化物が混じる）北西および南東調査区に分布する。SB1987（No.4）、SB1987（No.8）、SA2235、SD2243、SG2245、SK2251、SK2252、SK2253、SK2259の検出面。

第V-5層はSA2236の断ち割り断面においては、第V-5-①層と第V-5-②層に細分できる（第14図参照）。

第V-5-①層（古代整地層：褐色土〔10YR4/6〕に黄褐色粘土〔10YR5/8〕が混じる）SA2236の検出面。

第V-5-②層（古代整地層：褐色土〔10YR4/6〕に暗褐色土〔10YR3/4〕が混じる）SA2236の検出面。

第V-6層 瓦が多く混じることから崩壊瓦層であると考えられる。下記の2つに分層される。

第V-6-①層（古代整地層：黄褐色土〔10YR5/8〕に明黄褐色土〔10YR6/8〕が混じる。瓦が混じる）SF2238の検出面。

第V-6-②層（古代整地層：褐色土〔10YR4/4〕に明黄褐色土〔10YR6/8〕が混じる。瓦が多く混じる）いずれもSG2245の埋土でもある。

第V-7層（古代整地層：褐色粘質土〔10YR4/6〕に黄褐色粘土ブロック〔10YR5/6〕と炭化物が混じる）北側調査区に分布する。SB1991（No.4）、SF2239、SD2242、SD2243、SE2244、SG2246の検出面。

また、SG2245の埋土として、下記の層の堆積がみられた。

第V-7-①層（古代整地層：黄褐色粘土〔10YR5/8〕と暗褐色土〔10YR3/4〕の互層）

第V-7-②層（古代整地層：黄褐色粘質土〔10YR5/6〕に暗褐色土〔10YR3/4〕が若干混じる）

第V-7-③層（古代整地層：褐色土〔10YR4/4〕に黄褐色粘土ブロック〔10YR5/8〕が混じる）

第V-7-④層（古代整地層：暗褐色土〔10YR3/4〕に黄褐色粘土ブロック〔10YR5/6〕が混じる）

第V-7-⑤層（古代整地層：黄褐色粘質土〔10YR5/8〕）

第VI層 地山飛砂層：明黄褐色砂（10YR6/6）。SB1988（No.9）、SB1988（No.10）、SD2240、SD2241、SK2260、SK2261、SK2262、SK2263、SK2264の検出面。

第VII層 地山腐植土層：黒褐色砂質土（10YR2/3）。

第VIII層 地山粘土層：黄褐色粘土（10YR5/6～5/8）。SB1990（No.8）、SB1990（No.12）、SB1991（No.12）、SF2238、SF2239、SG2247、SG2248、SG2250の検出面。

また、北西調査区西側サブトレーンチ内にて、漸移層として第VII層の堆積が確認された（にぶい黄褐色粘土〔10YR4/3〕）。

なお、隣接する第92次調査A区と上記第102次調査の土層の対比は次のとおりである。

〔第102次調査地〕	〔第92次調査地A区〕
第Ⅰ層（表土）	第1層（表土）
第Ⅱ層（近現代耕作土）	第2層（旧耕作土）
第Ⅲ層（造成土）	第3層（造成土）
第Ⅳ層（近世耕作土）	第4層（旧耕作土）
第V-1（古代整地層）	第5層（古代の最上層遺物包含層）
第V-2（古代整地層）	—
第V-3（古代整地層）	—
第V-4（古代整地層）	—
第V-5（古代整地層）	第6層（古代遺物包含層）
第V-6（古代整地層）	—
第V-7（古代整地層）	第7層（古代最下層遺物包含層）
—	第8層（弥生時代遺物包含層）
第VI層（地山飛砂層）	地山（浅黄色飛石層）
第VII層（地山腐植土層）	（黒褐色粘土層）
第VIII層（地山粘土層）	（明褐色粘土層）

#### 各層出土遺物

##### 第Ⅰ層 出土遺物（第31図1・2、図版28）

須恵器（第31図1）：1は横瓶の体部破片である。横瓶の体部の最も膨らみのある部分で、外面にカキ目調整、内面は粘土貼り付け後、撫で調整を施す。

陶器（第31図2）：2は擂鉢の口縁部破片である。内外面に鉄釉を施す。内面には14条で一単位の鉗し目が見られる。

##### 第Ⅱ層 出土遺物（第31図3～12、図版28・29）

3・8・9・11・12は拡張トレンチ1からの出土で、その他は調査区からの出土である。

須恵器（第31図3～5）：3はヘラ切り後軽い撫で調整の坏である。4は糸切り無調整の坏で、内面を硯に転用している。5はヘラ切り後軽い撫で調整の台付坏である。

壺（第31図6）：6は長方形の壺で、欠損している。また、二次的な被熱痕跡が認められる。

石製品（第31図7・8）：7と8は凝灰岩製の砥石で、いずれも4面が使用されている。7には上部に穿孔がある。

弥生土器（第31図9・10）：9は高坏脚部の破片である。縄文原体LRの縄文を施し、平行沈線が脚部下端に3条、脚部中央に2条と列点文が施され、平行沈線3条と2条の間は縄文を磨り消している。内面は丁寧なミガキを施す。10は鉢形土器の体部破片で、縄文原体LRの縄文を施し、沈線でゆるい波状の文様を描く。

石器（第31図11）：11は珪質頁岩製の石鎧で、基部側が破損している。図下部の刃部には細かい剥離痕がみられ、その他の剥離痕に比べ切り合ひ関係が相対的に新しいことから、刃部再生の可能性がある。

銭貨（第31図12）：12は新寛永の「秋田川尻銭」（1738年より1745年にかけて鋳銭）である。

### 第Ⅲ層 出土遺物（第31図13・14、図版29）

磁器（第31図13・14）：13は肥前系磁器青磁碗で、外面に青磁釉、内面口縁部に四方櫛文を染付けている。14は肥前系磁器染付碗で、外面は不明文様、見込みに草花文を染付けている。

### 第Ⅳ層 出土遺物（第31図15～18、第33図1・2、図版29・30）

陶磁器（第31図15～17）：15は肥前系磁器染付碗で、内面に草花文を染付けている。16は産地不明の染付碗で、外面に草花文を染付けている。17は産地不明の灰釉陶器鉢である。口縁部は折り曲げて成形し、玉縁状にしている。

土製品（第31図18）：18は土製の耳飾りである。上面からみて抉りが2箇所ある。

瓦（第33図1・2）：1は一枚作りの平瓦で、凸面に格子目の叩き痕、凹面には布目圧痕が認められ、凸面側に二次的な被熱痕跡がある。灰黄色を呈し、硬質の瓦である。2は熨斗瓦で、凸面は繩目の叩き後に撫で調整、凹面には布目圧痕が認められる。黒色を呈し、やや硬質の瓦である。

### 第Ⅴ層 出土遺物（第32～34図、図版29～31）

第V層は細かく細分されており、各細分層ごとに記述する。また、SG2245の出土遺物は、埋土がこの第V層の古代整地層と密接に関連しているため、ここで報告する。

#### 第V-1層（第33図3・4、図版30）

瓦（第33図3・4）：3と4は一枚作りの平瓦である。いずれも凸面に格子目の叩き痕、凹面には布目圧痕が認められる。3には糸切り痕が確認され、広端部を上にした場合、糸切り方向は右下から左上である。いずれも灰黄色を呈し、硬質の瓦である。

#### 第V-2-②層（第32図1～5、図版29）

すべてSG2245埋土出土である。

土師器（第32図1・2）：1は大型の台付壺の底部破片である。内面に黒色処理を施すが、摩滅によりミガキ痕跡は不明である。2は非ロクロ成形の平底壺底部破片である。底部に本葉痕があり、周囲を軽く撫で調整している。二次的な被熱痕跡がある。

赤褐色土器（第32図3～5）：3は糸切り無調整の壺である。4は糸切り無調整の皿で、底部切り離しは粗雑で柱状高台状になっている。5は糸切り無調整の台付壺である。

#### 第V-2-③層（第32図6～11、図版30）

土師器（第32図6）：6は非ロクロ成形の平底壺底部破片である。底部の周囲には砂が付着し、軽く撫で調整を施している。

須恵器（第32図7）：7はヘラ切り後軽い撫で調整の壺の底部破片である。内面を硯として転用している。

赤褐色土器（第32図8・9）：8は糸切り無調整の壺の底部破片である。9は大型壺の口縁部から体部上半の破片である。内外面ともに体部上半にカキ目調整、口縁部に撫で調整を施す。口縁部端部を上方および横方向につまみだしている。

壺（第32図10）：10は長方形の壺で、欠損している。また、二次的な被熱痕跡が認められる。

鉄製品（第32図11）：11は鉄鎌である。先端は欠損している。

#### 第V－3層（第32図12、第33図5、図版30）

鉄製品（第32図12）：12は刀子で、柄の部分に孔がある。

瓦（第33図5）：5は一枚作りの平瓦である。凸面に縄目の叩き痕、凹面は布目圧痕が認められる。灰色で硬質の瓦である。

#### 第V－4－②層（第33図6、図版31）

SG2245埋土出土である。

瓦（第33図6）：6は一枚作りの平瓦である。凸面に縄目の叩き痕、凹面は布目圧痕が認められる。凹面には軽い撫で調整を施している。灰色で硬質の瓦である。

#### 第V－5層（第32図13～17、第33図7、図版30・31）

第33図7はSG2245埋土出土である。

須恵器（第32図13～15）：13は糸切り無調整の壺である。14と15はヘラ切り後軽い撫で調整の壺の底部破片である。

赤褐色土器（第32図16）：16は体部下端にケズリ調整を施す壺で、内面は撫で調整により平滑である。底部は摩滅により切り離し不明である。

縄文土器（第32図17）：深鉢の体部破片で、外面に網目状撫糸文を施す。

瓦（第33図7）：7は一枚作りの平瓦である。凸面に縄目の叩き痕、凹面には布目圧痕が認められる。凸面の縄目の叩き痕は撫で調整により磨り消している。灰色で硬質の瓦である。

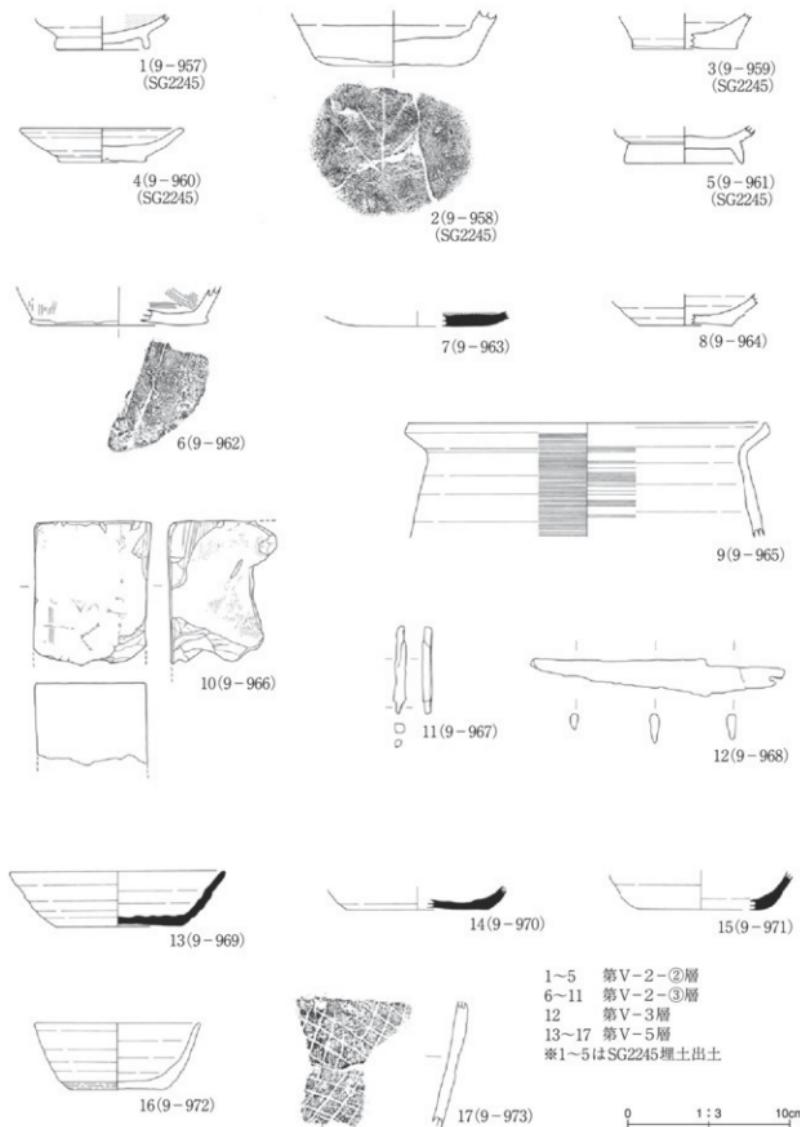
#### 第V－6－①層（第33図8～10、第34図1～3、図版31）

すべてSG2245埋土出土である。

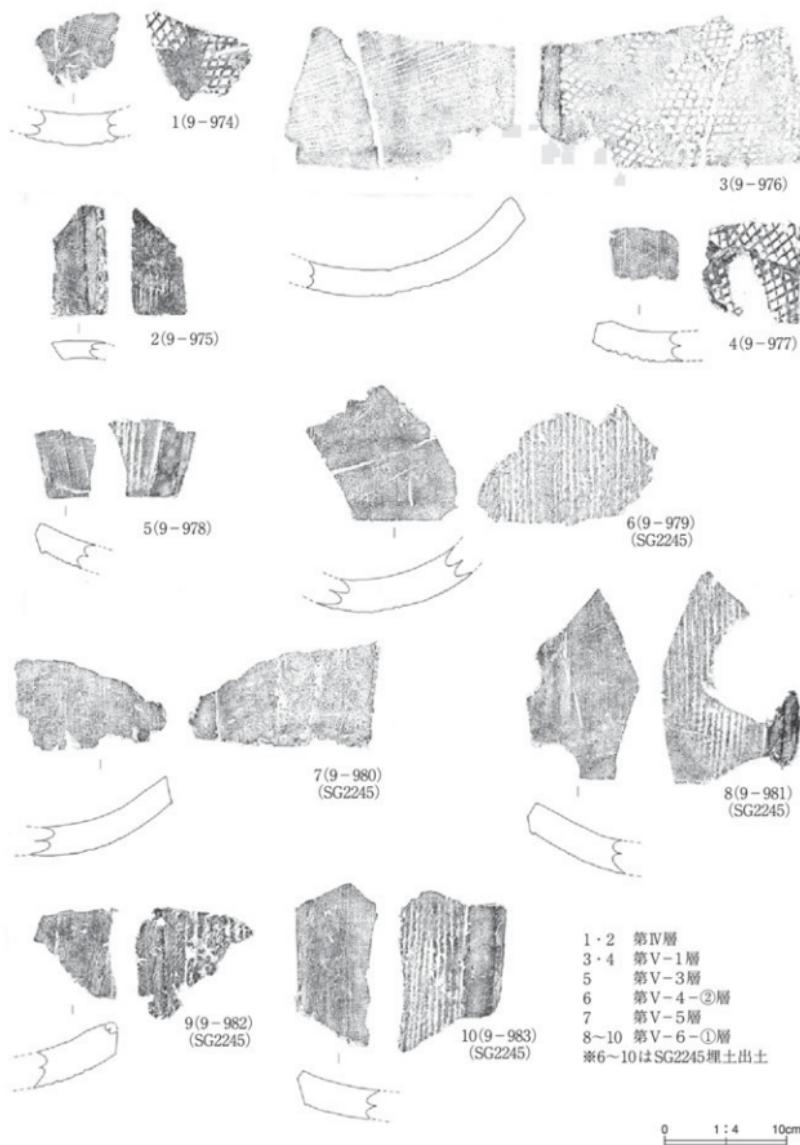
瓦（第33図8～10、第34図1～3）：第33図8～10は一枚作りの平瓦である。凸面に縄目の叩き痕、凹面には布目圧痕が認められる。9は凹面に撫で調整が認められる。8と10は灰色、9は黄灰色で硬質の瓦である。第34図1～3は丸瓦である。いずれも凸面には縄目の叩き痕と全面に撫で調整、凹面は布目圧痕が認められる。1と2は灰色、3は灰黄色でいずれも軟質である。1は端部に分割のための模骨に付設されている突帯による沈線が残る。



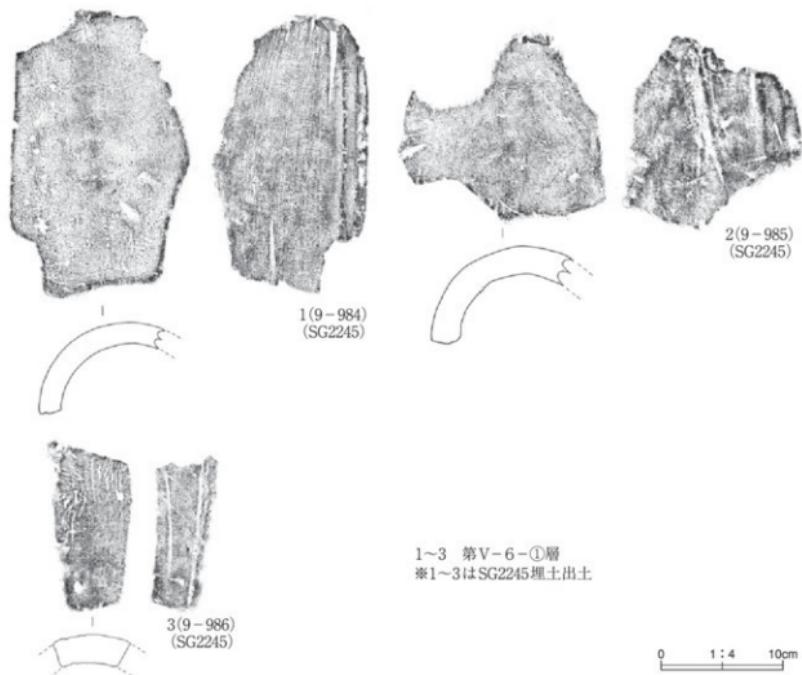
第31図 第I層～IV層出土遺物



第32図 第V層出土遺物



第33図 第IV・V層出土瓦



第34図 第V層出土瓦

表3 第102次調査検出遺構一覧

遺構No.	前面番号	堆出面	時期	重複遺構新旧関係	備考
SB1967 (No. 4)	第5・7・ 9・10回	V-5層	古代	→SK2256 →SK2257	外郭西門V期、北西調査区
SB1967 (No. 8)	第5・7・ 9・10回	V-5層	古代	SB1991 (No. 4) → →SA2235・SK2252	外郭西門V期、北西調査区
SB1968 (No. 9)	第5・7・ 9・10回	VI層	古代	→SK2264	外郭西門IV期、南東調査区
SB1968 (No. 10)	第5・7・ 9・10回	VI層	古代	—	外郭西門IV期、南東調査区
SB1969 (No. 8)	第5・7・9・ 10・14回	Ⅵ層	古代	→SA2236	外郭西門II期、北西調査区
SB1969 (No. 12)	第5・7・9・ 10・14回	Ⅵ層	古代	SB1991 (No. 12) → →SB1987 (No. 12)	外郭西門II期、北西調査区
SB1991 (No. 4)	第5・7・9・ 10回	V-7層	古代	→SB1987 (No. 8)・SB1989 (No. 8)・SK2252・SK2253	外郭西門I期、北西調査区
SB1991 (No. 12)	第5・7・9・ 10回	Ⅵ層	古代	→SB1987 (No. 12)・SB1990 (No. 12)・SG2249	外郭西門I期、北西調査区
SB2234	第25回	H-2層	近世以降	—	北で9° 東、南東調査区
SB2235	第13回	V-5層	古代	SB1987 (No. 8) → →SK2258	外郭西門V期材木列幅 北で5° 西、北西調査区
SB2236	第14回	V-5・①・②層	古代	SB1989 (No. 8)・SB1990 (No. 8)・SF2238 →	外郭西門Ⅳ期柱列幅 北で9° 東、屈曲後真東、 北西調査区
SB2237	第14回	V-4・②層	古代	SF2238 →	外郭西門Ⅳ期柱列幅 北で9° 東、北西調査区
SF2238	第14回	V-6・①・Ⅵ層	古代	SF2239 → →SA2236・SA2237・SB2243	外郭西門Ⅲ期断地幅 北で35° 東、屈曲後東で4° 南、 北西・北東調査区
SF2239	第14回	V-7・Ⅵ層	古代	→SF2238・SG2249	外郭西門Ⅰ期断地幅 東で2° 南、北西・北東調査区
SB2240	第17回	VI層	古代か	—	東で10° 南、南東調査区
SB2241	第17回	VI層	古代か	—	東で12° 南、南東調査区
SB2242	第26回	V-7層	近世以降	SG2247・SG2248 →	東で9° 南、 北東・拡張トレンドチ1・2
SB2243	第14回	V-5・V-7層	近世以降	SF2238 →	東で5° 南、北東調査区
SB2244	第18回	V-7層	古代	—	北東調査区
SG2245	第5・6回	Ⅵ層	古代	→SK2254～2258・SB1987 (No. 4)	北西調査区
SG2246	第5・6回	Ⅵ層	古代	—	北東調査区
SG2247	第5・6回	Ⅵ層	古代	→SD2242	北東調査区
SG2248	第8回	Ⅵ層	古代	→SD2242	拡張トレンドチ1
SG2249	第5・6回	H-2層	近世以降	SB1989 (No. 11・12)・SB1988 (No. 11・12)・ SB1991 (No. 11・12)・SF2238・SF2239 →	北西・北東・南東調査区
SG2250	第8回	Ⅵ層	近世以降	—	拡張トレンドチ1
SK2251	第23回	V-5層	古代か	—	北西調査区
SK2252	第5回	V-5層	古代か	SB1991 (No. 4)・SB1987 (No. 8) →	北西調査区
SK2253	第5回	V-5層	古代か	SB1986 (No. 12)・SB1989 (No. 8)・SB1989 (No. 4) →	北西調査区
SK2254	第5回	V-2・①層	古代か	—	北西調査区
SK2255	第5回	V-2・①層	古代か	—	北西調査区
SK2256	第5回	V-2・①層	古代か	—	北西調査区
SK2257	第23回	V-2・①層	古代か	SB1987 (No. 4) →	北西調査区
SK2258	第23回	V-2・①層	古代か	SA2235 →	北西調査区
SK2259	第5回	V-5層	古代か	—	北西調査区
SK2260	第23回	VI層	古代	—	南東調査区
SK2261	第23回	VI層	古代か	—	南東調査区
SK2262	第17回	VI層	古代か	SD2241 →	南東調査区
SK2263	第17回	VI層	古代か	—	南東調査区
SK2264	第23回	VI層	古代	SB1988 (No. 9) →	南東調査区

(重複遺構新旧関係凡例)

例 1 SA0001 → 当該遺構がSA0001よりも新しい。

表4 第102次調査出土遺物属性表①

遺物No.	図面番号	写真図版	出土地点・位相	グリッド	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	備考
9-897	第11回1	図版25-1	SB1997 (No. 4) 柱埴筋底面	—	石製品	砥石	—	—	—	凝灰岩製。4面使用。上部に穿孔。
9-898	第11回2	図版25-2	SB1991 (No. 12) 削り方底面	—	繩	自然繩	—	—	—	泥岩。
9-899	第12回1	図版25-3	SB1987 (No. 8) 削り方理土	—	瓦	丸瓦	—	—	—	凸面撫で調整。圓面布目压痕。黒色。軟質。
9-900	第12回2	図版25-4	SB1988 (No. 9) 削り方理土	—	瓦	平瓦	—	—	—	一枚作り。凸面彫目叩痕。灰黄色。硬質。
9-901	第12回3	図版25-5	SB1989 (No. 10) 削り方理土	—	瓦	平瓦	—	—	—	一枚作り。凸面彫目叩痕。圓面布目压痕。黒色。硬質。
9-902	第12回4	図版25-6	SB1988 (No. 10) 削り方理土	—	瓦	平瓦	—	—	—	一枚作り。凸面彫目叩痕。圓面布目压痕。灰黄色。硬質。
9-903	第15回1	図版25-7	SF2239P2-2 埋土	—	須恵器	坏	—	8.6	—	体部下端から底部全面に回転ヘラケツリ調整。「X」字の刻印。
9-904	第16回1	図版25-8	SA2236 布振り理土	—	瓦	平瓦	—	—	—	一枚作り。凸面彫目叩痕。圓面布目压痕。灰色。やや軟質。表面劣化。
9-905	第16回2	図版25-9	SA2237 抜き取り埋土	—	瓦	平瓦	—	—	—	一枚作り。凸面彫目叩痕。圓面布目压痕。灰色。やや軟質。表面劣化。
9-906	第19回1	図版25-10	SF2244埋土	—	弥生土器	變形土器	—	9.0	—	
9-907	第19回2	図版25-11	SF2244埋土	—	弥生土器	變形土器	—	—	—	弥生時代前期
9-908	第19回3	図版25-12	SF2244埋土	—	弥生土器	變形土器	—	—	—	弥生時代中期
9-909	第20回1	図版25-13	SF2244埋土	—	瓦	平瓦	—	—	—	一枚作り。凸面彫目叩痕。圓面布目压痕。灰黄色。硬質。系切り方向上から下。
9-910	第21回1	図版25-14	SQ2247埋土	—	須恵器	廉(転用鏡)	—	—	—	内面転用鏡。
9-911	第22回1	図版26-1	SQ2247埋土	—	瓦	丸瓦	—	—	—	有段丸瓦。凸面撫で調整。圓面布目压痕。褐色～橙色。やや軟質。
9-912	第24回1	図版26-2	SK2260埋土	—	赤褐色土器	廉	—	9.6	—	
9-913	第24回2	図版26-3	SK2264埋土	—	土師器	廉	—	6.3	—	平底廉。内面に刷毛目調整。底部鏡の靠痕と壓痕。内面～底部に二次的被熱痕。
9-914	第27回1	図版26-4	SK2242埋土	—	土師器	廉	24.0	—	—	長胴廉。外縁1条の沈線。外縁・内面刷毛目調整。外縁頸部丁寧な撫で調整。
9-915	第27回2	図版26-5	SK2242埋土	—	赤褐色土器	廉	—	9.0	—	中型廉。系切り。体部下端に網目目調整。
9-916	第27回3	図版26-6	SK2242埋土	—	陶器	碗	9.8	—	—	内外面無釉。
9-917	第27回4	図版26-7	SK2242埋土	—	鉄製品	鉄錐	—	—	—	先端二叉。
9-918	第27回5	図版26-8	SK2242埋土	—	繩	飛鏃か	—	—	—	ホルンフェルス製。
9-919	第27回6	図版26-9	SK2243埋土	—	磁器	染付瓶	—	—	—	染付は西洋コバルト。
9-920	第28回1	図版26-10	SQ2242埋土	—	瓦	平瓦	—	—	—	一枚作り。凸面彫目叩痕。圓面布目压痕。灰黄色。硬質。系切り方向左上から右下。
9-921	第28回2	図版26-11	SQ2242埋土	—	瓦	平瓦	—	—	—	一枚作り。凸面彫目叩痕。圓面布目压痕。灰黄色。やや硬質。系切り方向下から外。
9-922	第29回1	図版27-1	SQ2249埋土	—	土師器	坏	13.0	—	—	有段丸底坏。外面上半周で調整。体部下半手持ちケズリ調整。内面ミガキ。内面黒色処理。
9-923	第29回2	図版27-2	SQ2249埋土	—	須恵器	坏	14.0	9.0	4.3	ヘラ切り後懸(懸)縁で調整。
9-924	第29回3	図版27-3	SQ2249埋土	—	須恵器	坏	9.2	—	—	ヘラ切り後軽い撫で調整。体部下半にケズリ調整。
9-925	第29回4	図版27-4	SQ2249埋土	—	須恵器	蓋(転用鏡)	—	—	—	つまみ部欠損。内面転用鏡。
9-926	第29回5	図版27-5	SQ2249埋土	—	須恵器	廉(転用鏡)	—	—	—	内面転用鏡。
9-927	第29回6	図版27-6	SQ2249埋土	—	赤褐色土器	坏	—	5.4	—	静止系切り無調整。
9-928	第29回7	図版27-7	SQ2249埋土	—	赤褐色土器	廉	13.2	—	—	小型廉。外側カキ目調整と刷毛目調整。
9-929	第29回8	図版27-8	SQ2249埋土	—	赤褐色土器	廉	—	7.4	—	小型廉。外側カキ目調整と刷毛目調整。

表5 第102次調査出土遺物属性表②

遺物No.	図面番号	写真図版	出土地点 ・層位	グリッド	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
9-930	第29図9	図版27-9	SG2249埋土	—	弥生土器	婬形土器	—	—	—	満巻き文か。弥生時代中期。
9-931	第29図10	図版27-10	SG2249埋土	—	弥生土器	鉢形土器	—	—	—	弥生時代中期。
9-932	第29図11	図版27-11	SG2249埋土	—	弥生土器	婬形土器	—	—	—	弥生時代前期。円弧文。
9-933	第29図12	図版27-12	SG2249埋土	—	磁器	染付碗	—	—	—	肥前系磁器。内外面に菊と米穀文。
9-934	第29図13	図版27-13	SG2249埋土	—	磁器	碗	—	高台径 4.0	—	肥前系磁器。蛇ノ目釉剥ぎ。
9-935	第30図1	図版28-1	SG2249埋土	—	瓦	平瓦	—	—	—	一枚作り。凸面端子目叩き底。凹面布目压痕。軽い撫で。硬質。糸切り方向左から右下。
9-936	第30図2	図版28-2	SG2249埋土	—	瓦	平瓦	—	—	—	一枚作り。凸面端子目叩き底。凹面布目压痕。灰黄色。硬質。糸切り方向左から右下。
9-937	第30図3	図版28-3	SG2249埋土	—	瓦	平瓦	—	—	—	一枚作り。凸面端子目叩き底。凹面布目压痕。灰黄色。硬質。
9-938	第30図4	図版28-4	SG2249埋土	—	瓦	丸瓦	—	—	—	凸面に溝目の叩き底と全面撫で調整。凹面布目压痕。分割沈線あり。
9-939	第31図1	図版28-5	I層	QC~QD 85~86	須恵器	横板	—	—	—	外面上にカキ目調整。内面粘土貼り付け底。撫で調整。
9-940	第31図2	図版28-6	I層	P885	陶器	擂鉢	—	—	—	内外面鉄輪。内面14条一単位の鉄目。
9-941	第31図3	図版28-7	II層	松原ト レンヂ 1	須恵器	坏	13.2	8.2	3.4	ヘラ切り後軽い撫で調整。
9-942	第31図4	図版28-8	II層	PQ96	須恵器	坏 (転用便)	—	7.2	—	糸切り無調整。内面転用便。
9-943	第31図5	図版28-9	II層	PQ97	須恵器	台付坏	—	高台径 7.2	—	ヘラ切り後軽い撫で調整。
9-944	第31図6	図版29-1	II層	PP96	埴	—	—	—	—	長方形。二次的な被熱痕。
9-945	第31図7	図版29-2	II層	PQ97	石製品	砾石	—	—	—	凝灰岩製。4面使用。
9-946	第31図8	図版29-3	II層	松原ト レンヂ 1	石製品	砾石	—	—	—	凝灰岩製。4面使用。上部に穿孔。
9-947	第31図9	図版29-4	II層	松原ト レンヂ 1	弥生土器	高坏	—	11.0	—	列点文。弥生時代前期。
9-948	第31図10	図版29-5	II層	QA87	弥生土器	鉢形土器	—	—	—	弥生時代前期。
9-949	第31図11	図版29-6	II層	松原ト レンヂ 1	石器	石鎧	—	—	—	珪質頁岩。基部欠損。刃部再生か。
9-950	第31図12	図版29-7	II層	松原ト レンヂ 1	錢貨	寛永通寶	—	—	—	新寛永。秋田川尻錢。外縁外径24.2mm、内郭内径7.1mm、外縁厚1.9mm、重量1.4g
9-951	第31図13	図版29-8	III層	Q901	磁器	青磁碗	—	—	—	肥前系磁器。外面に青磁。内面口縁部に西行摺文。
9-952	第31図14	図版29-9	III層	Q90	磁器	染付碗	—	4.2	—	肥前系磁器。外面不明文様。見込みに草花文。
9-953	第31図15	図版29-10	IV層	Q90	磁器	染付碗	—	—	—	肥前系磁器。内面に草花文。
9-954	第31図16	図版29-11	IV層	QAS8	磁器	染付碗	—	—	—	外面に草花文。
9-955	第31図17	図版29-12	IV層	QAS8	陶器	鉢	—	—	—	灰釉。
9-956	第31図18	図版29-13	IV層	QAS8	土製品	耳飾り	—	—	—	抉り部あり。
9-957	第32図1	図版29-14	V-2-②層 (SG2245)	Q901	土師器	台付壺	—	高台径 5.5	—	大型。内面黒色処理。
9-958	第32図2	図版29-15	V-2-②層 (SG2245)	Q085	土師器	甕	—	8.2	—	底部に木葉痕。底部周囲軽く撫で調整。
9-959	第32図3	図版29-16	V-2-②層 (SG2245)	Q901	赤褐色土器	坏	—	6.4	—	糸切り無調整。
9-960	第32図4	図版29-17	V-2-②層 (SG2245)	Q901	赤褐色土器	皿	10.1	5.5	2.1	糸切り無調整。柱状高台。
9-961	第32図5	図版29-18	V-2-②層 (SG2245)	Q901	赤褐色土器	台付壺	—	高台径 7.2	—	糸切り無調整。
9-962	第32図6	図版30-1	V-2-③層	PO85	土師器	甕	—	11.0	—	底部周囲に砂付着。軽い撫で調整。
9-963	第32図7	図版30-2	V-2-③層	PQ95	須恵器	坏 (転用便)	—	9.0	—	ヘラ切り後軽い撫で調整。内面転用便。

表6 第102次調査出土遺物属性表③

遺物No.	図面番号	写真図版	出土地点 ・層位	グリッド	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	備考
9-964	第32図8	図版30-3	V-2-3層	PP86	赤褐色土器	环	—	5.8	—	系切り無調整。
9-965	第32図9	図版30-4	V-2-3層	PP86	赤褐色土器	環	22.0	—	—	外面カキ目調整。口縁部撫で調整。
9-966	第32図10	図版30-5	V-2-3層	PO85	陶	—	—	—	—	長方形。二次的な被熱痕。
9-967	第32図11	図版30-6	V-2-3層	PP87	鉄製品	鉄鑓	—	—	—	先端部欠損。
9-968	第32図12	図版30-7	V-3層	PQ84	鉄製品	刀子	—	—	—	柄に孔。
9-969	第32図13	図版30-8	V-5層	PT89	須恵器	环	13.4	7.7	3.4	系切り無調整の环。
9-970	第32図14	図版30-9	V-5層	PP86	須恵器	环	—	8.6	—	ヘラ切り後長い撫で調整。
9-971	第32図15	図版30-10	V-5層	PP86	須恵器	环	—	7.6	—	ヘラ切り後長い撫で調整。
9-972	第32図16	図版30-11	V-5層	QD87	赤褐色土器	环	10.1	5.5	4.1	体部下端ケズり調整。内面撫で調整により平滑。切り離し摩滅のため不明。
9-973	第32図17	図版30-12	V-5層	QB86	圓文土器	深鉢	—	—	—	外面網目状然系。
9-974	第33図1	図版30-13	IV層	QA90	瓦	平瓦	—	—	—	一枚作り。凸面格子目の叩き痕。圓面布目压痕。凸面に二次的な被熱痕跡。灰黄色。硬質。
9-975	第33図2	図版30-14	IV層	QD88	瓦	契斗瓦	—	—	—	凸面網目叩き痕撫で調整。圓面布目压痕。黒色。やや硬質。
9-976	第33図3	図版30-15	V-1層	PO85	瓦	平瓦	—	—	—	一枚作り。凸面格子目の叩き痕。圓面布目压痕。灰黄色。硬質。系切り方向右から左上。
9-977	第33図4	図版30-16	V-1層	PO85	瓦	平瓦	—	—	—	一枚作り。凸面格子目の叩き痕。圓面布目压痕。灰黄色。硬質。
9-978	第33図5	図版30-17	V-3層	PS84	瓦	平瓦	—	—	—	一枚作り。凸面網目叩き痕。圓面布目压痕。灰黄色。硬質。
9-979	第33図6	図版30-1	V-4-2層 (SG2245)	QC88	瓦	平瓦	—	—	—	一枚作り。凸面網目叩き痕・撫で調整。圓面布目压痕。灰黄色。硬質。
9-980	第33図7	図版30-2	V-5層 (SG2245)	QB86	瓦	平瓦	—	—	—	一枚作り。凸面網目叩き痕・撫で調整。圓面布目压痕。灰黄色。硬質。
9-981	第33図8	図版30-3	V-6-1層 (SG2245)	QD87	瓦	平瓦	—	—	—	一枚作り。凸面網目叩き痕。圓面布目压痕。灰黄色。硬質。
9-982	第33図9	図版30-4	V-6-1層 (SG2245)	QA87	瓦	平瓦	—	—	—	一枚作り。凸面網目叩き痕。圓面布目压痕・撫で調整。灰黄色。硬質。
9-983	第33図10	図版30-5	V-6-1層 (SG2245)	QD88	瓦	平瓦	—	—	—	一枚作り。凸面網目叩き痕。圓面布目压痕。灰黄色。硬質。
9-984	第34図1	図版30-6	V-6-1層 (SG2245)	QC87	瓦	丸瓦	—	—	—	凸面網目叩き痕・全面撫で調整。圓面布目压痕。灰黄色。軟質。分割沈継あり。
9-985	第34図2	図版30-7	V-6-1層 (SG2245)	QC87	瓦	丸瓦	—	—	—	凸面網目叩き痕・全面撫で調整。圓面布目压痕。灰黄色。軟質。
9-986	第34図3	図版30-8	V-6-1層 (SG2245)	QC87	瓦	丸瓦	—	—	—	凸面網目叩き痕・全面撫で調整。圓面布目压痕。灰黄色。軟質。



### III 第103次調査報告

#### 1) 調査経過

第103次調査は焼山地区北西部を対象に、平成25年10月9日から11月7日まで調査を実施した。調査面積は77m<sup>2</sup>である（第35図）。

調査地は政庁から、北西約300mの城外北西部の地点である。調査地は南から北に傾斜しており、現地形が良好に残されている原野であるが、かつて調査地東側に宅地があり、そのための私道が東西方向にみられる。第92次調査地B区において中世の土塁区画施設と小規模な城門跡が発見され、焼山地区北西部が古代以外に中世にも利用されていたことが判明し、当該地周辺の利用実態を把握するために、調査を実施した。今回は特に土塁の延長部の把握を調査の主目的とした。

調査区は現況で土塁状の高まりが観察される場所にトレンチを3箇所設定した（第36・37図）。A区は2m×18m、B区は2m×17m、C区は1m×7mのトレンチである。調査方法はトレンチ調査で、遺構の検出確認を行った後、検出遺構については、時期等遺構内容の把握が必要なものについて、保存に留意しながら半裁し遺構調査を行った。

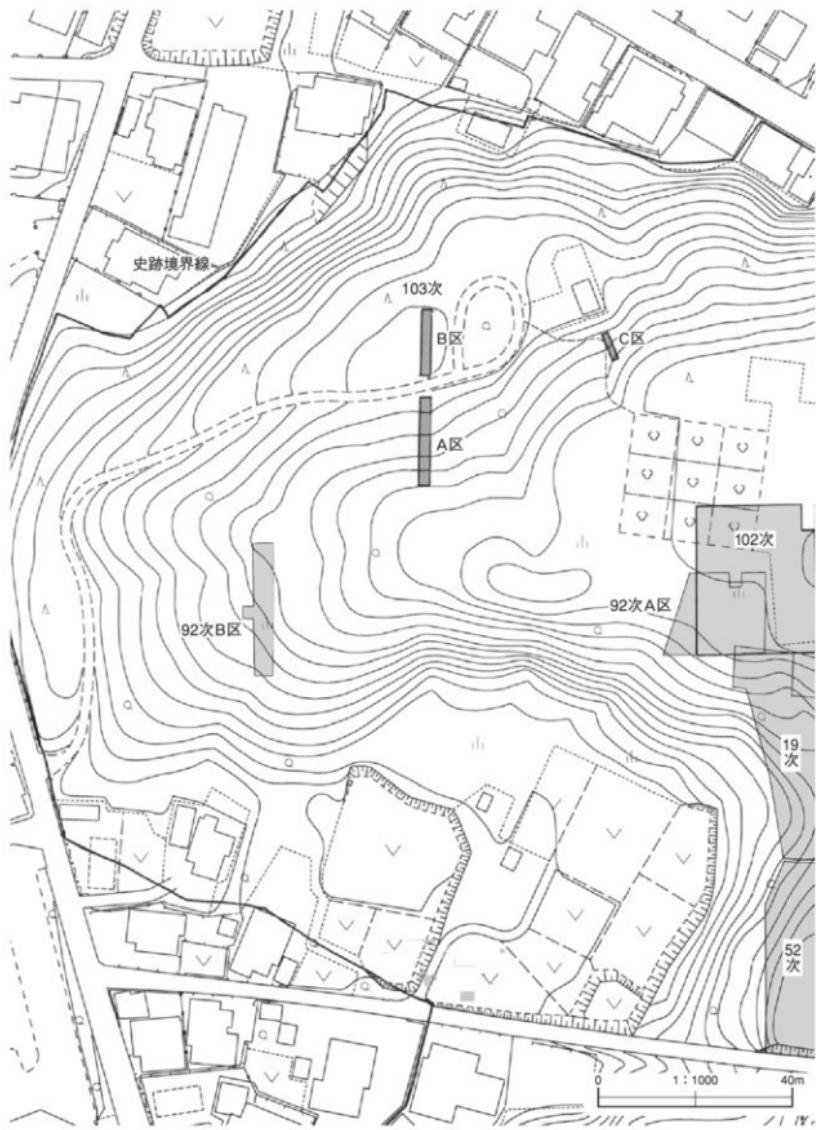
調査は、まず調査地周辺の草刈り、基準杭測量、調査区の設定、調査前状況の地形測量、調査機材の搬入、A・B区の重機による表土除去作業を行った（10月9日～11日）。表土除去後、A・B区において、人手により旧耕作土である第Ⅱ層を掘り下げていき、B区において第Ⅱ～3層上面で近世遺構である溝を検出し、記録化を行った（10月15日～18日）。第Ⅱ層を除去後、地山飛砂層である第Ⅲ-1層、旧表土である第Ⅲ-2・3層を検出し、A区でSX2265、B区でST2269・ST2270を検出した（10月21日～23日）。B区のST2269・ST2270は近世以降の烟畝跡に一部切られていたため、煙畝跡除去後、半裁を行った。また、SX2265の上部を精査したところSA2266を検出した。その後SX2265の西側を半裁したところ、下部からST2267・ST2268を検出し、半裁および記録化を行った（10月24日～29日）。また、A区南半において土層堆積確認のため、サブトレンチを設定し掘り下げを行い、旧地表面である第Ⅲ-3層の下にもう一つの飛砂層である第Ⅲ-4層と地山粘土層である第Ⅲ-5層を検出した。旧地表面である第Ⅲ-3-②層からは縄文時代の石鎚が出土したことから上層の飛砂層である第Ⅲ-1層は縄文時代以後、第Ⅲ-4層は縄文時代以前に、堆積した飛砂であると考えられた。また、ST2267・ST2269からは人骨とともに16世紀後半と考えられる模鋳銭が出土し、土壙墓であると判断された。C区の掘り下げを行い、SX2271を検出した（10月29日～11月1日）。土層断面の記録化の後、人手により埋め戻し、機材撤収を行い、調査を終了した（11月5日～7日）。

#### 2) 検出遺構と出土遺物

##### ① A・B区

###### SX2265土塁跡（第38・39図、図版2・20・21・22）

A区の第Ⅲ-1層地山飛砂層面で検出された東西方向の土塁跡である。東で1度北に振れ、東西に調査区外へ延びる。土塁は、整地のための整地層fを20～25cm敷いた後に、a～eの盛土で構築されている（第39図）。a～eの盛土の厚さはそれぞれ5～15cmである。土塁整地層fと盛土eの北側端部には直径2～3cmの円礫が混じる。土塁の基底幅（盛土a～eで計測）は4.8m、上面では幅1.5m、土塁南側平坦部（土塁内側平坦部）との比高差（盛土a～eで計測）は0.55m、北側平坦部（土塁外側平坦部）



第35図 第103次調査周辺地形図

との比高差は1.2mとなる。また、SX2265の南側では、第Ⅲ-1層地山飛砂層が削平されており、旧表土が露出しているような土層の堆積状況であり、空堀のような機能を果たしていたと考えられる。なお、土壌上部の盛土b面でSA2266を検出している。

ST2268・ST2267と重複し、これらよりも新しい。

#### S X2265出土遺物（第42図1、図版32）

盛土中から出土した。

須恵器（第42図1）：1は壺の体部破片である。体部上半に自然釉が認められる。

#### S A2266材木痕跡（第38・39図、図版20・21）

A区SX2265土壌上で検出された区画施設である。SX2265の盛土b面で検出された。布掘り溝を伴う東西方向の材木痕と推定されるが、調査では布掘り溝のみが確認され、材木痕跡は確認できなかった。SX2265と同方向で、東で1度南に振れ、東西に調査区外へ延びる。

布掘り溝跡は下幅25cm、上幅40cm、深さ22cmで、断面はU字状を呈する。布掘り溝を埋めた後、SX2265の盛土aで覆われるため、SX2265と同時期であると考えられる。

位置的にST2267・ST2268と重複し、層位的にこれらよりも新しい。

#### S T2267土壌墓（第40図、図版20）

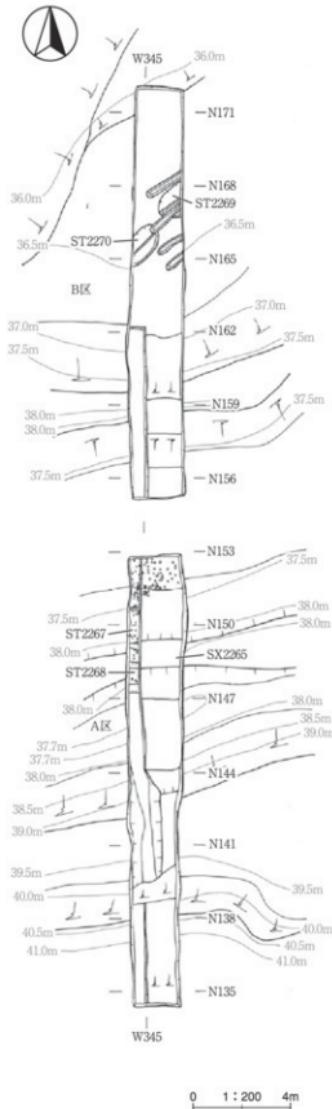
A区のSX2265土壌跡の直下で、第Ⅲ-1層地山飛砂層面で検出された。南北1.7m、深さ45cmの土壌墓である。調査範囲が狭小であるため、平面形は不明であるが、梢円形を呈すると推定される。埋土には若干の炭化物が含まれ、人骨片が複数出土し（図版33-7）、火葬墓と判断される。また、埋土には直径2cm程度の礫が混じる。

SX2265と重複し、これよりも古い。また、SA2266と位置的に重複し、これよりも古い。

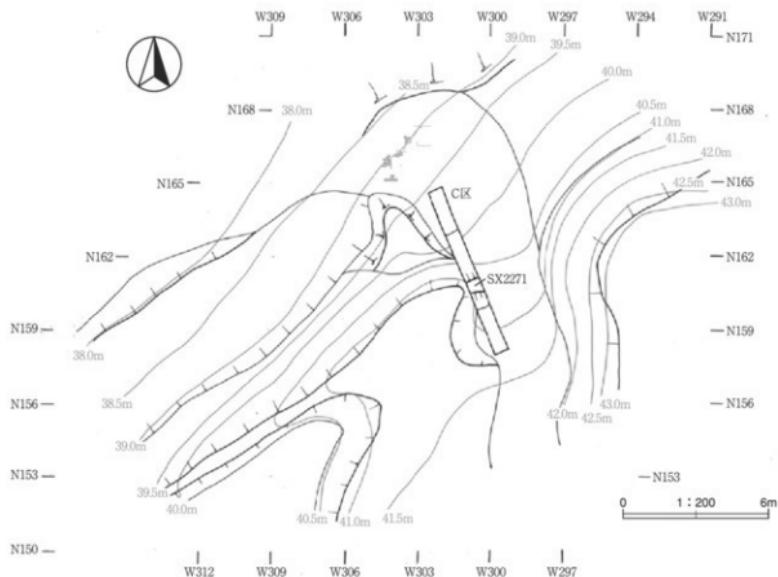
#### S T2267出土遺物（第42図2・3、図版32）

いずれも埋土出土である。

銭貨（第42図2）：2は洪武通寶（明・初鑄1368年）である。銭文が不鮮明でゆがみがあり、本邦の模鋳銭と判断される。



第36図 第103次調査地A・B区検出遺構図①



第37図 第103次調査地C区検出遺構図①

鉄製品（第42図3）：3は釘である。先端部は折れた状態で腐食し貼り付いている。

#### S T 2268土壤墓（第40図、図版20）

A区のSX2265土壘跡の直下で、第III-1層地山飛砂層面で検出された。南北1.2m、深さ34cmの土壤墓である。調査範囲が狭小であるため、平面形は不明であるが、楕円形を呈すると推定される。埋土には若干の炭化物が含まれる。

SX2265と重複し、これよりも古い。また、SA2266と位置的に重複し、これよりも古い。

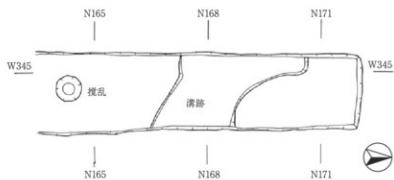
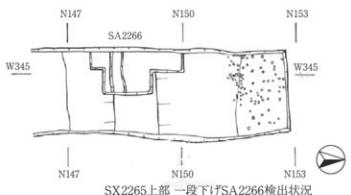
#### S T 2269土壤墓（第40図、図版22・23）

B区の第III-1層地山飛砂層面で検出された。長軸1.5m以上、短軸1m以上、深さ12cmの楕円形を呈し、長軸方向は北で54度東に振れる。埋土には若干の炭化物が含まれる。

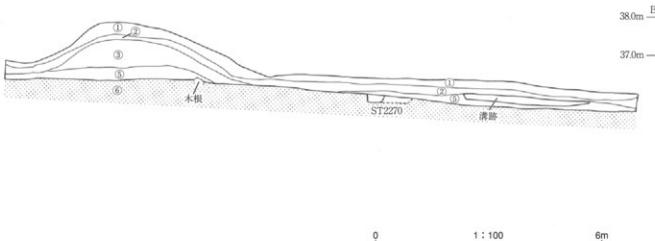
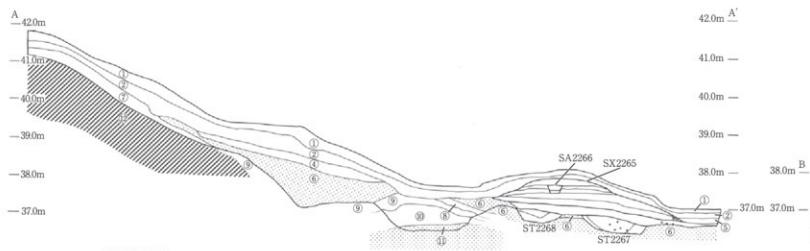
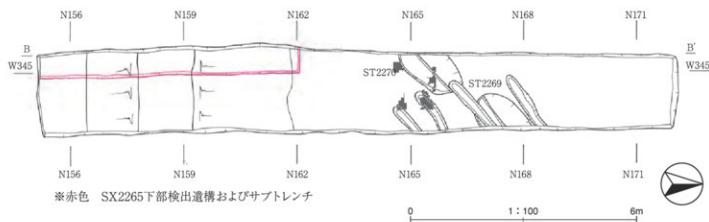
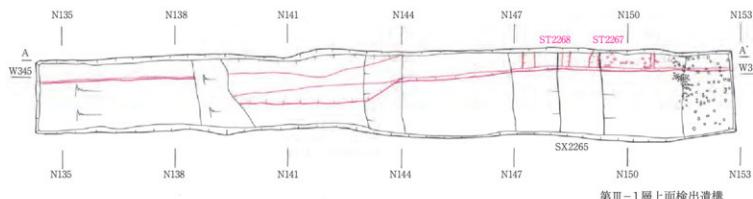
#### S T 2269出土遺物（第42図4、図版32）

土壤墓上面での出土である。

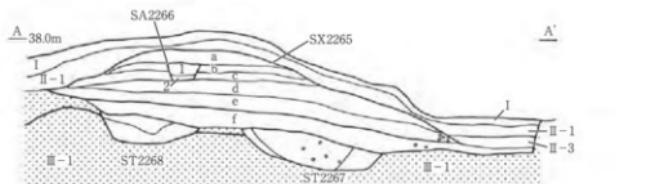
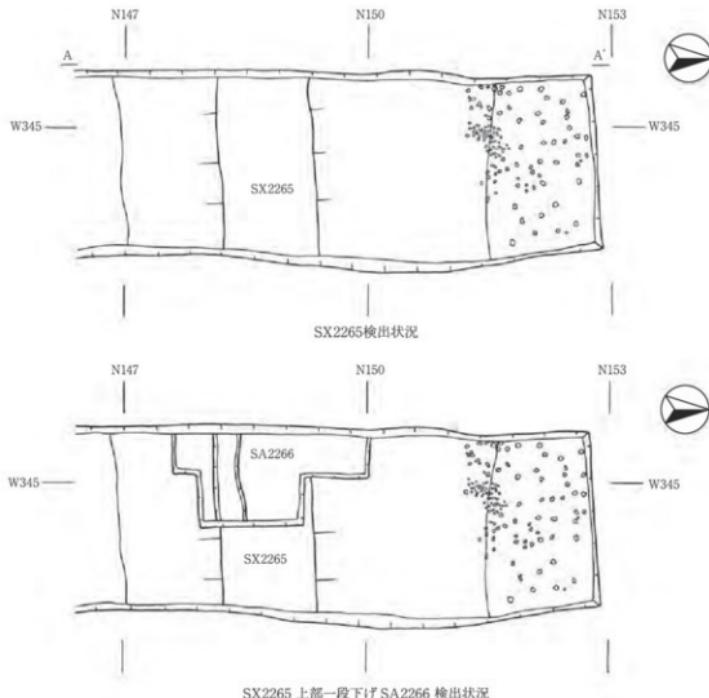
銭貨（第42図4）：4は永楽通寶（明・初鑄1408年）である。銭文が明瞭で厚さも厚く、本銭の可能性が高い。



A区



第38図 第103次調査地 A・B区検出遺構図②および土層断面図



- SX2265  
 a 土壌盛土：暗褐色砂質土(10YR3/4)  
 b 土壌盛土：暗褐色砂質土(10YR3/3)  
 c 土壌盛土：黒褐色砂質土(10YR2/3)  
 d 土壌盛土：暗褐色土(10YR3/4)  
 北側端部にφ 2～3 cmの礫が混じる  
 e 土壌盛土：暗褐色土(10YR3/3)  
 北側端部にφ 2～3 cmの礫が混じる  
 f 土壌整地層：褐色砂質土(10YR4/4)  
 北側端部にφ 2～3 cmの礫が混じる

- SA2266  
 1 褐色土(10YR4/4)  
 2 黒褐色砂質土(10YR2/3)に褐色土(10YR4/4)  
 が若干混じる

第39図 SX2265土壌跡、SA2266材木場跡

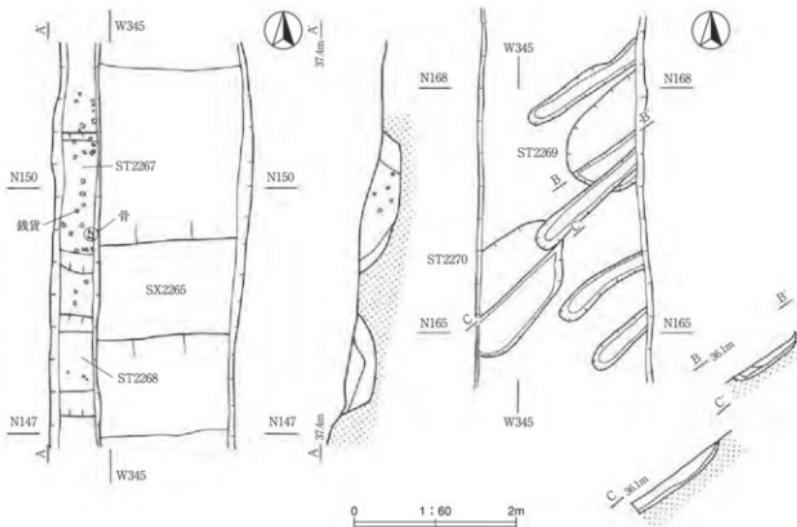
## S T2270土壙墓（第40図、図版23）

B区の第III-1層地山飛砂層面で検出された。長軸1.7m以上、短軸1.1m、深さ16cmの橢円形を呈し、長軸方向は北で50度東に振れる。埋土には若干の炭化物が含まれ、人骨片が出土し（図版33-6）、火葬墓と判断される。

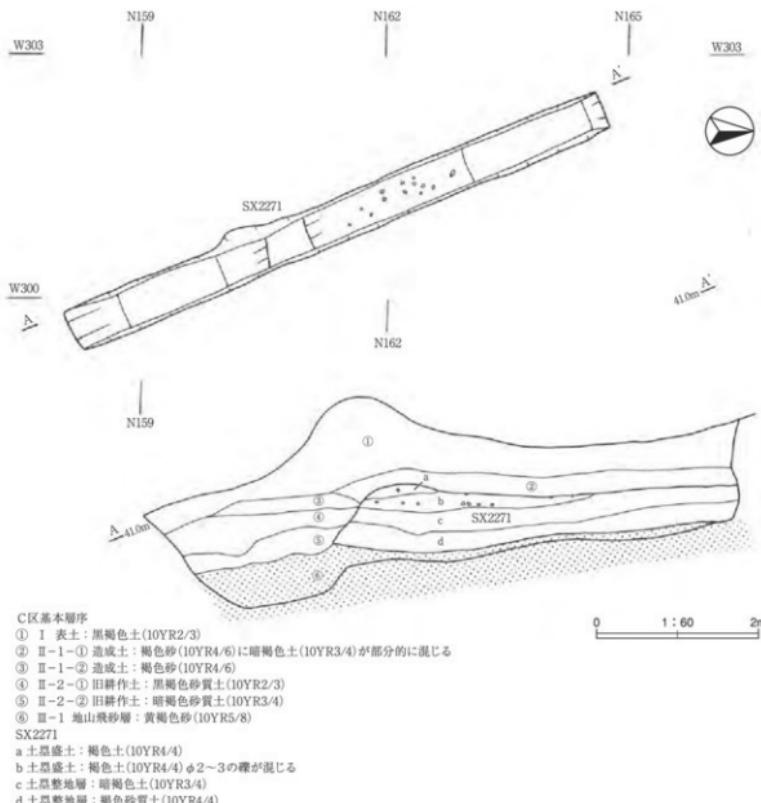
## ②C区

## S X2271土壙跡（第37・41図、図版23・24）

C区の第III-1層地山飛砂層面で検出された東西方向の土壙跡である。東で16度北に振れ、東西に調査区外へ延びる。現地形においても土壙部分の盛土の状態が観察され、A区で検出されたST2265の延長であると考えられる（図版23-④）。南側から北側へ傾斜する旧地形であり、北側の低い部分を整地するために、整地層c・dを50cm敷いた後に、a・bの盛土で構築されている（第41図）。a・bの盛土の厚さは10~20cmである。盛土bには直径2~3cmの円礫が混じり、北側端部で面的に確認された。土壙の基底幅（盛土a・bで計測）は3.2m、上面では幅0.6m、土壙南側平坦部（土壙内側平坦部）との比高差（盛土a～整地層dで計測）は0.5m、北側平坦部（土壙外側平坦部）との比高差（盛土a・bで計測）は1mである。SX2271は上部が削平を受けていると考えられ、SX2265上部で確認された材木跡のような区画施設は確認はされなかった。



第40図 ST2267・ST2268・ST2269・ST2270土壙墓



第41図 第103次調査地C区検出遺構②、SX2271土壌跡

### 3) 基本層序および各層出土遺物

#### 基本層序（第38・41図、図版21・22）

第103次調査地の旧地形はA～C区いずれも南から北にかけて傾斜する地形である。第103次調査の基本層序をまとめると以下のようになる。

**第I層** 表土：現表土。調査区全体を覆う。黒褐色土(10YR3/2)。

**第II層** 造成土・旧耕作土・近世造成土：近世以降の造成土もしくは耕作土である。下記に細分される。

**第II-1層** 造成土：褐色土(10YR4/4)。B区南側の盛土状の高まりは、第II-1'層（暗褐色砂質土[10YR3/4]）とした。このB区南側の盛土状の高まりは、一度に造成されており、また木が立ち枯れたまま盛土に覆われていたことから、近世以前の遺構ではなくごく最

近の造成であると判断した。またC区では、当該層序を2つに分けることができ、第II-1-①層（褐色砂〔10YR4/6〕に暗褐色土〔10YR3/4〕が部分的に混じる）と第II-1-②層（褐色砂〔10YR4/6〕）が認められる。

第II-2層 旧耕作土：黒褐色土（10YR3/2）。A区中央にのみ分布する。また、C区では当該層序を2つに分けることができ、第II-2-①層（旧耕作土：黒褐色砂質土〔10YR2/3〕）と第II-2-②層（旧耕作土：暗褐色砂質土〔10YR3/4〕）が認められる。

第II-3層 近世造成土：にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）。A区では北側にのみ、B区では全体に分布する。

第III層 地形の基盤を成す地山飛砂層・旧表土・地山粘土層である。下記に細分される。

第III-1層 地山飛砂層（上層）：明黄褐色砂（10YR6/6）。飛砂層は調査区で2層確認され、当該層序はその上層のものである。A区中央からB・C区全体に広がる。

第III-2層 地山腐植土・旧表土：にぶい黄褐色土（10YR4/3）。A区南側にのみ分布する。

第III-3-①層 旧表土：褐色砂質土（10YR4/4）。A区中央部にのみ分布する。

第III-3-②層 旧表土：にぶい黄褐色砂質土（10YR4/3）に明黄褐色砂（10YR6/6）が混じる。A区中央部にのみ分布する。

第III-3-③層 旧表土：褐色砂質土（10YR4/4）。A区中央部にのみ分布する。

第III-4層 地山飛砂層（下層）：黄褐色砂（10YR5/6）。飛砂層の下層である。

第III-5層 地山粘土層：にぶい黄褐色砂質土（10YR5/8）に直径1～5cmの礫が混じる。

A区では、地山飛砂層が2層みられ、飛砂層が著しく堆積する時期が2度あったと考えられる。

#### 各層出土遺物

##### 表採（第42図5・6、図版32）

陶磁器（第42図5・6）：5は瀬戸美濃系磁器端反碗で、二次的な被熱痕跡がある。6は白岩窯産陶器壺で、内外面鉄釉を施し、外面になまこ釉を施す。

##### 第I層 出土遺物（第42図7・8、第43図1、図版32・33）

すべてA区出土である。

中世陶器（第42図7）：7は珠洲系中世陶器擂鉢の体部破片で、内面に8条一単位の深く粗い鉗し目が認められる。

陶器（第42図8）：8は産地不明の灰釉陶器碗の破片である。内面は鉄釉を施している。

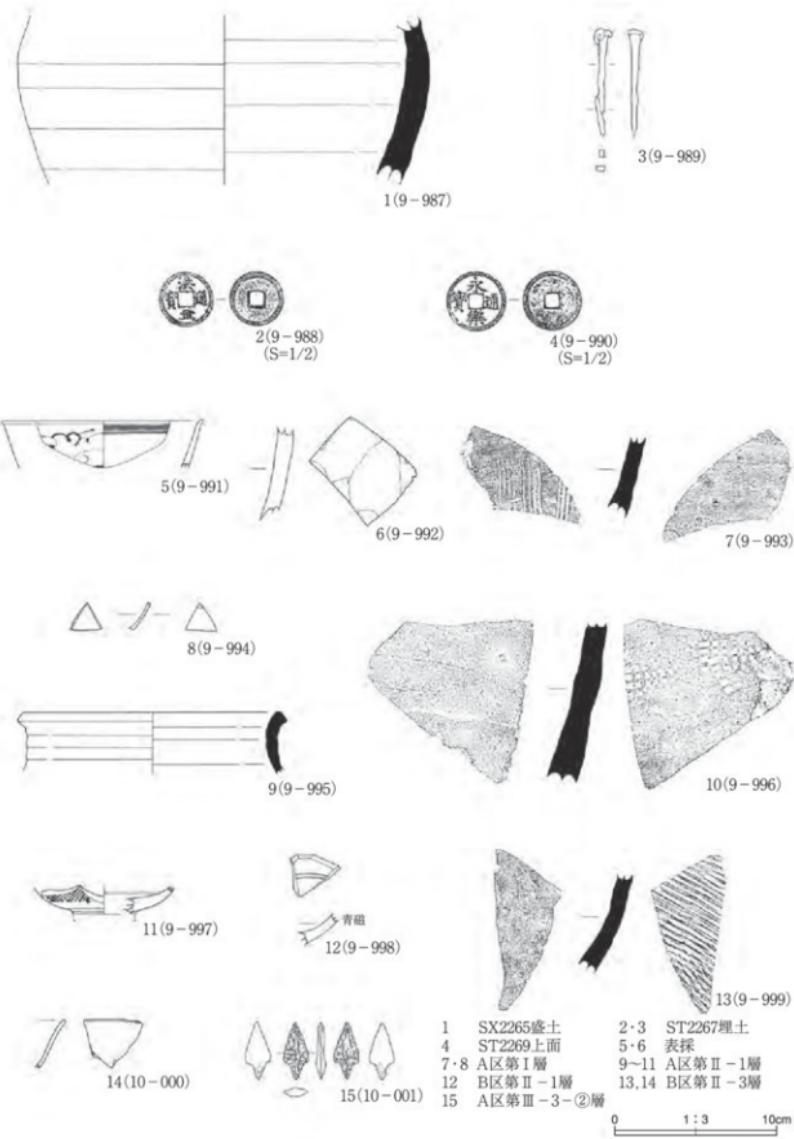
瓦（第43図1）：1は棟瓦で、暗赤褐色を呈する赤瓦である。

##### 第II-1層 出土遺物（第42図9～12、第43図2、図版32・33）

第42図9～11はA区、第42図12はB区、第43図2はC区出土である。

中世陶器（第42図9・10）：9は珠洲系中世陶器壺の口縁部破片で、「壺R種」と考えられる。10は越前産陶器壺の体部破片である。内面に撫で調整、外面に格子目の叩き痕跡が認められ、全体に茶褐色を呈する。

磁器（第42図11・12）：11は肥前系磁器碗の体部下半の破片である。外面に格子目状の文様、内面に二重円囲文を染付けている。12は肥前系陶器青磁碗の体部下半の破片である。内面に二重円囲文を染付けている。



第42図 SX2265土壙跡・ST2267土壤墓・ST2269土壤墓・第I～III層出土遺物

瓦（第43図2）：2は一枚作りの平瓦である。凸面に縄目の叩き痕跡、凹面に布目圧痕が認められる。黒色～灰色を呈し、硬質の瓦である。

第II-3層 出土遺物（第42図13・14、図版33）

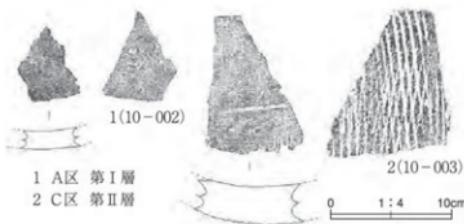
いずれもB区出土である。

中世陶器（第42図13）：13は壺の体部破片である。内面は無文のアテ具痕、外面には平行の叩き痕跡が認められる。

磁器（第42図14）：14は底地不明の染付端反碗である。外面にわずかに染付が認められる。

第III-3-②層 出土遺物（第42図15、図版33）

石器（第42図15）：15は珪質頁岩製の石鎌である。基部の表裏にアスファルトの付着が認められる。



第43図 第I・II層出土瓦

表7 第103次調査検出遺構一覧

遺構No.	図面番号	検出面	時期	重複遺構新旧関係	備考
SX2265	第38・39 図	III-1層	中世後期	ST2268・2267→	A区 東でI' 南
SA2266	第38・39 図	SX2265盛土B層	中世後期	ST2268・2267→	A区 東でI' 南
ST2267	第40図	III-1層	中世後期	→SX2265・SA2266	A区
ST2268	第40図	III-1層	中世後期	→SX2265・SA2266	A区
ST2269	第40図	III-1層	中世後期	—	B区 長軸北で54° 東
ST2270	第40図	III-1層	中世後期	—	B区 長軸北で50° 東
SX2271	第37・41 図	III-1層	中世後期	—	C区 北で50° 東

〔重複遺構新旧関係凡例〕

- 例1 SA0001→ 当該遺構がSA0001よりも新しい。  
 例2 →SA0001 当該遺構がSA0001よりも古い。

表8 第103次調査出土遺物属性表

遺物No.	図面番号	写真図版	出土地点 ・層位	グリ ッド	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	備考
9-987	第42図1	図版32-1	SX2265	—	須恵器	蓋	—	—	—	体部上半に自然釉。
9-988	第42図2	図版32-2	ST2267	—	鉢	洪武通寶	—	—	—	模鉄錢。外縁外径23.0mm、内郭内径6.1mm、外 縁厚1.3mm、重量3.0g
9-989	第42図3	図版32-3	ST2267	—	鉢	釘	—	—	—	先端部折れ。
9-990	第42図4	図版32-4	ST2269	—	鉢	永楽通寶	—	—	—	本鉢か。外縁外径25.1mm、内郭内径5.6mm、外 縁厚1.3mm、重量3.5g
9-991	第42図5	図版32-5	表採	—	磁器	罐反側	12.4	—	—	瓶口美濃系磁器。二次的な被熱痕。
9-992	第42図6	図版32-6	表採	—	陶器	甕	—	—	—	白岩窯産陶器。内外面鉄釉。外面なまこ釉。
9-993	第42図7	図版32-7	I 層	A区 QH14	中世陶器	擂鉢	—	—	—	珠洲系中世陶器。内面に8条1単位の深く粗い 凹目。IV期。
9-994	第42図8	図版32-8	I 层	A区 QL14	陶器	碗	—	—	—	灰釉陶器。内面は鉄釉。
9-995	第42図9	図版32-9	II-1層	A区 Q114	中世陶器	蓋	16.0	—	—	珠洲系中世陶器。蓋B種。IV期。
9-996	第42図10	図版32-10	II-1層	A区 Q114	中世陶器	甕	—	—	—	精前產陶器。内面に撫で調整、外面に格子目 の叩き痕。
9-997	第42図11	図版32-11	II-1層	A区 Q114	磁器	碗	—	—	—	肥前系磁器。外面に格子目状の文様、内面に 二重円図文を染付。
9-998	第42図12	図版32-12	II-1層	B区 QP14	磁器	青磁碗	—	—	—	内面に二重円図文を染付。
9-999	第42図13	図版33-1	II-3層	B区 QQ14	中世陶器	甕	—	—	—	内面無文のアケ具底、外面平行の叩き痕。
10-000	第42図14	図版33-2	II-3層	B区 QP14	磁器	罐反側	—	—	—	内面に染付。
10-001	第42図15	図版33-3	III-3-2層	A区 Q114	石器	石器	—	—	—	珪質頁岩製。基部の表面にアスファルト付 着。
10-002	第43図1	図版33-4	I 层	A区	瓦	板瓦	—	—	—	暗赤褐色。赤瓦。
10-003	第43図2	図版33-5	II 层	C区	瓦	平瓦	—	—	—	一枚作り。凸面縦目叩き痕。内面に布目压 痕。黒～灰色。硬質。

## IV 考 察

### 1. 第102次調査について

第102次調査地は焼山地区北部、第92次調査地A区の調査により外郭西門跡が発見された北東部隣接地点であり、外郭西門に取り付く外郭区画施設（外郭北西コーナー部）の実態把握と今後の環境整備事業に向けて調査を実施した。

調査の結果、外郭西門跡柱掘り方8基、材木列壠跡1条、柱列壠跡2条、築地壠跡2基、溝跡2条、井戸跡1基、土取り穴4基、土坑14基の他、近世以降の掘立柱建物跡1棟、溝跡2条、土取り穴2基、畝跡等が検出された。

これらの遺構については第92次調査地A区の検出遺構とあわせ、出土遺物や検出層位、重複関係などから、年代や新旧関係の把握が可能である。遺物包含層や検出遺構の年代について検討を行った上で、全体の利用状況と変遷について以下にまとめる。

#### 1) 各遺物包含層の年代について

第102次調査地においては様々な層が複雑に堆積しており、第Ⅱ章3の基本層序で述べたが、再度調査地の地域ごとに層の堆積状況をまとめると表9のようになる。

各層出土の年代比定資料を見ていくと、第Ⅲ層からは18世紀代に位置づけられる肥前Ⅳ期の肥前系磁器青磁碗（第31図13）が出土しており（註1）、江戸時代中期以降の造成土であると考えられる（以下、遺物の年代比定における「～に位置付けられる」の表記は、「～の」と表記する）。また、第Ⅳ層でも18世紀代の肥前Ⅳ期の肥前系磁器碗（第31図15）や産地不明であるが近世陶磁器（第31図16・17）が出土しており、これも江戸時代中期以降の耕作土であると考えられる。

第V層以下は、近世陶磁器を含まず古代以前の遺物しか出土せず、古代整地層であると考えられる。

第V-1層は、南西側にしか分布していないが、この層からは格子目瓦が出土している（第33図3・4）。格子目瓦は8世紀第4四半期から9世紀第2四半期のものと考えられる（註2）。また、第V-1層はSB1988 No. 9柱掘り方を覆っており、後述するがSB1988は9世紀第2四半期～第3四半期の外郭西門Ⅳ期であり、当該整地層はこれ以後の堆積であると考えられる。

第V-2層は、北西調査区に第V-2-①層と第V-2-②層が分布し、南東調査区に第V-2-③層が分布している。第V-2-②層からは、土師器の大型の台付壺（第32図1）、底径が縮小した赤褐色土器壺（第32図3）、底部切り離しが粗雑で柱状高台状になる赤褐色土器皿（第32図4）が出土しており、10世紀第1四半期のものと考えられる（註3）。また、第V-2-②層には炭化物が含まれており、秋田城で広く確認されている元慶2年（878）の元慶の乱による焼土・炭化物に由来する可能性が高い。第V-2-③層にも、同様に炭化物が多く含まれており、年代の下限を示す資料として、底径が5cm代に縮小した赤褐色土器壺（第32図8）が出土しており、9世紀第4四半期のものと考えられる。なお、第V-2-③層は外郭西門Ⅳ期のSB1988 No. 9掘り方を覆っている。したがって、第V-2層は9世紀第4四半期から10世紀第1四半期の整地層であると考えられる。また、この第V-2層よりも層位的に上位である第V-1層は、10世紀第1四半期以降であると考えられる。

第V-3層は、南東調査区にしか分布せず、年代比定となる資料も乏しく詳細は不明である。

第V-4層は、北西調査区にのみ分布している。年代比定資料に乏しく出土遺物からの年代推定は難

しいが、第V-4-②層はSA2237の掘り込み面となっており、後述するがSA2237は外郭西門Ⅳ期に伴う柱列壠と考えられ、当該期の整地層であると考えられる。

第V-5層は、南東・北西調査区に広く分布している。器形が逆台形で糸切り無調整の須恵器壺（第32図13）とともにヘラ切り後軽い撫で調整を施す須恵器壺（第32図14・15）、体部下端にケズリ調整を施す赤褐色土器壺B（第32図16）が出土しており（註4）、8世紀第4四半期から9世紀第1四半期と考えられる。

第V-6層は、北西調査区にしか分布していないが、瓦片が多く含んでおり、築地の崩壊瓦層であると考えられる。また、出土する瓦は灰黄色・灰色の軟質の瓦であり（第33図8～10、第34図1～3）、第92次調査で出土した1群瓦と同様な特徴を有しており、創建期に生産され使用された瓦と考えられる（註5）。したがって、第V-6層は創建期築地壠の崩壊瓦層と考えられる。

第V-7層は、北西・北東調査区に分布している。遺物をほとんど含まないことや、第VII層地山粘土層の直上に堆積していることなどから、創建期の整地層であると考えられる。SG2245の埋土となっている第V-7-①～⑤層も、遺物をほとんど含まず、また第VII層地山粘土層由來の黄褐色粘土ブロックが含まれており、同様に創建期の整地層であると考えられる。

以上、年代比定資料および土層堆積状況を総合的に考えると、各古代整地層は第92次調査で検出された外郭西門のI～VI期の変遷との対比が可能であり、第V-1層→外郭西門VI期、第V-2層→外郭西門V期、第V-4層→外郭西門IV期、第V-5層→外郭西門III期、第V-6層→外郭西門II期、第V-7層→外郭西門I期となる。なお、第V-3層は明確な位置づけは不明だが、層位的にはV-4層より上位で第V-3層よりも下位であると考えられる。

表9 各調査区における層の堆積

南東調査区

層序名	備考
I-1	表土
I-2	造成土
II-1	耕作土
II-2	耕作土
III-2	造成土
V-1	古代整地層 SB1988No.9を覆う 古代整地層 炭化物多く混じる
V-2-③	SB1988No.9を覆う
V-3	古代整地層
V-5	古代整地層
VI	地山飛砂層
VII	地山腐植土層
VIII	地山粘土層

北東調査区

層序名	備考
I	表土
II-1	耕作土
V-7	古代整地層

拡張トレンチ1

層序名	備考
I	表土
II-1	耕作土
II-2	耕作土
V	古代整地層

北西調査区

層序名	備考
I-1	表土
II-1	耕作土
II-2	耕作土
III-1	造成土
IV-1	近世耕作土
IV-2	近世耕作土
IV-3	近世耕作土
IV-4	近世耕作土
V-2-①	古代整地層
V-2-②	古代整地層 炭化物混じる
V-4-①	古代整地層
V-4-②	古代整地層 SA2237掘り込み面
V-4-③	古代整地層
V-5-①	古代整地層 SA2236掘り込み面
V-5-②	古代整地層 SA2236掘り込み面
V-6-①	古代整地層 SG2245埋土 瓦が混じる
V-6-②	古代整地層 SG2245埋土 瓦が多く混じる
V-7-①	古代整地層 SG2245埋土 瓦が多く混じる
V-7-②	古代整地層 SG2245埋土
V-7-③	古代整地層 SG2245埋土
V-7-④	古代整地層 SG2245埋土
V-7-⑤	古代整地層 SG2245埋土
VII'	漸移層
VII	地山粘土層

## 2) 各遺構の年代などについて

## ①外郭西門跡と外郭区画施設について

外郭西門跡は、平成20年度の第92次調査地A区で確認されており、全て梁間（東西）2間×桁行（南北）3間の南北棟掘立柱建物跡であり、三間一戸の八脚門形式と推定された（SB1986～1991）。また、SB1991（I期）→SB1990（II期）→SB1989（III期）→SB1988（IV期）→SB1987（V期）→SB1986（VI期）と変遷しており、それぞれは政庁I～VI期の遺構変遷と対応している。外郭西門I期は天平5年（733）秋田出羽柵創建期から8世紀前半、II期は天平宝字年間の「秋田城」改修期にあたる8世紀後半、III期は8世紀末・9世紀初め～9世紀第1四半期、IV期は天長7年（830）大地震復興期にあたる9世紀第2四半期～第3四半期、V期は元慶2年（878）の復興期にあたる9世紀第1四半期～10世紀第1四半期、VI期は10世紀第2四半期～10世紀中葉である（表10）。今回の第102次調査で、第92次調査では調査区外であった外郭西門の柱掘り方を新たに8基確認した。今回確認した柱掘り方は、V期のSB1987 No.4・No.8、IV期のSB1988 No.9・No.10、II期のSB1990 No.8・No.12、I期のSB1991 No.4・No.12である。なお、今回の調査による再検討で、III期のSB1989 No.8の掘り方の範囲を修正し、I期のSB1991 No.11の掘り方を認定している。

今回新たに発見された外郭西門の柱掘り方から、年代比定に関わる資料はほとんど得られず、柱掘り方の配置、検出面から各時期の掘り方であると認定している。V期のSB1987 No.4・No.8柱掘り方は、III期整地層と考えられた第V～5層面の検出である。SB1988 No.9・No.10柱掘り方は、第VI層地山飛砂層面の検出である。SB1990 No.8・No.12は第VII層地山粘土層面の検出である。SB1991 No.4柱掘り

表10 秋田城遺構変遷表

	733	750 760	800	830	850	878	900 915	950
政庁	I期	II期	III期	IV A期	IV B期	V期	VI期	
政庁区画施設	築地塀 材木列塀	築地塀 材木列塀	一本柱列塀	一本柱列塀	一本柱列塀	材木列塀	一本柱列塀	
外郭	I期	II期	III期 (小期あり)		IV期 (小期あり)	V期		
外郭区画施設	瓦葺き築地塀	非瓦葺き築地塀	柱列塀		材木列塀	大溝		
大畠地区	I期	II期	III期 生産施設	IV期 生産施設整備 居住域住戸数増加	V期			
焼山地区	I期	II期	III期 (小期あり) A類建物倉庫	C類建物倉庫群	D類建物？			
鶴ノ木地区	I期	II期	III期	IV期	V期			
外郭西門	I期	II期	III期	IV期	V期	VI期		
時期	天平5年(733)～	8C後半前葉～	8C末・9C初～	9C第2四半期～	9C第3四半期～	元慶2年(878)～	10C第2四半期～10C中葉	
備考	秋田出羽柵創建期	天平宝字年間 「秋田城」改修期	第III期全体 大改修期	天長7年 (830) 大地震後 復興期	元慶の乱 (878)後 復興期	元慶の乱 (878)後 復興期	最終末期	

方はⅠ期整地層である第V-7層面、No.12柱掘り方は第Ⅶ層地山粘土層面の検出である。先に述べた古代整地層の年代と第92次調査の外郭西門の変遷と今回の調査で新たに発見された柱掘り方は、矛盾することなく検出されている。また、SB1987 No.8柱掘り方埋土からは黒色で軟質の丸瓦で創建期の1群瓦が出土し（第12図1）、SB1988 No.9・No.10柱掘り方埋土からは灰黄色・黒色・灰色で硬質の平瓦でⅢ期以降（平安期以降）の3群瓦が出土し（第12図2～4）、上記の外郭西門の年代観といずれも矛盾はない。

また、今回の調査によって、外郭西門に取り付く外郭区画施設が検出された。発見された区画施設は、SA2235材木列堀跡、SA2236柱列堀跡、SA2237柱列堀跡、SF2238築地堀跡、SF2239築地堀跡の5つである。

SA2235材木列堀跡は、布掘り溝と柱痕跡の底面の硬化面しか検出できなかつたが、外郭西門Ⅴ期SB1987の中央桁行柱列北側であるNo.8柱掘り方に取り付く形で検出された。このことから外郭西門Ⅴ期の区画施設と考えられる。なお、SA2235材木列堀跡とSB1987 No.8柱掘り方の切り合い関係は、SA2235が新しく、外郭西門Ⅴ期のSB1987を構築してから材木列堀を配置している。

SA2236柱列堀跡は外郭西門Ⅲ期SB1989の中央桁行柱列北側であるNo.8柱掘り方に取り付く形で検出された。SA2236柱列堀跡は北に5m延び東に屈曲する。北側に延びる時は北で7度東に振れており、外郭西門Ⅲ期のSB1989が北で7度東に振れる方位と一致している。また、SA2236柱列堀跡の確認面は、出土遺物から8世紀第4四半期から9世紀第1四半期に整地されたと考えられる第V-5層であり、外郭西門Ⅲ期の年代観と一致している。なお、SA2236柱列堀跡の布掘り埋土からは、灰色でやや軟質の瓦で経年変化により表面が摩耗した創建期の1群瓦が出土し（第16図1）、築地堀崩壊瓦が埋土に含まれたものと考えられ、年代観に矛盾はない。なお、SA2236柱列堀跡とSB1989 No.8柱掘り方の切り合い関係は、SA2236が新しく、外郭西門Ⅲ期のSB1989を構築してから柱列堀を配置している。また、第92次調査で発見されているSA1992柱列堀跡は、外郭西門Ⅲ期のSB1989の中央桁行柱筋の南側であるNo.5柱掘り方に取り付いており、当該期の区画施設であり、SA2236柱列堀跡と対になるものと考えられる。

SA2237柱列堀跡は近世の土取り穴であるSG2249により削平を受けており、外郭西門との取り付き部分は不明であるが、区画施設の中で最も東に寄って検出されており、また北で9度東に振れている。外郭西門の中で最も東に配置され、また方位が北で9度東に振れる建物は外郭西門Ⅳ期のSB1988であり、SA2237柱列堀跡は、これに取り付く外郭区画施設と推定される。また、SA2237柱列堀跡の遺構検出面は、Ⅲ期整地層である第V-5層の上位である第V-4層検出であり、直接的な年代比定資料は出土していないものの、Ⅲ期整地層の年代である8世紀第4四半期から9世紀第1四半期よりも新しいことは確實であり、外郭西門Ⅳ期の年代観である9世紀第2四半期から第3四半期と矛盾しない。なお、SA2237柱列堀跡の抜き取り埋土からは灰色でやや軟質の瓦で経年変化により表面が摩耗した創建期の1群瓦が出土し（第16図2）、築地堀崩壊瓦が落ち込んだものと考えられ、年代観に矛盾はない。

SF2238築地堀跡は、基底幅が2.1～2.2mである。北側に延びる部分はP1とP2を結ぶラインで計測すると北で35度東に振れ、外郭西門の取り付き部分との関係をみると外郭西門Ⅱ期SB1990の中央桁行柱列北側であるNo.8柱掘り方に取り付くことが推定され、これに取り付く外郭区画施設であると考えられる。SF2238築地堀跡はP1～4の寄柱が確認されているが、P2は二つのピットが重複しており、上部のP2-1がこれに伴うものである。SF2238築地堀跡の検出面はⅡ期整地層であると考えられる崩壊瓦層の第V-6-①層および第Ⅶ層地山粘土層であり、外郭西門Ⅱ期の区画施設として年代観に矛

盾はしない。SF2238築地塙跡は外郭西門Ⅱ期のSB1990 No.8柱掘り方の推定柱位置から、北側に7m延びた後、東に屈曲する。

SF2239築地塙跡は、SF2238築地塙跡に伴うことが確認され、遺存度も少なく詳細は不明であるが、SF2238築地塙跡に伴う寄柱P2の下部にP2-2が検出され、また、その埋土から薄手で丁寧なつくりの須恵器坏が出土した（第15図1）。これは体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリ調整を施す坏で、8世紀第2四半期の資料であり、P2-2はSF2239築地塙跡の寄柱と考えられる。したがって、SF2239築地塙跡は、外郭西門Ⅰ期のSB1991に付属する外郭区画施設であると考えられる。Ⅱ期築地塙SF2238の寄柱P2-1とⅠ期築地塙SF2239の寄柱P2-2が同位置で重複していることから、築地塙の北西コーナー屈曲部はⅠ期・Ⅱ期ともに同位置であったと考えられる。

以上、今回発見された外郭区画施設と外郭西門との対応関係を考えると、外郭西門Ⅴ期SB1987にはSA2235材木列塙跡、外郭西門Ⅳ期SB1988にはSA2237柱列塙跡、外郭西門Ⅲ期SB1987にはSA2236柱列塙跡、外郭西門Ⅱ期SB1990にはSF2238築地塙跡、外郭西門Ⅰ期SB1991にはSF2239築地塙跡となる。

## ②その他の遺構について

SD2240・SD2241溝跡は、南東調査区で第VI層地山飛砂層面で東西方向に延びることが確認された。年代比定資料は得られず時期は不明であるが、道路側溝となる可能性がある。SD2240溝跡は東で10度南に振れ、SD2241溝跡は東で12度南に振れる。道路側溝が外郭西門の配置に規定されるとすれば、これら溝跡の方位だけを考えれば、SD2240溝跡は北で9度東に振れる外郭西門Ⅳ期SB1988に、SD2241溝跡は北で13度東に振れる外郭西門Ⅱ期のSB1990に近い振れ方をしている。しかし、これらを南側道路側溝とすれば、北側道路側溝が存在していたと考えられるが、SG2249の近世土取り穴によって失われており、外郭西門との対応関係は正確に言及することはできない。今後、第102次調査区の東側を調査し、外郭西門からの城内西道路の検出が大きな課題であると言える。

SE2244井戸跡は北東調査区の外郭西門Ⅰ期に伴う整地層の第V-7層面で検出された。出土遺物は、弥生土器も含まれるが、埋土から灰黄色で硬質の瓦が出土している（第20図1）。この瓦は3群瓦に該当し、外郭西門Ⅲ期以降のものと考えられる。位置的に外郭西門Ⅰ・Ⅱ期のSF2238・SF2239築地塙跡の延長線上と重複し、また外郭西門Ⅲ期のSA2236柱列塙跡が屈曲後そのまま真東に延長するとすれば、これとも重複する。したがって、SE2244井戸跡の所属年代は、外郭西門Ⅳ期以降と考えておきたい。

調査区の北側にSG2245～2247土取り穴が展開する。SG2245土取り穴は調査区の北西側に展開し、外郭西門Ⅰ期のSF2239築地塙構築のための粘土採取を行ったと考えられる。サブトレチ内で確認した埋土は東側に外郭西門Ⅰ期に伴う整地層第V-7-①～⑤層が厚く堆積しており、築地塙構築後すぐに埋め立てられている状況が確認できる。また、外郭西門Ⅱ期に伴う整地層である崩壊瓦層V-6-①・②層も堆積しており、おおむね外郭西門Ⅱ期までにおおよそ埋め立てられている。しかし、SG2245土取り穴の東側では、第V-2-①・②層の堆積が確認され、第V-2-②層の堆積年代は出土遺物から10世紀第1四半期と考えられ、外郭西門Ⅴ期の時期と考えられた。したがってSG2245土取り穴の東側は、外郭西門Ⅴ期以降に埋め立てられていると考えられる。このようにSG2245土取り穴の埋め立て時期には東西で時期差があり、これは外郭西門Ⅴ期SB1987とⅥ期SB1986の配置がより西側に寄っていることと対応していると考えられる。すなわち外郭西門Ⅴ期以降の門の配置に伴い、SG2245土取り穴の東側が埋め立てられたと考えられる。

SG2246土取り穴は、SG2245土取り穴と同様に外郭西門Ⅰ期のSF2239築地塀構築のための粘土採取と考えられるが、埋土から年代比定となる資料がなく埋め立て時期については不明である。またSG2247土取り穴の埋土からは、3群瓦の有段丸瓦が出土しており、外郭西門Ⅲ期以降のものと考えられる。したがって、埋め立て時期はⅢ期以降であり、外郭西門Ⅱ期まで開口していたと考えられ、SG2247土取り穴は外郭西門Ⅱ期のSF2239築地塀の積み直し、またはⅢ期整地層のための粘土採取の可能性がある。

拡張トレント1で確認されたSG2248土取り穴は、位置的にはSF2238・SF2239築地塀跡の延長線上の近くまで展開している。出土遺物がなく埋土も第Ⅶ層地山粘土層由来の黄褐色粘土ブロックが混じるため、外郭西門Ⅰ期のSF2239築地塀構築後にすぐに埋め立てられたものと考えられる。

SK2251～2264土坑が発見されている。SK2260から9世紀代と考えられる赤褐色土器が出土しているが、外郭西門からの城内大路にあたる場所であるため、時期は不明である。SK2261も出土遺物はなく、SK2260と同様な特徴を示す。SK2264は9世紀以降と考えられる非ロクロ成形の土師器壺の底部破片が出土しており、また外郭西門Ⅳ期SB1988 No.9柱掘り方より新しいことから、Ⅳ期以降のものと考えられる。その他の土坑からは、出土遺物がなく、遺構の切り合い関係および検出面から推定せざるを得ない。遺構の切り合い関係がある土坑について言えば、SK2256は外郭西門Ⅴ期の柱掘り方よりも古く、SK2252とSK2257はそれよりも新しい。SK2253は外郭西門Ⅵ期柱掘り方よりも新しい。SK2258は外郭西門Ⅴ期に付属するSA2235よりも新しい。SK2262はSD2241よりも新しく、SD2240の延長線上と重複するSK2263もこれより新しいと推定される。遺構の切り合い関係がないものに関しては検出面の年代から推定せざるを得ないが、SK2251とSK2259は外郭西門Ⅲ期整地層である第V-5層面検出、SK2254とSK2255は外郭西門Ⅳ期整地層である第V-2層面検出であり、それぞれ各時期の整地層以後のものと考えられる。

### ③近世以降の遺構について

検出層位および出土遺物から近世以降の所産と判断した遺構の代表的なものについて述べる。

SB2234は近世以降の堆積である第II-2層から検出されており、畝状遺構と平行した建物方位を示すことから、畝を管理するための作業小屋のような性格と考えられる。

SD2242は調査区北側から拡張トレント1・2まで延長する溝で、今のところ出土遺物としては、产地不明の陶器碗（第27図3）が年代の下限を示すものと考えられ近世遺構と考えた。しかし、飛鏢と考えられる鏃（第27図5）の出土や周辺の焼山地区は中世後期の利用もあるため、若干時期がさかのぼる可能性を含んでいる。今後の調査で性格を追求していく必要がある。

SD2243からは、西洋コバルトを用いた磁器の破片が出土したため、近代以降のものと考えらる。

SG2249は、検出面が第II-2層であり、また18世紀代の肥前Ⅳ期に比定される磁器（第29図12・13）が出土し、近世の土取り穴と考えられる。城内には同様な近世の土取り穴が確認されており、近世における粘土採掘と考えられる。SG2249は、古代の遺構を大きく削平している状況がみられ、外郭西門が展開するエリアに及ぶと地山粘土層が失われていたため採掘をやめたと考えられる。拡張トレント1で確認されたSG2250は、出土遺物はないが、古代築地塀であるSF2238とSF2239の延長線上に位置し、またSG2249近世土取り穴と埋土が類似するため、同様に近世土取り穴であると考えられる。

表11 第102次調査遺構変遷表

(政府時期区分)	古代						近世
	I期	II期	III期	IV期	V期	VI期	
(層序)	VII~VI	V~7	V~6	V~5	V~4	V~2	V~1
(外郭西門)	SB1991→SB1990→SB1989→SB1988→SB1987→SB1986 (No. 4・12) (No. 8・12)			(No. 9・10) (No. 4・8)			IV~II
				SK2264 SK2256 SK2252 SK2253			SB2234
					SK2257		SD2242
							SD2243
(区画施設)	SF2239→SF2238→SA2236→SA2237→SA2235						SG2249
						SK2258	SG2250
(溝跡)	SD2240						
	SD2241						
		SK2262					
(土取り穴)	SG2245	-----					
		東側					西側
	SG2246	-----					
	SG2247	-----					
	SG2248	-----					
(その他)			SE2241	-----			
			SK2251	-----			
			SK2259	-----			
				SK2254	-----		
				SK2255	-----		
	SK2260	-----					
	SK2261	-----					
	SK2263	-----					

## 3) 第102次調査区全体の利用状況の変遷について

以上の年代の検討を踏まえ、全体の利用状況と変遷についてまとめると、表11のようになる。

調査地からは、はっきりとした遺構は確認できないが、古代整地層および遺構内から、縄文時代後期（第32図17）、弥生時代前期から中期（第19図1～3、第29図9～11、第31図9・10）の土器片が出土することから、当該期の生活域が存在していたと考えられる。その後、古代の外郭西門が造営されるにあたり大規模な土地造成がなされ、これらの先史時代の遺構は削平されてしまったものと考えられる。

古代には、秋田城外郭西門（SB1986～1991）が造営され、それに伴う外郭区画施設（SA2235～2237、SF2238・SF2239）が作られる。外郭西門と各外郭区画施設の対応関係と変遷は先に述べたとおりである。また、外郭区画施設のSF2238・SF2239築地塀の構築の際の粘土探掘であると考えられ

るSG2245～2248土取り穴が展開する。土取り穴は多くは外郭西門Ⅰ期の時にある程度埋められてしまうが、SG2247は外郭西門Ⅲ期の時に、SG2245の西側は外郭西門V期以降の時期に埋めきられていない部分が最終的に埋め立てられる。特にSG2245の西側が埋め立てられるのは、外郭西門V期SB1987とⅥ期SB1986がこれまでよりも西側に配置されることと密接に関係していると考えられる。城内大路については、SD2240・SD2241溝跡が道路側溝の可能性が残るが、詳細は不明である。SE2244井戸跡、SK2251～2264の土坑が古代に展開する。また、外郭西門の立て替えごとに整地事業がなされており、それらの整地層が調査区内から確認されている（第V-1～7層）。これらの整地層のうち、調査区内で広く確認されるのは、外郭西門Ⅰ期に伴う第V-7層、外郭西門Ⅲ期に伴う第V-5層である。この時期に大規模に整地事業を行ったと考えられる。また、外郭西門V期に伴う第V-2層もこれらに次いで広くみられる整地層であり、炭化物片も若干混じる。この炭化物は、元慶の乱によって生じた火災に由来するものと考えられるが、その他の城内で検出される元慶の乱に伴う炭化物層と比べ炭化物が含まれる量が少ないと考えられる。また、元慶の乱勃発時に存在していたと考えられる外郭西門Ⅳ期の柱掘り方からは炭化物片が混じらないことから考えて、外郭西門は元慶の乱によって焼失したとは考えにくく、これまでの見解のとおり調査地周辺の焼山地区は元慶の乱において被害が少なかったエリアであると判断できる。

秋田城廃絶後は、近世にSG2249・SG2250のような粘土採掘のための土取りがなされている。特にSG2249土取り穴により、古代遺構が大きく削平された。SG2249土取り穴は、出土資料の年代から18世紀以降のものと考えられる。また近世以降の遺構として、SD2242・SD2243溝跡、SB2234掘立柱建物跡が展開する。このうち、SD2242は調査区外の東方向に延び、今後、機能や詳細な時期について検討が必要である。

#### 4) 外郭西門と外郭区画施設について

##### ①外郭西門について

外郭西門については、第92次調査の考察において詳述されており（註7）、今回の調査においても所見に大きな変化はない。すでに述べたように梁間（東西）2間×桁行（南北）3間の南北棟掘立柱建物で、八脚門形態を基本とし、桁行中央の柱間が南北両側の一間よりもやや広いことから、棟通りに三間一戸の扉を有する構造と考えられ、南北棟の建物門に対し、東西方向に道路が通る構造と判断される。

ここでは外郭西門を第101次調査で発見された外郭南門、第54次調査で発見された外郭東門と比較をしたい（表12）。

建物規模についていえば、外郭西門は全期を通じて東門よりも大規模で、Ⅰ期の創建期から梁間が6mを越え、桁行中央に扉を有する構造と考えられる。外郭西門で最も小さいものはⅣ期のSB1988で、最も大きいものはⅢ期である。梁間×桁行の指数を見ると、特にⅢ期の外郭西門は、創建期の外郭南門よりも大きく、同時期の外郭東門よりも2倍程度大きい。8世紀末から9世紀初めの秋田城の大改修の時期に相当する政府Ⅲ期に外郭西門の役割が特に大きくなったとみることができる。

外郭西門の梁間／桁行の比率をみるとⅠ期は0.556、Ⅱ期は0.635で梁間に対し桁行が相対的に長く細長い形態をしているのに対し、Ⅲ期以降は0.76～0.947となり、桁行に対し梁間が相対的に長く、建物横幅が広い形態をとる。外郭南門と東門の梁間／桁行の比率は、外郭南門（政府Ⅰ期）が0.537、外郭東門（政府Ⅲ～V期）が0.643であり、外郭西門のⅠ・Ⅱ期はこれらに類似しているが、外郭西門Ⅲ期以降は明

表12 外郭西門・南門・東門の比較

## 外郭西門

遺構No.	時期	規模	柱間間隔	梁間／桁行	梁間×桁行
SB1991	政庁Ⅰ期	梁間（東西）2間 桁行（南北）3間	6.0m 西から3.0m+3.0m 10.8m 北から3.6m+3.6m+3.6m	0.556	64.80m <sup>2</sup>
SB1990	政庁Ⅱ期	梁間（東西）2間 桁行（南北）3間	6.7m 西から3.4m+3.3m 10.55m 北から3.5m+3.5m+3.5m	0.635	70.69m <sup>2</sup>
SB1989	政庁Ⅲ期	梁間（東西）2間 桁行（南北）3間	8.4m 西から4.2m+4.2m 11.05m 北から4.4m+4.25m+3.4m	0.760	92.82m <sup>2</sup>
SB1988	政庁Ⅳ期	梁間（東西）2間 桁行（南北）3間	6.6m 西から2.7m+3.4m 8.4m 北から2.7m+3.0m+2.7m	0.786	55.44m <sup>2</sup>
SB1987	政庁Ⅴ期	梁間（東西）2間 桁行（南北）3間	7.8m 西から3.9m+3.9m 9.6m 北から3.0m+3.3m+3.3m	0.813	74.88m <sup>2</sup>
SB1986	政庁Ⅵ期	梁間（東西）2間 桁行（南北）3間	8.95m 西から4.5m+4.45m 9.45m 北から2.9m+3.55m+3.0m	0.947	84.58m <sup>2</sup>

## 外郭南門

遺構No.	時期	規模	柱間間隔	梁間／桁行	梁間×桁行
SB2216	政庁Ⅰ期 (外郭Ⅰ期)	梁間（南北）2間 桁行（東西）2間	6.6m 北から3.3m+3.3m 12.3m 西から3.9m+4.5m+3.9m	0.537	81.18m <sup>2</sup>
SB2217	政庁Ⅱ期 (外郭Ⅱ期)	梁間（南北）2間 桁行（東西）2間	— —	—	—
SB2218	政庁Ⅲ期 (外郭Ⅲ期)	梁間（南北）2間 桁行（東西）2間	— —	—	—
SB2219	政庁Ⅳ期	梁間（南北）2間 桁行（東西）2間	— —	—	—
SB2220	政庁ⅣB期以降 (9世紀第3四半期以降)	梁間（南北）2間 桁行（東西）2間	— —	—	—

## 外郭東門

遺構No.	時期	規模	柱間間隔	梁間／桁行	梁間×桁行
SB998 B	政庁Ⅲ～Ⅳ期 (外郭Ⅲ期)	梁間（東西）2間 桁行（南北）3間	5.4m 2.7m+2.7m 8.4m 2.7m+3.0m+2.7m	0.643	45.36m <sup>2</sup>
SB998 A	政庁Ⅴ期 (外郭Ⅳ期)	梁間（東西）2間 桁行（南北）3間	5.4m 2.7m+2.7m 8.4m 2.7m+3.0m+2.7m	0.643	45.36m <sup>2</sup>

らかにこれらと異なっている。このように桁行に対し梁間が相対的に長い外郭西門Ⅲ期以降は、重層門になる可能性が高いことを改めて指摘でき、Ⅲ期以降の外郭西門がいかに外郭施設の門として特異であったかがうかがわれる。

また、外郭南門および外郭東門が同位置で同規模の建て替えが行われているのに対し、外郭西門は建物位置が各時期により配置が異なり規模も変わる。外郭南門および東門は建物が配置される規格性があるのに対し、外郭西門は規格性が乏しい。

以上のように、外郭西門を外郭南門・東門と比較すると、外郭西門の特異性が改めて認識できる。第92次調査の報告において既に指摘されているが、その規模とともに外郭西門は実用的機能を重視した門と考えられ、政庁西側の焼山地区の大規模な倉庫群の展開と密接に関連しているものと考えられる。

## ②外郭区画施設について

外郭西門に取り付く外郭区画施設として、外郭西門Ⅰ期・Ⅱ期の築地塀跡、Ⅲ・Ⅳ期の柱列塀跡、Ⅴ期の材木列塀跡を確認することができた。外郭西門の中央桁行柱筋北側の推定柱位置からⅠ期・Ⅱ期の築地塀とⅢ期の柱列塀は5～7m北に延びると東に屈曲することが判明し、これまでの調査で予想されていたように、地形に合わせた形で、外郭区画施設が構築されているということが明らかとなった。また、門および区画施設の景観という視点でみた場合、正面からの外観、西側区画施設の対称性に欠け、莊嚴性や視覚効果が重視されていなかったと考えられる。特に、外郭西門Ⅲ期に取り付くSA2236柱



第44図 外郭西辺遺構図（第19次・第52次調査）

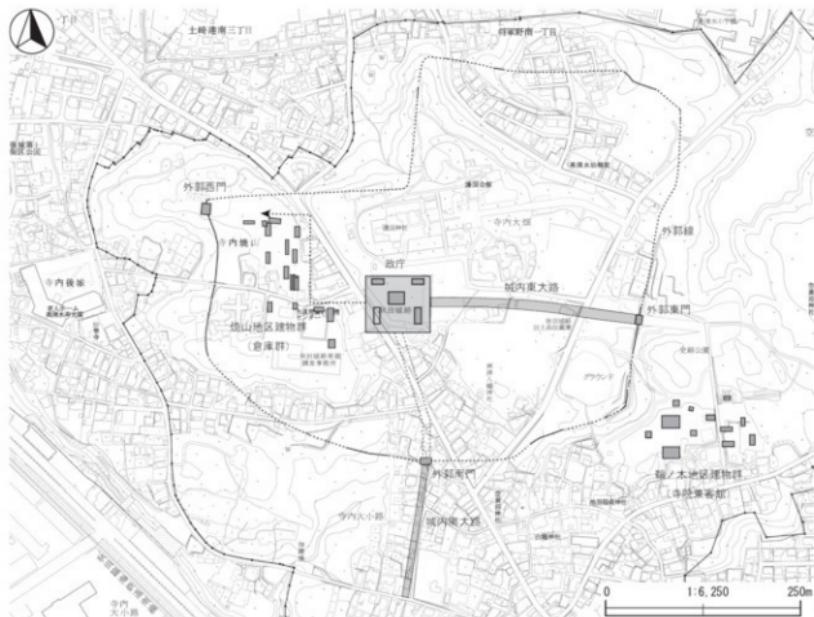
列塙跡は外郭西門Ⅱ期のSF2238築地塙跡に接すると布掘り溝が検出されなくなることから、Ⅱ期築地塙の上部を駆け上っていたものと考えられる。このような状況は第19次調査のSD292、第52次調査のSA974の柱列塙跡と同様であり、これらは築地塙跡の上に布掘りが掘り込まれ柱列塙が構築されている状況が検出されている（第44図、註7）。第19次調査のSD292の延長は、第92次調査で検出されているSA1992に繋がり、外郭西門Ⅲ期SB1989の外郭区画施設であると考えられ、今回発見したSA2236と対になるものである。

このように、外郭西門Ⅲ期において築地塙跡の上に構築される柱列塙の意味をあえて考察するとすれば、外郭西門Ⅲ期の時期に区画施設自体が築地塙から柱列塙となり、実用的な形態へ変化するとともに、城門付近ではあるが外観よりも実用的機能を重視していたと考えられる。また、先に述べたように外郭西門が全期を通じて大規模な門であり、Ⅲ期からは門が特に大きくなり、重層門となる可能性と併せて考慮すると、実用性を重視した門であるとともに、海側からみえるランドマークとしての機能を果たしていたと考えられる。

## 5) 第102次調査の成果と課題について

第102次調査の結果により、以下の3点について成果と課題があった。

- ①外郭西門のV期（SB1987）・IV期（SB1988）・II期（SB1990）・I期（SB1991）の未発見であった柱掘り方を各2基ずつ発見し、外郭西門のより正確な規模が判明した。
- ②外郭西門に付属する北側外郭区画施設について、外郭西門V期（SB1987）のSA2235材木列堀跡、外郭西門IV期（SB1988）のSA2237柱列堀跡、外郭西門III期（SB1989）のSA2236柱列堀跡、外郭西門II期（SB1990）のSF2238築地堀跡、外郭西門I期（SB1991）のSF2239築地堀跡を発見した。また、このうち外郭西門III期のSA2236柱列堀跡とII期のSF2238築地堀跡、I期のSF2239築地堀跡は、外郭西門から5～7m北に延びた後に東に屈曲することが判明し、秋田城の基本構造に関わる重要な知見を得た（第45図）。
- ③外郭西門から政府方向に向かう城内西大路については、SG2249近世土取り穴により大部分が削平を受けており、はつきりと確認できなかった。ただし、道路側溝の可能性のあるSD2240・SD2241溝跡を検出しておらず、今後これらの延長が城内大路の道路側溝となるかどうか確認していく必要がある。



第45図 秋田城基本構造関係位置図

## 2. 第103次調査について

第103次調査地は焼山地区北西部、政府の北西約300mの城外北西部にあたる地点である。第92次調査地B区において、中世の土塁区画施設と小規模な城門跡が確認され、城館・砦としての利用および織豊期の安東氏湊合戦における「寺内砦」との関連性が考えられており、焼山地区北西部の中世における利用実態を把握するために調査を実施した。

調査の結果、土塁跡2基、材木塀跡1条、土坑墓4基の他、近世以降の溝跡、歎跡が検出された。

これらの遺構については、出土遺物や検出層位、重複関係などから、年代や新旧関係の把握が可能である。遺物包含層や検出遺構の年代について検討を行った上で、全体の利用状況と変遷について以下にまとめる。

### 1) 各遺物包含層の年代について

各層出土の年代比定資料を見していくと、第II-1層からは、18世紀代の肥前IV期の肥前系磁器染付碗（第42図11）、青磁碗（第42図12）が出土しており、江戸時代中期以降の耕作土であると考えられる。また、第II-3層からも疎地不明であるが、江戸時代の染付碗（第42図14）が出土し、同様に江戸時代の畠地のための造成土であると考えられた。なお、第I層から珠洲系中世陶器IV期の鉢鉢（第42図7）、第II-1層から珠洲系中世陶器IV期の壺R種（第42図9）と越前産陶器壺（第42図10）、第III-1層から時期は特定できないが、珠洲系中世陶器壺（第42図13）が出土しており、14世紀代の遺物と考えられ（註8）、調査地周辺の中世における利用が示唆される。

第III-1～5層は、地形の基盤をなす地山飛砂層・旧表土・地山粘土層であるが、第III-1層地山飛砂層（上層）で後述する中世後期の土塁・土壤墓が検出されており、当該期の遺構面であると考えられる。第III-2層、第III-3-①～③層は、第III-1層の飛砂層が堆積する以前の旧表土であるが、第III-3-②層からは縄文時代の石錨が出土しており（第42図15）、これらの旧表土は縄文時代の生活面であったと考えられる。これら旧表土の下層に第III-4層地山飛砂層（下層）がみられ、縄文時代以前の飛砂層の堆積が認められる。そして最下層の第III-5層地山粘土層が堆積している。

以上年代をまとめると、第III-4層地山飛砂層（下層）は縄文時代以前に堆積した地山飛砂層、第III-2～3層は縄文時代の旧表土面、第III-1層地山飛砂層（上層）は縄文時代以降から中世にかけての地山飛砂層、第II層は近世以降の造成土・耕作土である。

### 2) 各遺構の年代などについて

A区からSX2265土塁跡・SA2266材木塀跡・ST2267・ST2268土壤墓、B区からST2269・ST2270土壤墓、C区からSX2271土塁跡が第III-1層地山飛砂層（上層）で検出された。

A区のST2267・ST2268土壤墓は、SX2265・SA2266の下位から検出された。ST2267土壤墓埋土からは、「洪武通寶」が出土している（第42図2）。これは錢文が不鮮明であり本邦の模鋳錢であると考えられ、16世紀後半に流通するとされている（註9）。このことから、ST2267土壤墓は16世紀後半と考えられる。また、隣接するST2268土壤墓も出土資料はないものの、ST2267土壤墓と埋土や遺構確認面が同じであるため、同時期のものと推定される。またB区のST2269土壤墓上面から、「永樂通寶」が出土しており（第42図4）、錢文が鮮明であり本錢である可能性が高いが、先と同様に16世紀後半に流通するものである。このことからB区のST2269土壤墓も16世紀後半のものと考えられる。隣接するST2270上

墳墓もST2269土壙墓と形状・埋土・遺構確認面が同様であることから、同時期のものと判断される。

16世紀後半のST2267土壙墓の直上に構築されたSX2265土壙跡は、16世紀後半以降と考えられる。SX2265土壙跡の特徴は、①土壙北側端に直径2～3cmの礫を葺いていること、②土壙上部に木材塀跡が確認される、等の特徴から、第92次調査地B区で発見されたSX2003・SX2004土壙跡と同様の特徴を有している（註10）。第92次調査地B区のSX2003土壙跡では土壙盛土直上から14世紀代の珠洲系中世陶器Ⅳ期の擂鉢・SX2004土壙跡の盛土中から珠洲系陶器の壺の破片とともに、16世紀代の瀬戸・美濃系陶器の灰釉壺反皿、「元豊通寶」・「祥符元寶」の模鋳鏡が出土しており、16世紀後半の年代であると考えられる。したがって、今回の調査で発見されたSX2265土壙跡は、ST2267土壙墓の年代である16世紀後半の直後に構築されたと考えられる。

C区で検出されたSX2271土壙跡も、北側端部に直径2～3cmの礫がまばらに敷かれている状況が確認され、A区のSX2265土壙墓と同時期のものと考えて差し支えないと考えられる。なお、C区のSX2271土壙跡は、上部に木材塀跡は確認されなかったが、土層堆積の状況から、上部は削平されている可能性が高い。

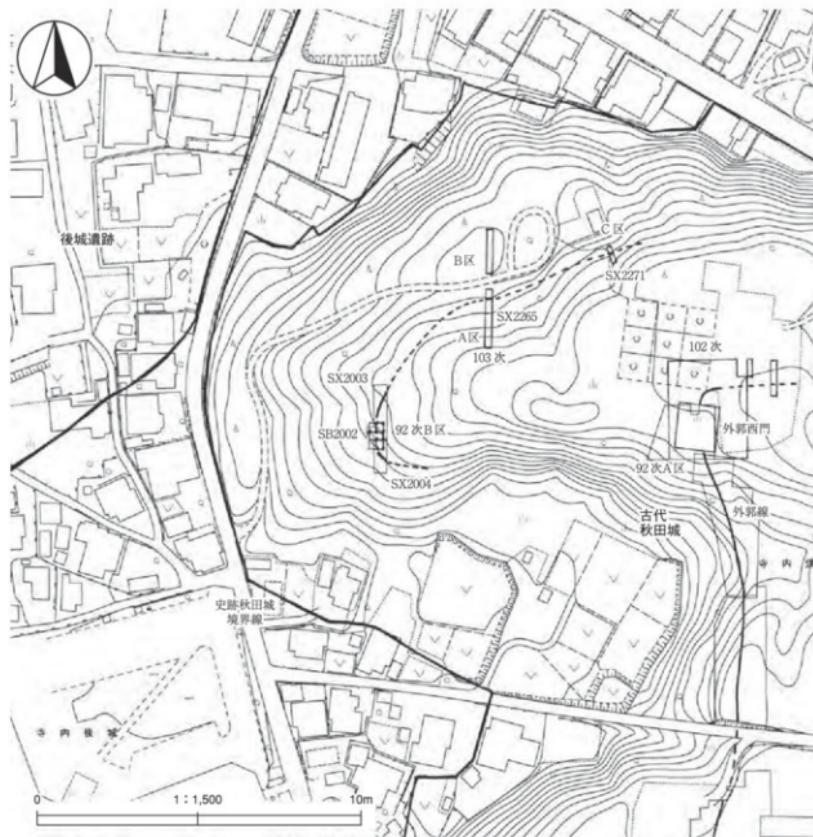
### 3) 第103次調査区全体の利用状況の変遷について

以上の年代の検討を踏まえ、全体の利用状況と変遷についてまとめると、表13のようになる。

まず調査地には、第Ⅲ～3層面において旧表土が確認され、出土遺物から縄文時代頃のものと考えられた。石耕が出土しており、周辺は急斜面であるため、狩猟等の場であったと考えられる。その後、第Ⅲ～1層の飛砂層が厚く堆積し、16世紀後半にST2267～2270の土壙墓が形成され、調査地一帯は墓地であったと考えられる。ST2267～2270土壙墓が構築された16世紀後半の直後にSX2265・SX2271土壙跡・SA2266木材塀跡が造営される。なお、第Ⅰ～Ⅱ層において、14世紀代の珠洲系中世陶器が出土することから、調査地周辺、特に調査地の南側の平坦面には14世紀代の利用があったことが推察される。

表13 第103次調査遺構変遷表

(層序)	縄文				中世	近世
	Ⅲ-5 飛砂下層	Ⅲ-4 旧表土	Ⅲ-3 旧表土	Ⅲ-2 旧表土		
A区					SX2265・SA2266	
					ST2267	
					ST2268	
B区					ST2269	
					ST2270	
C区					SX2271	



第46図 秋田城跡焼山地区北西部中世遺構位置図

#### 4) 秋田城跡焼山地区北西部における中世遺構について

第103次調査によって、SX2265・SX2271土壙を発見した。これは特徴および推定される年代から、第92次調査地B区で発見されたSX2003土壙跡の延長であると考えられる。第92次調査地B区では、16世紀後半の八脚門と考えられる東西2間、南北3間の南北棟のSB2002掘立柱建物跡に、北側のSX2003土壙跡、南側のSX2004土壙跡が取り付くことが判明している。今回の調査は、この八脚門SB2002を取り付く北側土壙が103次調査地まで延長することが確認された(第46図)。今回の調査結果から北側に限って言えば、土壙は1重であり、上部に材木塀がめぐると考えられる。また、今回発見されたSX2265の南側部分は、第III-1層地山飛砂層の堆積がみられない部分があり、空堀状に窪んでいたと考えられ、また地形の起伏も利用しつつ平坦面と土壙の比高差を強調している。

外郭西門跡の西側の尾根状の平坦地には、このような砦状の構造物が16世紀後半段階に構築されていることが明確になったと言え、その歴史的位置づけを行うとすれば、中世後期に秋田平野を支配した漆安東氏による「寺内砦」と考えられる（註11）。『秋田家文書』の「漆檜山両家合戦覚書」に記されるように、能代に拠点を置く檜山安東氏と秋田平野に拠点を置く漆安東氏の両家が争った「漆合戦」が天正17年（1589）に起こる。漆合戦の経過については、「奥羽永慶軍記」に詳細が記されているが、合戦終盤において漆安東側が檜山安東側に攻め込まれ、漆安東側は「寺内砦」に詰め一矢報いたとされる「寺内合戦」の記述がある。第92次調査および第103次調査で発見された八脚門と土塁跡が構築された16世紀後半の年代は、まさにこの漆合戦の頃の年代と一致している。また、秋田城跡焼山地区北西部の西側隣接地には後城遺跡があり、14世紀代～16世紀末までの遺物が出土し、土壙墓・居住域が発見されている。後城遺跡の遺構・遺物の内容は、漆安東氏が秋田平野を支配していた年代と一致し、中世安東氏関連遺跡として評価されている（註12）。このような遺跡と隣接する秋田城跡焼山地区北西部で発見された遺構の内容および年代を考慮すると、まさにこの地が「寺内砦」となる可能性が非常に高いと考えられる。また、第92次調査や第103次調査で発見された土壙墓群は、後城跡A地区でも発見されており、城館・砦として利用される以前は、一帯が墓域であったと考えられる。なお、第92次調査や第103次調査において、14世紀代と考えられる珠洲系中世陶器IV期の遺物が散見されることから、城門のある第92次調査地B区東側、第103次調査地南側の尾根状の平坦面には、14世紀代にさかのぼる居住域がある可能性も高い。今後は、このような尾根状の平坦面での中世遺構の確認を行い、当該地がいつ頃からどのように利用されているかを把握する必要がある。そして、今回発見されたSX2271北側土壙がどこまで延長するか、また第92次調査で発見されたSX2004南側土壙の延長部分を確認し、中世における焼山北西部の利用範囲がどこまでかを把握していく必要がある。

以上のように、秋田城跡焼山地区北西部は中世安東氏が築いた文献史料にみられる「寺内砦」に比定できる可能性が高く、中世後期においても利用されていると考えられた。このように、古代秋田城外郭西門の西側地点が、海上交通を得意とした安東氏も利用していたということは、外郭西門の役割や古代秋田城の立地と海上交通との関連性を理解する上で、非常に興味深い点である。

## 5) 第103次調査の成果と課題について

第103次調査の結果により、以下の3点について成果と課題があった。

- ①第92次調査地B区における16世紀後半のSX2003北側土壙の延長として、SX2265・SX2271を発見した。
- ②第92次調査地B区の調査結果と同様に、秋田城焼山地区北西部の一帯が少なくとも16世紀後半に「砦」のような機能をもつ場所として利用され、文献資料にみられる中世安東氏の「漆合戦」時ににおける「寺内砦」に比定される可能性が非常に高い。
- ③今後、秋田城跡焼山地区北西部における尾根状に延びる丘陵部平坦面での利用実態や、北側土壙、南側土壙の範囲を把握していく必要がある。

註1 九州陶磁学会 2000『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』

これ以降の考察における肥前系陶磁器の年代比定は上記に基づく。

註2 格子目瓦の年代は、佐川正敏氏の見解（佐川1999）および秋田市長岡遺跡（秋田市教育委員会2002）の出土例から、8世紀第4四半期～9世紀第2四半期と考えている。

- 佐川正敏 1999「古代出羽国秋田城の積み上げ技法成形台一本造り軒丸瓦の研究」『東北学院大学 東北文化研究所紀要』31
- 秋田市教育委員会 2002『長岡遺跡一下新城西部地区県営担い手育成基盤整備事業に伴う緊急発掘調査報告書』
- 註3 これ以降の考察における出土土器の年代比定は、以下一連の秋田城跡出土土器編年成果に基づく。
- 小松正夫 1992「秋田城とその周辺地域の土器様相（試案）－第54次調査の木簡・漆紙文書伴出土器を中心にして－」『第18回古代城柵官衙遺跡検討会資料』pp.139-144
- 伊藤武士 1997「出羽における10・11世紀の土器様相」「北陸古代土器研究」7 pp.32-44
- 小松正夫・日野 久・西谷 隆・伊藤武士 1997「秋田城跡出土土器と周辺窯の須恵器編年（試案）」「日本考古学協会 1997年度秋田大会報告・律令国家・日本海一シンポジウムⅡ・資料集一』pp.18-30
- 秋田市 2001「第7章 秋田城跡の発掘調査 九 秋田城跡出土の土器編年」「秋田市史 第7巻 古代 史料編」pp.383-390
- 秋田市教育委員会 2007「秋田城跡の土器編年」「秋田城跡II一郷ノ木地区一」pp.340-345
- また、以下の文章中の「底径比」は底径に対する口径の比率、底径指数を示すものである。
- 註4 赤褐色土器の呼称を坏A・Bの分類については、酸化炎焼成、非内墨、ロクロからの切り離しが回転、静止糸切りのものを赤褐色土器とし、坏類の底部から体部下端及び下間にかけてケズリ調整を施すものを坏B、無調整のものを坏Aとしている。
- 参考：神田和彦 2010「ケズリのある赤い坏—古代秋田郡域の赤褐色土器坏B—」「北方世界の考古学」すいれん舎 pp.187-210
- 註5 秋田城出土瓦については秋田市教育委員会2009の分類に基づき、表14のとおり1～4群に分けられている。
- 秋田市教育委員会 2009「秋田城跡 秋田城跡調査事務所年報2008」

表14 秋田城出土瓦の分類

分類	細分	色調	構成	質	備考	時期区分	年代
1群	1-1群	灰白色	良好・やや不良	軟質	・丸瓦は無段タイプのみ	政庁Ⅰ期 (外郭Ⅰ期)	8世紀 第2四半期
	1-2群	灰色			・砂粒が多い		
	1-3群	黒色（いぶし焼成）			・平瓦では特に凸面に砂粒が目立つ ・補修瓦か		
2群	青灰・灰・暗灰色	良好・堅歓	硬質		・丸瓦は有段タイプ ・平瓦は板状工具で撫で調整	政庁Ⅱ期 (外郭Ⅱ期)	8世紀後半
3群	3-1群	暗灰～灰色	良好・堅歓	硬質	・丸瓦は有段タイプ ・平瓦は板状工具で撫で調整 ・成形時に粘土板を重ねた痕跡 ・古城廻窯産か	政庁Ⅲ期以降 (外郭Ⅲ期以降)	8世紀末・ 9世紀初以降
	3-2群	灰・灰黄・黄灰色					
4群	4-1群	橙色系を主体	やや不良	軟質	・丸瓦は有段タイプ	政庁Ⅲ期以降 (外郭Ⅲ期以降)	8世紀末・ 9世紀初以降
	4-2群	灰・灰黄・黄灰色					

\*秋田市教育委員会2009「IV 考察 ⑤外郭西門跡および周辺出土の瓦について」をもとに作成

- 註6 秋田市教育委員会 2009「秋田城跡 秋田城跡調査事務所年報2008」
- 註7 秋田市教育委員会 1977「秋田城跡 昭和51年度秋田城跡発掘調査概報」
- 秋田市教育委員会 1989「秋田城跡 昭和63年度秋田城跡発掘調査概報」
- 註8 吉岡康暢 1994「中世須恵器の研究」吉岡弘文館
- これ以降の考察における珠洲系中世陶器の年代比定は上記に基づく。
- 註9 永井久美男 2001「模鋳鏡の全国的様相」「中世の出土模鋳鏡」高志書院 pp. 5～46
- 註10 秋田市教育委員会 2009 前掲
- 註11 秋田市教育委員会 2009 前掲
- 神田和彦 2012「安東氏と秋田湊—考古学調査の成果から—」「歴史」119 pp.59-85
- 註12 秋田市教育委員会 1978「後城跡発掘調査報告書」
- 伊藤武士 2003「秋田市後城跡—中世の湊町一」「中世出羽の諸様相—寺院・生産・城館・集落—」東北中世考古学会第9回大会（秋田大会）資料集 pp.99-108
- 伊藤武士 2005「秋田湊と湊安東氏の城館」「海と城の中世」東北中世考古学叢書4 高志書院 pp.109-128
- 神田和彦 2012 前掲

## V 秋田城跡環境整備事業

### 平成25年度の整備

今年度は、これまで整備を進めてきた外郭東門地区や政府地区、水洗廁舎を復元した鶴ノ木地区を面的に結ぶため、平成22年度から行っている東西大路復元とその遺構説明板、昨年度新設した見学者用トイレ東側に活用などに使用する多目的広場を造成した。

### 説明板について

説明板については野外に設置することから、いたずらや当地の厳しい自然条件に耐えうる材を選定することとし、 $100\mu$ 厚の無機顔料印刷を行った上で $100\mu$ 厚のガラス釉を施し800度で焼成し、さらにその上から $150\mu$ 厚のガラス釉薬を施し820度で焼成することによりモース硬度6の硬さを持つほか、塩害や凍害などに対する耐久性があるホーロー製を採用した。

ホーロー製の説明板は、平成21年度にも政府地区に設置しているが特に異常は認められない。

工事の概要は次のとおりである。

実施地区 大畠地区

整備面積 1,846m<sup>2</sup>

工種	細目	数量	金額(千円)	備考
敷地造成工	土工	1式	299	切・盛土
園路広場工	法覆工	1式	120	人力盛土法面整形、野芝張芝
	舗装工	1式	757	RC-40 t=150mm
遺跡表示工	表示工	1式	3,294	大路表示 (W=13.5m、L=15.5m)
修景施設工	芝工	1式	349	野芝張芝
	伐採工	1式	792	伐採等
便益施設工	説明板	1式	1,611	男鹿石、ホーロー板 (0.8m×1.0m)
直接工事費計			7,222	



六一〇一製構造説明板



大路完成状況（西から）

## VI 秋田城跡保存活用整備事業

史跡秋田城跡を、市民の郷土学習の場として有効活用を図るために、平成25年度は下記の事業を実施し、全体で9,393名の参加者があった。

### 1 学習講座（6月20日～22日）

一般市民を対象に、秋田城跡全般について、発掘調査成果、文献史料、環境整備事業等を学んでもらう市民講座を開催した。郷土学習の機会として秋田城跡の周知を図るとともに、ボランティアガイド養成講座も兼ねて実施された。参加者23名。

### 2 史跡秋田城跡パネル展（8月2日～8月30日秋田市ポートタワーセリオン、9月7日～10月6日

秋田市民俗芸能伝承館旧金子家住宅、1月15日～2月16日北部市民サービスセンター）

市内の観光施設等の展示会場3箇所で、一般市民、近隣の小中学生を対象に、秋田城についてわかりやすく解説したパネル展を開催した。また、パネル展のテーマに合わせた「秋麻呂くん通信」を発行し、会場で配布している。平成25年度のテーマは「秋田城跡一城門（外郭施設の門）一」で行った。見学者は、ポートタワーセリオン2,919名、民俗芸能伝承館2,595名、北部市民サービスセンター972名。

### 3 史跡探訪会（7月6日）

史跡内の自然観察会を開催した。市街地内にありながら、良好に保存された自然環境の観察を通じ、史跡指定による環境保全の側面も理解してもらうことを目的とし、史跡内を散策し、野鳥観察等を行った。参加者8名。

### 4 発掘体験教室（7月27日）

小学校を対象に発掘調査を実際に体験することを通じ、地域の歴史や秋田城跡への理解と関心を深めてもらうことを目的として体験教室を開催した。参加者16名。

### 5 第102次発掘調査現地説明会（8月24日）

焼山地区北部の発掘調査成果を公開した。参加者90名。

### 6 史跡散策会（9月28日）

一般市民を対象に、ボランティアガイドの説明による史跡内の散策会を開催した。ボランティアと共に、郷土学習の機会として秋田城跡の周知を図る目的で開催され、史跡公園と整備が完成した政府跡を中心に散策と解説を行った。参加者9名。

### 7 東門ふれあいデー（10月6日）

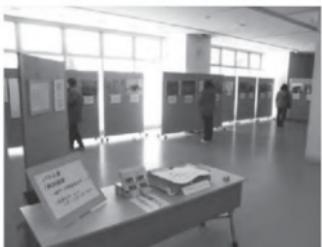
秋田城跡外郭東門周辺を会場として、史跡の保護と活用を推進するために、地域住民と共同で各種イベントを開催した。ボランティアガイドの会等関係団体、地域住民による支援団体、地元町内会からなる実行委員会の主催、運営で行われ、調査事務所として情報発信のためのパネル展示、のぼりの製作・活用、リーフレットの配布等を行った。参加者2,600名。

### 8 出前講座（7月16日、7月22日、11月20日）

近隣の高清水小学校3年生、市内の御所野学院中学校1年生、浜田小学校6年生を対象に、秋田城跡について、出土遺物や遺構の画像等を用いて解説する講座を実施した。生徒に秋田城跡への関心や理解を深めてもらう機会とするため、郷土学習の授業の一環として調査事務所職員が講師となり授業を担当した。参加生徒数は合計で161名。



1 学習講座



2 秋田城跡パネル展



3 史跡探訪会



4 発掘体験教室



5 第102次調査現地説明会



6 史跡散策会



7 東門ふれあいデー



8 出前講座